2009 3



Architecture and Society
建築と社会

特集/東海—TOKAIオムニバス

日本建築協会

YKK ap



FACADE
DESIGN&
ENGINEERING

YKK APは、さまざまな様式の
建築ファサードの具現化を
ものづくりの視点に立った
デザイン＆エンジニアリングで
お応えいたします。



YKK AP株式会社 ビル建材事業部 名古屋第一支店
〒460-0008 名古屋市中区栄2-11-32 http://www.ykkap.co.jp/facade



ブロードバンドと環境で社会に貢献

TODENTSU

事業内容
通信インフラ（光回線・モバイル関連・通信基盤設備）
IP／ITソリューション、総合設備（電気・照明・空調）
環境・リニューアル（燃料電池・太陽光発電・埋立処分場再生）

株式会社 東電通
〒541-0045 大阪市中央区道修町1-3-1
TEL 06-6233-5115 http://www.todentsu.co.jp

平成20年度 第2回通常総会開催

平成20年度第２回通常総会を右記のとおり開催いたしますので、ご出席頂きますようお願いします。

と　き　平成21年３月25日（水）
午後4時から4時40分

ところ　大阪マーチャンダイズ・マートビル
２階１号会議室
大阪市中央区大手前1-7-31

議　案　・第１号議案
平成21年度事業計画(案)の件
・第２号議案
平成21年度収支予算(案)の件
・第３号議案
和歌山支部廃止の件　ほか

なお、開催通知は個人正会員、団体正会員あて別途送付いたしております。
ご欠席の場合は『返信用ハガキ』にて必ず委任状の送付をお願いします。
お問い合わせ先：（社）日本建築協会　総務課　06-6946-6981

お知らせ 4月号からの新連載 「再読 関西近代建築―モダンエイジの建築遺産」

周知のように関西一円には近代建築の名作の多くが蓄積されています。それらの多くは、やがて100周年を迎える日本建築協会の歩んだ時代そのものを物語るものです。
そこで、往時の『建築と社会』誌上で報じられてきた話題の建築記録を活用し、個性豊かな近代建築を再読し、歴史的かつ今日的な意義と見所を論じ、紹介いたします。
本企画に際し、『建築と社会』史料研究会（日本建築協会80年史ワーキンググループの継承研究会）を置き、企画及び執筆をすすめます。建築種別ごとに５、６回を１つの節とし、初回として「ビルディングの名作」から始めます。
どうぞご期待下さい。



第8回 読者と選ぶ「建築と社会」賞のためのアンケート募集

2008年1～12月号「建築と社会」誌から

2008年12月号掲載の総目録をご参照下さい。

「建築と社会」という本誌の趣旨にふさわしい社会性・環境などに配慮した有意義な建築作品や建築にかかわる論文・記事などを顕彰する。
選考にあたっては、会員の声を反映し、広く開かれた賞とする。

■選考対象
本誌「建築と社会」2008年１月号～12月号に掲載された作品及び個別の論文・記事を対象とする。
・「作品作風」欄掲載の建築作品
・「本会支部作品賞及びそれに準ずる作品賞」掲載の建築作品
・「特集頁」掲載の論文・記事―ただし特集頁全体は選考対象としない―
・「シリーズ頁」の記事（研究の風景、gallery、法令コーナー、構造の頁、設備の頁、新建材の頁、REPORT）

■投票締め切り日
2009年４月３日(金)

■賞の部門
・作品部門　１～４点
・論文・記事の部門　１～４点

■選考方法
会員読者による第一次選考を経て、選考委員会による第二次選考にて決定する。第８回選考委員は交渉中。

■発表と表彰
作品部門は建築主、設計者、施工者の中の代表者に賞状（記念楯）を贈呈する。論文・記事部門は執筆者（複数の場合は代表者）に賞状（記念楯）を贈呈する。

「建築と社会」賞 読者アンケート

送付先
㈳日本建築協会
FAX06-6946-6984
e-mail：kyoukai@aaj.or.jp

「建築と社会」では読者の方々のご意見を参考に、充実した誌面づくりをめざしております。2008年１～12月号で、とくによいと思われた作品、記事、その他についてのご意見をFAXまたはe-mailにてご送付下さい。
このご意見は、読者と選ぶ第８回『建築と社会』賞の１次選考に反映されます。

□とくによいと思われた作品とその理由

□とくによいと思われた記事とその理由

□本誌についてのご意見や、取り上げてほしい内容などがありましたらご記入下さい。

お名前＿＿＿＿＿＿＿＿＿＿

勤務先＿＿＿＿＿＿＿＿＿＿

今年は9月号掲載で、応募締め切りが6月30日となります!

若き創造者たちへ

「建築と社会」平成21年9月号
「第56回青年技術者特集号」へのおさそい

日本建築協会誌「建築と社会」は毎年「青年技術者特集号」を企画し、すでに55回にわたって若き優秀なプランナー、アーキテクト、エンジニアをめざす人たちを紹介してきました。

今回も、青年技術者選考委員会を設けて、青年技術者を選考いたしますが、昨今の建築に携わる技術者の多様化を考慮し、設計だけに限らず、計画、構造、設備、施工およびその他広く、建築に関連する分野から、優秀な青年技術者を募って、その不断の研究努力とすぐれた実績への情熱などを、「建築と社会」に掲載し、顕彰することにしております。

56回の企画にあたり、日常目立たない対象の実績も含めて、優秀な実績を積まれている青年技術者のみなさまのご応募をお待ちしております。

応募提出規定

1．応募される人は満35歳（平成21年７月31日現在）以下の青年技術者であって、本会個人会員に限る。

2．原則として、本会会員であるすいせん者を通じて応募する。

すいせん者は被すいせん者（青年技術者）の勤務する組織の上司か上長とする。すいせん者が学校教官である場合はこの限りでない。また本人が組織の代表者である場合は自せんとする。

3．応募分野は特定しない。応募者は、たとえば計画、一般設計、住宅・インテリア設計、構造、設備、施工、技術開発、行政、情報、コーディネート等々その他の分野にあって、なしとげたすぐれた実績について、すいせんをうけ、下記の所要の資料を1部、本会に期日までに提出する。

4．提出された資料は「青年技術者選考委員会」にかけて選考する。（なお、提出資料は特に指示のない限り返却はいたしません）

5．「青年技術者選考委員会」において選考された青年技術者は「第56回青年技術者特集号」（平成21年９月号）に掲載するとともに、表彰式を行い、記念品を贈呈する。

6．**提出資料**

■すいせん用紙

請求は、すいせん依頼先担当部署、または本会事務局へ。

■略歴

本人の氏名、生年月日、最終学歴、業歴、作品経歴など

■選考資料

資料は、④を含めて**A3判用紙5枚以内にまとめる。**

①　設計の場合――鮮明な写真、配置図および主要平面図、概要、設計要旨、その他設計内容を説明するに十分な資料

②　計画、構造、設備、施工の場合（それぞれの設計計画なども含む）――上に準じた資料

③　上記以外の分野の場合――それぞれの分野にふさわしい資料

④　上記①～③のいずれかの資料の実績において、応募者本人が関与した程度、役割、立場等を明らかにし、資料中、**本人が特に貢献した部分、または力量が活かされたと思われる部分の詳細な説明、考え方および将来的展望などについて、2000字以内に平易簡明にまとめたもの**（必要に応じ、図・表を用いて差し支えない）。ただし応募者本人の執筆に限る。**このコンセプトは、応募者の考え方を知る上で大変重要と考えているので、十分配慮されたい。**

7．**提出期限**　平成21年6月30日（火）

8．**提出先**　日本建築協会「青年技術者選考委員会」
〒540-6591　大阪市中央区大手前1-7-31
大阪マーチャンダイズ・マートビル7階
電話 06-6946-6981　FAX. 06-6946-6984
Email：ken-sha@aaj.or.jp

9．**青年技術者選考委員会**（平成21年度）

委員長　設楽　貞樹／安井建築設計事務所常務取締役

委　員



平成18年度から、青年技術者の公募は早めています。第56回青年技術者は、本年6月30日(火)までに応募できるよう準備をお願いします。

作品募集！大阪「かくれたええとこ」再発見コンクール



2009 第1回 OSAKA

大阪「かくれた ええとこ」再発見コンクール

あなたが「もっと知ってほしい」
「もっとよくしたい」と思う
大阪市内のおもろい場所やけったいな風景を
写真にとって応募してください。

「おもろいとこ」「けったいなとこ」と感じるところは、人によって様々です。
高架下の怪しげな空間だったり、歴史的な神社の参道であったり、だだっ広い駅前の広場だったりします。
そんな思いもよらない楽しい場所や不思議な風景の発見を期待しています。

■コンクール対象エリア
大阪市内

■提出
選んだ場所、建造物等をA4サイズ以下の写真にとり、題名をつけて、住所、氏名、電話番号、選んだ理由を応募用紙（ホームページ http://www.aaj.or.jpからダウンロードできます）に明記して提出

■応募資格
制限なし

■賞
最優秀賞（１点）賞金10万円、入選（７点程度）賞金各２万円

■審査員
橋爪紳也（大阪府立大学特別教授
大阪府立大学観光産業戦略研究所長
建築史家）

■応募締切
2009年３月31日（火）当日消印有効
郵送、宅配便、持参いずれも可
（持参は当日17：00まで）

■送付先（問合せ先）
㈳日本建築協会
〒540-6591　大阪市中央区大手前1-7-31　OMMビル７階

■審査発表
2009年４月下旬
審査結果については、日本建築協会のホームページ、及び会誌「建築と社会」等で公開いたします。

■その他
・応募作品は原則として返却しません。
・応募作品の著作権は主催者に帰属します。

■主催
社団法人　日本建築協会

■大阪「ええとこ」そうせい(創生)プロジェクト とは
社団法人日本建築協会は、2017年に創立100周年を迎えます。その記念事業のひとつとして「大阪ええとこそうせいプロジェクト」を企画しました。このプロジェクトは、普段見過ごされそうなまちの資源を発掘し“こうしたらもっとよくなる”“もっといきいきする”等のアイデアを2017年まで様々なテーマで募集することにより、まちづくりや町おこし、賑わい作りに役立てていくことを目的とします。
今回の大阪「かくれたええとこ」再発見コンクールはその**第1弾**です。

主催／社団法人日本建築協会
後援／大阪市・財団法人大阪市都市工学情報センター（『大阪人』発行元）
協賛／関西電力(株)・(株)日建設計・(株)安井建築設計事務所・(株)東畑建築事務所・(株)竹中工務店・(株)大林組
(株)シブタニ・(株)INAX・(株)ユニオン・(株)きんでん・東リ(株)（順不同）

詳しくは㈳日本建築協会のホームページをご覧下さい。



「日本建築協会80年史1917-1996」

増刷頒布中　頒価　3,000円

1999年７月に発刊した「日本建築協会80年史1917-1996」は、各方面から好評をいただいておりますが、このたび、皆様の強いご要望により、増刷・頒布することにいたしました。大正６年３月30日に関西建築協会として誕生した日本建築協会の80年の歴史を、様々な事業や委員会活動を通じて、また、本会設立者の片岡安、武田五一以降現在までの会員たちの社会活動を通して知ることができる記念誌として、A4判・240頁にまとめています。

とくに、協会草創期の大正・昭和初期の片岡安ら協会のメンバーと当時の大阪市長・関　一との交流を物語る一文は、大阪の都市計画史、あるいは関西の建築人物誌ともなっています。本会の歴史を知るだけでなく、建築を通して、それぞれの時代の雰囲気を身近に感じることができる大変貴重な資料となるものです。

購入ご希望のかたは、下記要領でお申し込み下さい。

＊

申 込 先　社団法人 日本建築協会
〒540-6591　大阪市中央区大手前1-7-31
大阪マーチャンダイズ・マートビル7階B室
TEL 06-6946-6981　FAX 06-6946-6984

頒　　価　１部3,000円（税・送料込み）

※増刷部数には限りがございますので、お早めにお申し込み下さい。

「日本建築協会80年史」……

A4判・240頁・並製本

●日本建築協会の沿革／委員会活動／「建築と社会」の変遷／大正時代から現在までの本会主催の博覧会・展覧会・講演会／よろず相談住宅展／青年建築家・青年技術者顕彰／工高生デザインコンクール入選者etc.

●日本建築協会創立者と会を支えた38人のプロフィール（片岡　安・設楽貞雄・武田五一・池田　實・波江悌夫・竹腰健造・尾崎久助・東畑謙三・塚本猛次・福田朝生・佐野正一・葛野壯一郎・横濱　勉・松本禹象・宗　兵蔵・園部文雄・日高　胖・野村一郎・古宇田　實・松室重光・松井貴太郎・安井武雄・中澤誠一郎・坂　靜雄・今林彦太郎・井上新二・松本儀八・池田宮彦・錢高輝之・中西六郎・大林芳郎・鴻池藤一・伊東五郎・竹中錬一・鷲尾健三・松村雄吉・横尾義貫・足立　孝）

●座談会「戦中から戦後初期の協会活動」―尾亀清四郎・大林芳郎・小西　岬・佐野正一・横尾義貫・三品哲夫の6氏による終戦前後の協会活動の証言―

＊

■執筆ワーキンググループ

坂本勝比古／安達英俊／石田潤一郎／植松清志／梅宮弘光／桐浴邦夫／酒井一光／橋寺知子／山形政昭／吉田高子／和田康由

■80年史編纂委員会

長谷部朔郎／安達英俊／近藤達夫／谷淳之介／十倉　毅／原見昌志／和田康由／吉田悦二



「日本建築協会の遺産と功績」（坂本勝比古）より



「草創期の人々」より片岡安の項

建築と社会

Architecture and Society

2009
No.1044
日本建築協会

3

■特集予告
4月号／楽しい福祉
5月号／空間と感じることの関係

編集委員会（平成20年度）

■副会長
井上　豊
松村　孝治
■編集担当理事
上原　正行
木戸　徹
佐藤　栄一
佐藤友美子
◎設楽　貞樹
竹中　統一
立成　良三
松村　孝夫
吉村　英祐
■特集小委員会
■計画分科会
★計画系
△飯田　匡
飯沼　清明
鈴木　克彦
田中　慎治
田中　直人
紅谷　昇平
松田奈緒子
三宅　次郎
守井　辰
吉村　英祐
★建築計画系
荒木　宏之
奥村　朋孝
菅野　忠司
△神戸　嘉也
木多　彩子
楠　敦士
静　茂夫
下坂　浩和
所　千夏
野田　隆史
枇杷　健一
松森　織江
米山　剛史
★インテリア・住生系
阿部　泰浩
加藤　力
△神谷　浩司
黒柳　亮
高野　直樹
田中　浩介
戸井賢一郎
ペリー史子
本山　仁
■構造分科会
秋田　智
岸本　光平
小芝　淳一
志摩　好宣
瀧野　敦夫
中塚　光一
難波　尚
西田　大三
△房安　智也
松村　健
向井　洋一

■設備分科会
△赤澤　正治
梶井　宏修
河井　康人
北野　勝也
谷野　太志
夏井　重行
福谷　周
桝井　貴廣
村上幸三郎
山下　修
渡邊　裕之
■施工材料分科会
△桜井　和男
下迫　力
平田　茂良
藤丸　啓一
山岡　篤人
吉田　正友
■法令分科会
伊賀　誠
片岡　正和
金本　忠義
河野　学
坂本　智生
△谷本　和子
中迫　悟志
文山　達昭
■作品作風小委員会
○居内　章夫
池上　明
稲垣　和江
井上　雅祐
岩佐　進
加嶋　章博
倉渕奈千子
澤田　純一
戸川　勝之
牖野　淳司
豊田　充広
鳥居　久人
長堀　晃治
西田　佳代
芳谷　晴彦
増田　敬彦
山田　俊紀
■広告企画小委員会
上田　訓将
宇城　英彦
江本　孝弘
○虎谷　伸幸
○前田　衛
南澤　浩司
森川　幸信
■10年委員会
赤木　隆
川上比奈子
熊田　将男
河野　浩司
齊藤　幸代
菅原　幸也
中村　文紀
○前川　治彦

◎委員長　○副委員長　△幹事

本文　デザイン　高橋　善丸
印　刷　2009年2月25日
発　行　2009年3月1日
発行人　社団法人日本建築協会
発行所　社団法人日本建築協会
大阪市中央区大手前1-7-31
電　話　06-6946-6981
振替口座　00910-9-39975
印刷所　㈱NPCコーポレーション
定　価　1200円〔税込〕

Journal of the Architectural Association of Japan

特集　東海-TOKAIオムニバス

■東海支部会員作品
刈谷豊田総合病院新病棟 — 12
介護老人保健施設「やまゆりの里」 — 14
名古屋臨床検査センター　附属診療所 — 16
河合塾　札幌校 — 17
知多信用金庫緒川支店 — 18
いちい信用金庫　新本店 — 20
スペース名古屋本部ビル — 22
オークマグローバルCSセンター — 24
京寿楽庵本社工場 — 26
東レオートモーティブセンター — 28
新東工業株式会社『東寿庵』 — 29
世界心道教浄知教会 — 30
T. Gate House — 32

■街道・宿場町シリーズ
序文にかえて—飯田街道・足助街道から三州街道への道—●河田克博 — 34
足助街道を歩く●野本欽也 — 36
足助における歴史的町並の保存・修景—まちづくりのあゆみ—●大森峰輝 — 40
稲武宿●野田理吉 — 42
飯田市下伊那の三州街道●金澤雄記・竹ノ内雅人 — 44
現在の三州街道を行く●林　金之・松本壮一郎・今津芳清・前田薫子 — 48

■東海建築：鉄骨
—しなやかに浮かび上がる屋根—トヨタ葵体育館●鈴木貴紀・渡辺俊治・浅野三男 — 50
—ecoとdesignの両立— e-生活情報センター「design no Ma」●長谷川　寛・山田基裕 — 51
—捩じれた超高層建築を精度の高い鉄骨でつくる—モード学園スパイラルタワーズ●山脇克彦 — 52

■東海支部会員が語る
座談会　35歳はターニングポイント　新旧青年技術者表彰者に聞く
●野村昌宏・寺西敦敏・石原清孝・小柳英治・塩田哲也・若林　亮 — 54

会告　平成20年度第2回通常総会開催．お知らせ　4月号からの新連載「再読 関西近代建築—モダンエイジの建築遺産」．第8回読者と選ぶ「建築と社会」賞のためのアンケート募集．若き創造者たちへ—「第56回青年技術者特集号」へのおさそい—．作品募集！ 大阪「かくれたええとこ」再発見コンクール　1

作品作風　阪急西宮ガーデンズ　6

研究の風景　都市情報研究室（筑波大学理工学群社会工学類）　8

gallery　家路の街明り（澤田隆一）●西田佳代　10

法令コーナー　全国建築審査会協議会●宮川和久　59

構造の頁　E-ディフェンスにおける既存木造住宅の耐震性能検証実験　60
●三宅辰哉

information　「平成21年経済センサス・基礎調査」の実施．平成21年3月1日～3月7日は建築物防災週間．「国土技術開発賞」の募集．大阪市ハウジングデザイン賞受賞作決まる．松柏美術館花鳥画公募展開催．特集展示「唐絵師・福原五岳」．伊達伸明「建築物ウクレレ化保存計画」作品展．インシデンタル・アフェアーズうつろいゆく日常性の美学．「イタリア美術とナポレオン」京都文化博物館で開催．公開研究会「まちづくりの視点からみた京都市新景観政策の一評価」．企業ミュージアムの協会で見学会　61

会員の横顔　川上貢さん —「大阪市立電気科学館70年記念誌」で建築設計を施工監理の役割分担を考察　63

REPORT　コプレンツ雲井●設楽貞樹・河内厚郎　64

crossroads　建築図書8点紹介　65

月間の動き　平成21年1月分　66

企画　間渕 一博　　企画・写真・デザイン　花城 辰男

「瓦」
時代劇の名優大河内傳次郎が築いた大河内山荘は、小倉山南面の起伏を生かし、随所に茶室や民家を配した回遊式借景庭園です。「瓦」敷きの小道には多数の瓦紋章が埋め込まれ、傳次郎と庭師の創意によって、独特のリズム感と京の風情を鑑賞することができます。（間渕一博）
「大河内山荘」…京都市右京区嵯峨小倉山（075-872-2233）

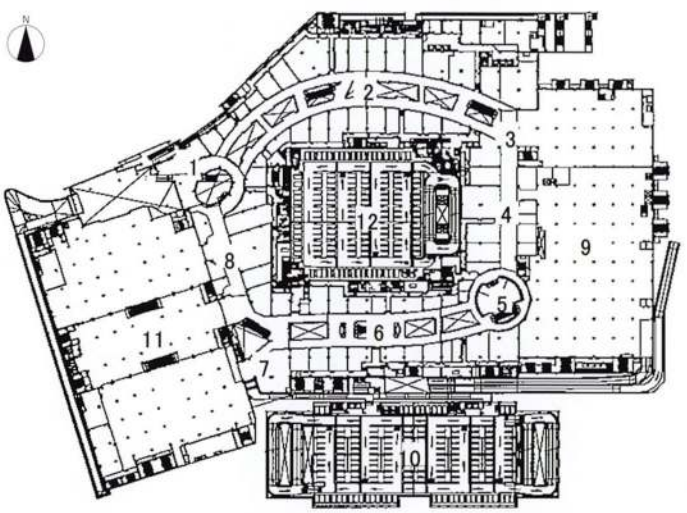
北西メインエントランスタ景　＊


スカイガーデン

所在地	西宮市高松町14-2
敷地面積	70,494.76㎡
建築面積	54,878.14㎡
延床面積	247,369.13㎡
構造規模	SRC、RC、S造　B1F、7F、P2F
工期	2007年10月～2008年11月
最寄駅	阪急電鉄神戸線・今津線　西宮北口駅
撮影	清水向山（＊）、竹中工務店写真室

1　ウェルカム・ガーデン　2　北モール　3　ハミング・ガーデン
4　東モール　5　フェスティバル・ガーデン　6　南モール
7　クリスタル・ガーデン　8　西モール　9　総合スーパー
10　南駐車場　11　百貨店　12　中央駐車場


北側外観　＊



3階平面図　1：3500

作品集

事業主■
阪急電鉄株式会社

基本設計・実施設計監修・監理監修■
安井建築設計事務所

実施設計・監理■
竹中工務店

施工■
竹中工務店

阪急西宮ガーデンズ

■基本計画・基本設計

2002年、数々の歴史を刻んだ阪急西宮球場は閉鎖、その後、阪急電鉄株式会社の中で事業計画が検討され、2004年７月基本設計・基本計画のプロポーザルによりこの施設の具体的な計画が始動することとなった。

ほぼ正方形に近い敷地形状の特異さ、周辺地域状況への配慮とショップフロント延長の最大化、モールへのアクセスの至便化を両立させる解決策として本邦初となる中央部に駐車場を内包するサーキットモールを計画した。また中央駐車場の屋上部分には大規模な庭園―スカイガーデン―を配置した。

このスカイガーデンと大規模な壁面緑化などにより新しい西宮北口のまちづくりの顔となる、十分な自然を感じられる、上質な空間づくりを目指し、都市型大規模ショッピンセンターの先駆けとなるべく基本計画・基本設計をまとめた。

（増井康朝／安井建築設計事務所）

■実施設計

実施設計では、施工性の合理化を図るとともに、機能性、空間性、また安全性においても建築の質を向上させることをめざした。

具体的には構造計画の見直しによるRC耐震壁の採用、駐車場計画全体と設備計画の再検討による地下面積の低減、全館避難安全検証法の採用による避難階段とモールの吹抜けに面した防火シャッターの数量低減等である。

外装デザインは、RC壁ならではの表情を持ったデザインとすると同時に、圧倒的なスケール感を少しでも緩和するために、巨大な建物をブロックごとに分け、それぞれのエリアによって異なる個性的な表現をとっている。

またインテリアは、防火シャッターの低減により開放的なモール空間を実現、１周約450mというサーキットモールを退屈せずに回遊できるよう、東西南北それぞれのモールとその結節点であるガーデンに、その場所に応じた個性ある表情をあたえた。

（野田隆史／竹中工務店）



航空写真



北モール



フェスティバル・ガーデン



南モール



クリスタル・ガーデン



西モール

研究の風景

筑波大学
理工学群・社会工学類

都市情報研究室

■概要

筑波大学では、一般的な工学部におけるように、建築学にかかわる分野が一つの学科として纏められていない。意匠を専門とする教員の多くは芸術専門学群・デザイン主専攻に、歴史を専門とする教員の多くは人間総合科学研究科・世界遺産専攻に、構造・材料を専門とする教員の多くは理工学群・工学システム学類に、そして計画系の教員の多くは理工学群・社会工学類・都市計画主専攻に所属しており、それぞれが学際的な領域の中で活動をしている。

このような実情は、外部から見ると極めて理解しづらくプレゼンスが認識されづらい状況かもしれない。しかし社会工学類だけでも、建築学をバックグランドとする教員が８名在籍しており、全学でみるとその人数は通常の建築学科の教員数と同等かそれ以上であろう。

都市情報研究室は、渡辺が筑波大学に赴任後の1995年春に活動を開始した。都市計画主専攻では一人の教員に付くことができる卒業研究の学生は最大３人までと定められており、院生を含めてもせいぜい10名程度と、それぞれの研究室の規模は比較的小さい。そこで実際的には、一般的な研究室・講座とも異なる柔らかな枠組みとして、ほぼ同時期に大学に赴任した建築史・都市史が専門の藤川昌樹先生と共に、その後1999年からは都市計画・住宅問題が専門の吉田友彦先生（現：立命館大学政策科学部）も加わった研究グループとして、様々な活動で連携してきた（**写真１**）。



写真１　研究グループの面々



図１　卒業設計

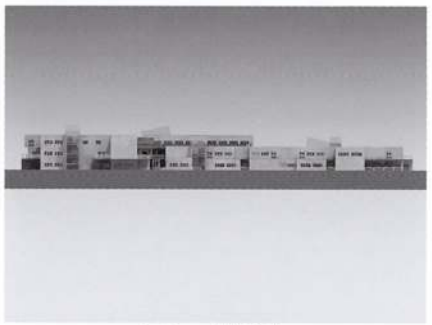


図２　卒業設計

■学生

社会工学類では、大学４年次になると研究室への配属が決まるとともに、卒業研究がスタートすることになる。卒業研究は基本的には卒業論文であるが、卒業設計も認められており、都市情報研究室では卒業論文と卒業設計（**図１、２**）の割合は概ね２：１である。また、社会工学類は文理融合のため、全体としての大学院への進学率は一般的な理工系学部ほど高くないが、当研究室では８割がたの学生が大学院に進学してきた。

学生の研究テーマは特に強制せず、計画基礎系からまちづくり系まで、建築計画学的な志向に沿ったものであれば、学生の興味に応じた幅広い課題を探求させている。一例を挙げると、三次元モデルによる指定容積率と実際容積率のシミュレーションとその評価、公共建築における設計者選定手法の変遷とサポート主体に注目したプロセスの検証、「地域づくりインターン」事業の取り組み内容に見る地域内外への影響と効果、街路形態が歩行者の経路探索に及ぼす影響に関する研究、大学キャンパスにおける電子情報活動と空間利用に関する基礎的研究、アート集積地の特性と創造環境整備に関する研究、都市内における電子情報活動に関する研究、などである。

■研究テーマ

教員個人の関心は、建築・都市計画に有効な情報技術の開発・普及および、情報技術自体の普及による建築・都市空間の将来的な変容についてである。

前者に関しては、最近では、写真測量技術の援用による正確な都市モデルの構築などを実践してきた。今日、コンピュータ・グラフィックスを利用した三次元都市景観シミュレーションは、建築・都市計画の現場で広く普及している。しかし、そこには大きな技術的欠落が残されている。データの精度の問題である（**図３**）。計画中の建築物や著名なランドマークについては、正確な寸法に基づき極めて詳細に作成されるが、周辺の建物については、アナログの地図や航空写真を元にトレースした相対的に精度の低い輪郭データを元に適当な高さだけ引き伸ばした単なる柱状体にすぎない場合がほとんどである。

提案される建築・都市計画案を景観シミュレーションにより的確に評価するためには、一貫した適切な精度で景観全体を再現できる簡便な手法が必要なのである。街区

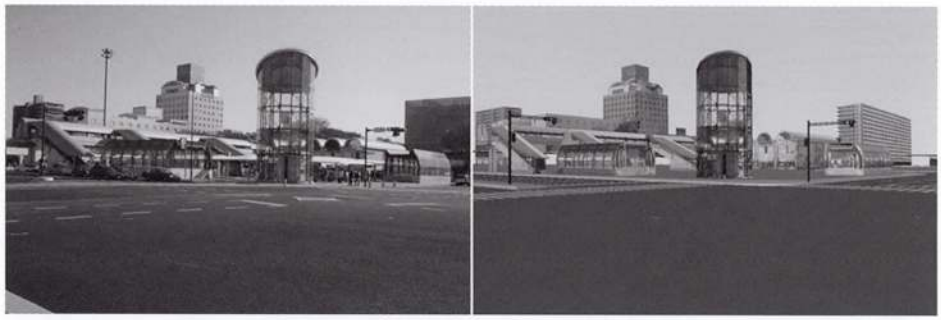


図４　実写と景観シミュレーション

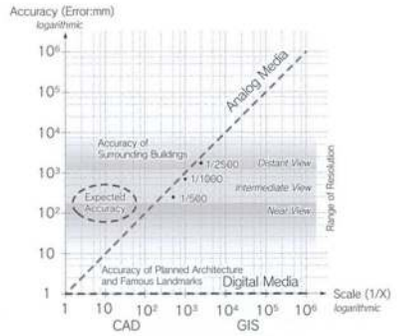


図3　縮尺と精度

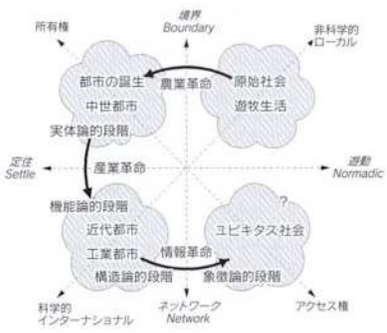


図5　都市の未来

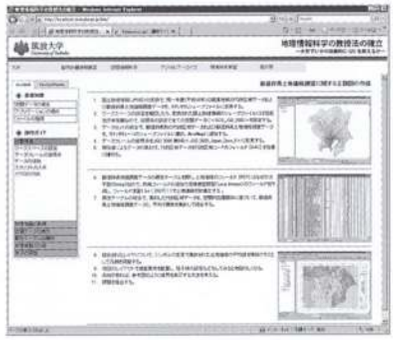


図7　GISのためのE-Learning

全体で一貫した精度の都市モデルを構築するための手法を様々試行してきた結果、簡便な方法で概ね誤差は約±25cmで再現できるまでに至った(**図4**)。これらの成果は、国際会議CAADRIA2008にて最優秀論文の栄冠にも輝いた。

後者に関しては、主に専門書籍の輪読を経た翻訳出版などが活動の中心である（最近では、2006年に「サイボーグ化する私とネットワーク化する世界」としてNTT出版より刊行)。それらの中で強調されていることは、情報革命により近代的計画学の拠り所としての機能と形態を物理的レベルでのみ最適化したり調整すること自体が無意味になりつつあるという、建築計画・都市計画の根幹にかかわる指摘である。特に最近のユビキタス化の展開の中で、人間(行為）と空間（場所）とのこれまでの固定的・個別的な関係はますます希薄になり、それらの関係は多様化・流動化してきている。

顧みれば今日、我々が当たり前と思っている価値観も、極めて近代的な時間と空間の中で構築されたものであり、決して普遍的なものではない。今日の建築・都市のパターンも決して普遍的な生活空間の体現ではなく、産業革命を経て拡張された人間活動の一つの結果として出現したものにすぎない。情報革命が、建築・都市・社会・経済の構造を大きく転換させることになり、これまでの近代的計画プログラムを無効にしようとしている。

来るべきネットワーク・遊動型社会では、所有権よりもアクセス権の方が、はるかに重要になる。即ち、物を持っている事自体にはほとんど価値が無い。むしろ、使いたいときに使える環境にあることの方が重要になる。これらについては、今後もさらに論考を深めることで、新しい計画学の枠組みの構築を目指している（**図5**)。

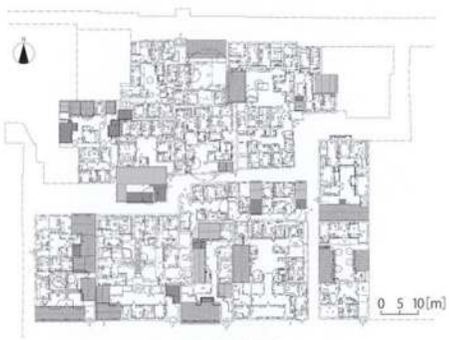


図6　実測調査

■科研プロジェクト

現在、科学研究費補助金を受けた取り組みとしては、北京の都市計画に関するプロジェクトとGIS（地理情報システム）教育に関するプロジェクトがある。

前者は、先の藤川昌樹先生・吉田友彦先生らとともに、10年以上継続している清華大学・建築学院との共同研究である。これまで、四合院街区の実測調査（**図6・写真2**）などを通じて旧城内の伝統的市街地の過去・現在・未来について多角的な分析を重ねてきた（2008年に「北京の四合院」として中央公論美術出版より刊行)。その後、旧城外に視点を移し、現在は北京オリンピックに向けて急速に進行してきた郊外化の問題に取り組んでいる。

後者では、他の都市計画専攻の教員や地理学分野の教員らとともに、全学的なGIS教育のためのフレームの構築を目指してきた。その一環として、ArcGISのキャンパスサイトライセンスを運用するとともに、GIS教育のためのE-Learningのシステム構築を進めてきた（**図7**)。システムはまだ試行段階であり、一般に公開していないにも関らず、口コミで伝えられているためか、既に外部から参照されたアクセスログが数多く記録されている。これらはGIS教育・学習への関心の高さの表れでもあり、研究プロジェクトの最終段階では開発したe-learningシステムを配布することも検討している。

■同窓

学生たちの卒業・修了への餞として、最近は、先の翻訳本のあとがきに記した「都市はツリーではない。しかし、セミラチスでもない。今や都市はデュアルネットワークなのである。」という言葉を、含意を込めて送ることにしている。概ね15年を経過して研究室を巣立って言ったOB/OGも43名に至り、国内外の大学・企業・行政など様々な分野で活躍し始めた。社会工学類では、１年に10人ずつ卒業生を呼んで順番に現場の話をしてもらう都市計画事例講義という授業がある。そんな機会を通じて、研究室を訪ねてくれる彼らとのネットワークを今後も大切にしていきたい。

（文責　渡辺　俊）



写真2　四合院の中庭のパノラマ映像



まち　建築　ひと

gallery

家路の街明り

照明デザイナー
澤田 隆一 Sawada Ryuuichi
サワダライティングデザイン&アナリシス

1964　福岡生まれ
1987　武蔵野美術大学卒業
　　TLヤマギワ研究所
1990　LPA
2004　S.L.D.A.設立

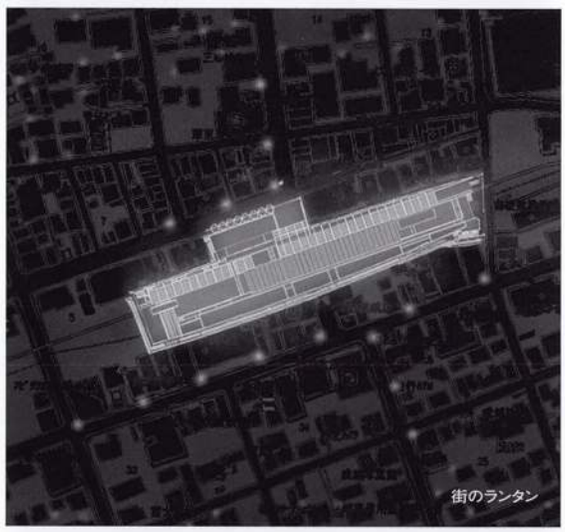
http://www.slda.co.jp

企画編集：西田佳代(作品作風小委員会)

成城コルティは、地下の“成城学園前駅”と一体的に建設された地上４階建ての商業施設である。共用部は風通しの良い半屋外空間となっており、閉鎖的な外壁を持たないため、駅を境に南北を分断することなく互いの往来を促す役割を果たしている。
施設の中心となるアトリウムは高さ20m、全体がガラスの大屋根に覆われている。ガラスの大屋根は時間の移ろいと共に明るさが変化する“街のランタン”である。
日中は十分に光が差し込むため、吹き抜けまわりの照明は消灯される。大屋根のライトアップは日没の１時間前に点灯され閉館までの間、３段階に分け明るさを下げていく。夜間、駅の改札を出て家路を辿る人々はこの光に出迎えられる。

パブリックスペースの大半に白熱灯（ハロゲンランプ）を使用している。調光制御により時間とともに明るさを下げていく演出を行うことで、通常のショッピングモールよりも少ない電力量と長いランプ寿命を実現している。

白熱灯は太陽や炎に近い光質を持ち、我々の心を癒す力も大きい。ランプにはそれぞれ長所と短所があり、単純に発光効率だけで光源を選ぶことは、環境創造の幅を狭めることになる。「適光適所」の発想で上手に省エネルギーを図りながら豊かな光環境を創造したい。


街のランタン



東海―TOKAIオムニバス

“東海の風”

東海支部特集として支部会員作品集と本文特集〈TOKAIオムニバス〉を企画いたしました。
支部会員作品集は今こそ壊滅状態ともいえるこの東海地区ではありますが、昨年の上半期までの好調さを示すようにバラエティーに富んだ13作品が集まり、ここ数年間で最も多い作品数となりました。
新シリーズ4年目となります「街道・宿場町シリーズ」は今までのシリーズの様なポピュラーで明確な街道ではなく、三河湾で取れた三州塩を舟と馬を使い信州まで運んだとされる「塩の道（幻の街道/三州街道）」に焦点を当ててみました。大変興味をそそられるシリーズになったのではないかと思います。
「東海の建築事例紹介」は“スティール”をテーマにした事例紹介を試み、「支部会員が語る」は2010年の東海支部復活50周年に向け、新旧の“青年技術者”のコラボレーションを試み、大いに語っていただきました。
この度の特集にも、お忙しい中、ご執筆を頂きました方々をはじめ、多くの方のご支援ご協力を頂きました。深く感謝致します。

（東海支部特別編集委員会）

【東海作品集】

刈田豊田総合病院新病棟
介護老人保健施設「やまゆりの里」
名古屋臨床検査センター　附属診療所
河合塾　札幌校
知多信用金庫緒川支店
いちい信用金庫　新本店
スペース名古屋本部ビル
オークマグローバルCSセンター
京寿楽庵本社工場
東レオートモーティブセンター
新東工業株式会社『東寿庵』
世界心道教浄知教会
T. Gate House

【本文】

■街道・宿場町シリーズ
序文にかえて―飯田街道・足助街道から三州街道への道―／河田克博
足助街道を歩く／野本欽也
足助における歴史的町並の保存・修景―まちづくりのあゆみ―／大森峰輝
稲武宿／野田理吉
飯田市下伊那の三州街道／金澤雄記・竹ノ内雅人
現在の三州街道を行く／林　金之・松本壮一郎・今津芳清・前田薫子

■東海建築：鉄骨
―しなやかに浮かび上がる屋根―
トヨタ葵体育館／鈴木貴紀・渡辺俊治・浅野三男
―ecoとdesignの両立―
e-生活情報センター「design no Ma」／長谷川　寛・山田基裕
―捩じれた超高層建築を精度の高い鉄骨でつくる―
モード学園スパイラルタワーズ／山脇克彦

■東海支部会員が語る：座談会
35歳はターニングポイント 新旧青年技術者表彰者に聞く
野村昌宏・寺西敦敏・石原清孝・小柳英治・塩田哲也・若林　亮（司会）

「建築と社会」東海特集特別編集委員会
委　　員　　長：佐伯　博
特集記事担当委員：松本壮一郎
作品作風担当副委員長：土井敬三　担当委員：伊藤武夫
デザイン広告担当委員：若林　亮
委　　員（順不同）：寺本英一、黒田清宏、鈴木慶智、今津芳清、尾崎武寛、篠原佳則、福田泰三
後藤利秋、仙田　篤、中村哲士、松元親司、山本敦子、芳山明久、北川貴啓
杉澤和男、齋藤　護、冨田昌志、別所裕之、池村忠久、水川善雄、加藤武範
今井祥子、河田克博、林　金之



刈谷豊田総合病院新病棟

設計・監理　竹中工務店
施　　工　竹中工務店・アイシン開発共同企業体

刈谷豊田総合病院はトヨタグループ７社と刈谷市により設立された医療法人豊田会によって運営される地域の中核医療を担う総合病院である。1999年からの増改築により老朽化・狭隘化した病棟の建て替えを行なった。残存敷地を最大限利用するため、３角形の平面形状によるプランとして廊下中央部に光庭を設けている。光庭は、上空の光を下層まで届け明るく広がり感を演出するとともに各階の一体感をもたらす共用空間である。
外観デザインでは、三角形先端の東面において既存外来棟と呼応したカーテンウォールにより、２棟が統一された顔づくりを行なっている。南北側の立面では、個室的４床室に現れる縦方向の掘り込みと、バルコニーの水平ラインにより立体的深みをもたせ、繊細でシャープなファサードデザインとしている。
病室における快適性の追求のため、外部バルコニーにおいて手摺上下に配したルーバーにより内部病室への日射制御効果をもたせることやベッド間仕切の役割をはたす収納家具のデザインなどの工夫をしている。内部のアクティビティでは、移動の結節点となるスタッフステーション前に設けた光庭が中心的役割をはたす。外界を見ながら時の流れる病室とは異なり、スタッフ・見舞客など、人の動きとともに一日の時の流れを感じ、連帯意識の中で安心感を覚える場となる。下階から見上げると３角形状のカーテンウォールの万華鏡効果により、廊下ダウンライトが星空のような幻想的な空間を生み出している。
この建物は、震災時に地域の中核医療機能を保持するため、免震構造を採用している。　　（市川健二／竹中工務店設計部）

所 在 地 ――愛知県刈谷市住吉町5-15
敷地面積 ――26,310.84㎡
建築面積 ――　1,618.13㎡
延床面積 ――18,950.46㎡
構造規模 ――RC（免震）、12F、B1、P2
工　　期 ――2005年４月～2007年10月
最 寄 駅 ――JR東海道線　刈谷駅
撮　　影 ――SS名古屋

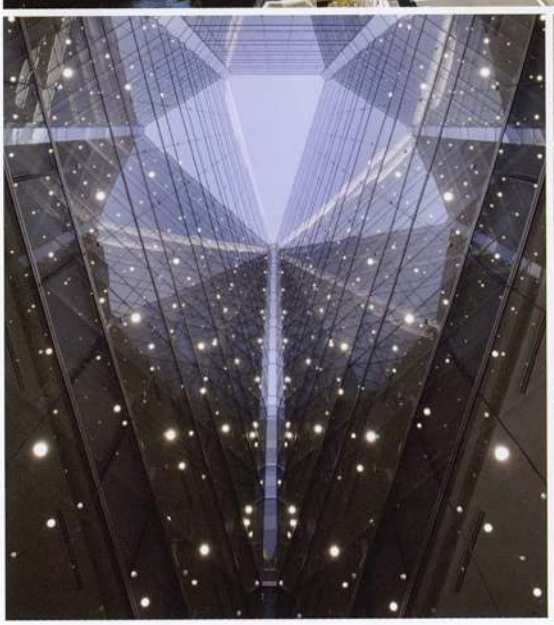


配置図

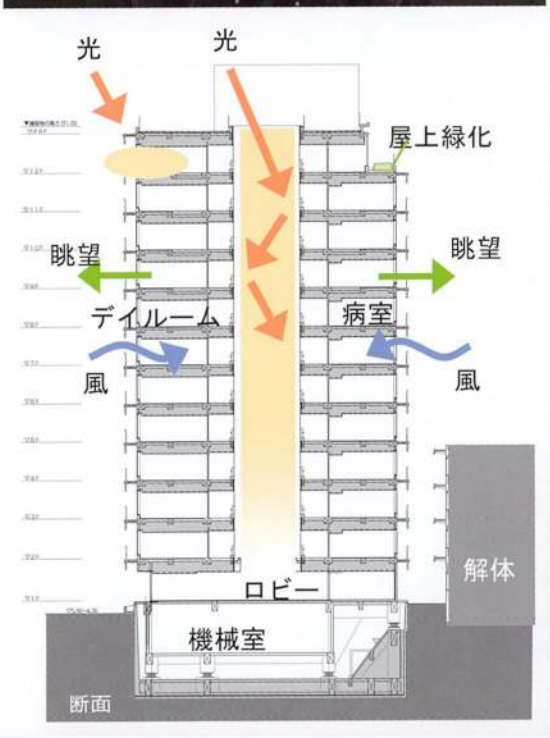


基準階平面図








光
光
屋上緑化
眺望
眺望
デイルーム
病室
風
風
解体
ロビー
機械室
断面



北東面外観

介護老人保健施設「やまゆりの里」

建 築 主　社会福祉法人　明合乃里会
設計監理　東畑建築事務所
施　　工　日本土建

所 在 地 ――三重県松阪市嬉野中川町字東野田1529-1
敷地面積 ――7,892.04㎡
建築面積 ――2,693.51㎡
延床面積 ――6,127.04㎡
構造規模 ――RC造、3F
工　　期 ――2007年７月～2008年３月
撮　　影 ――SS名古屋


全景


南面外観

“ユニットケアシステムの介護老人保健施設”

計画地には以前の施設の名残の桜の老木が多数あり、南側は県の畜産センターでいわば牛の放牧場のようである。西、北側隣地は新興住宅地とはいえ周囲は緑の多い静かなところである。この桜の老木を伐採することなく地域の人々との密着できる交流広場として開放し、建築的には周辺環境のイメージを切り取ることなく分節するなど、出来るだけボリューム感を抑えた。

施設内容は10人単位10ユニットのユニットケアシステムの介護老人保健施設と、定員40人のデイケア施設である。

“一つのユニットは10人家族のひとつの家である”この考えのもとで内外の空間を決定付けている。そして、社会復帰支援が当然の施設づくりとして、お年寄りにとって住み慣れた空間イメージを常に呼び起こせる空間作りを基本にしている。

ユニットの構成は、個室に囲まれたリビングが基本で、光庭を囲んだ二つのユニットが計画の基本形となり、明るく、ゆったりとしたリビングとしている。

一日に多数の人の出入りがある通所デイケア部分は１階の中央部に大きな空間とし、利便性を重視した。また、地域に開放する交流ホールとも、ウッドテラスにより桜のある交流広場を含めた緑豊かな外部空間との一体化を目指している。

内部空間に木組み、木格子、たたみ、障子といった和のエレメントと木質仕上げを多用した。もちろん、主要空間の床・腰壁には地域の木である『サクラ』を中心に構成している。照明色も白熱色を中心とし、これらがあいまって暖かみのある和風の落ち着いた空間とすることができた。まさしくお年寄りになれ親しんだ空間である。

その他、各ユニットの特性を表現するためユニットごとの色分けのほか、全館に共通して市の花であり施設名にある“やまゆり”の花と葉の色である「白と緑」を共通色としサインをはじめ各所にポイント的に使用し、視覚的なアイデンティティを求めている。

ここで生活するお年寄りにとって、毎日が快適な一日であり続けて欲しいと思っている。

また、空間的な面もさることながらここで働く職員の省力化につながる運用面や利便性、効率性にも配慮した。

（野呂　和弘／東畑建築事務所）



２階平面図


療養室


共同生活室


デイケア食堂


展望浴室



施設の開放性を表現した南面外観

名古屋臨床検査センター　附属診療所

名古屋医師協同組合・名古屋臨床検査センターは開業医の共同利用施設として1958年に設立された。当診療所は、組合員である開業医1,250名から依頼される精密検査と人間ドックを最新設備と専門医により行っている。

建物は南側をカーテンウォールとして、開かれた施設であることを表し、グレイトーンの色彩による上品でモダンな外観とした。内部は暖かな雰囲気のインテリアとし、カーテンウォールに面して各階にラウンジを設けたアメニティの高い明るい空間とした。構造は柱の少ないロングスパン架構とするため、ポストテンション方式のプレストレストコンクリート梁を採用。健康診断は、待合を検査諸室で取り囲むホール型として、混雑状況や受診者の状態を把握しやすくし、高いサービスを提供できる平面計画とした。

（橘高宗平・廣瀬文昭／日建設計）

建 築 主　名古屋医師協同組合
設計監理　日建設計
施　　工　鴻池組

所 在 地 ——名古屋市昭和区滝子町27-22
敷地面積 ——　842.05㎡
建築面積 ——　676.32㎡
延床面積 ——2,324.59㎡
構造規模 ——RC造、4F
工　　期 ——2006年９月～2007年７月
最 寄 駅 ——地下鉄桜通線 桜山駅
撮　　影 ——エスエス名古屋


南側ラウンジ


情報発信するファサード


北大正門を見渡すラウンジ


掘りごたつのあるラウンジ


PC梁を半間接照明に利用した教室


エントランスホール・受付

河合塾　札幌校

河合塾札幌校は主に北大を志望する受験生を支援する予備校として、北大正門に至る通りに面して計画、各階ラウンジを開放的なガラス張りとして北大を望む校舎とした。各階ラウンジは自習室でもあり、様々な環境を提供して生徒の個性に合った学習スペースを用意し、河合塾の質の高い教育環境を情報発信するファサードとした。

敷地は札幌市の街区らしく整形で南北に長く東西に狭隘な形状であるため、教室に必要な席数を並べるには柱型を扁平とした構造とすることが望ましく、繰り返しが多いロングスパンの架構となることからPCaPC造とした。

寒冷地において頭寒足熱の学習環境を実現するために、外部負荷を出来るだけ外皮側で軽減すべく、教室の窓の大きさを採光上必要最小限とし、窓は全てLOW - Eガラス＋断熱サッシ、カーテンウォール部分も66ナイロンをインシュレーションとしてヒートブリッジを起こさない断熱サッシとした。外壁の断熱は現場発泡ウレタンt=40に強化し、ピロティや地下駐輪場の上部にあたる居室部分は床スラブ下断熱に加えて床暖房を設けた。また、夏季は北海道の冷涼な空気を利用した自然換気ができる開閉窓とした。前面道路に面するエントランスホールや各階ラウンジは北国の都市景観に配慮し、温白色の暖かい照明計画とした。

（山本明広・安藤大輔／日建設計、馬場正敏／北海道日建設計）

建 築 主　学校法人　河合塾
設計監理　日建設計
施　　工　戸田建設

所 在 地 ――北海道札幌市北区北9条西3-3
敷地面積 ―― 896.12㎡
建築面積 ―― 705.66㎡
延床面積 ――4,404.19㎡
構造規模 ――RC造（PCaPC造）一部S造、6F、B1、P1
工　　期 ――2007年２月～2008年２月
最 寄 駅 ――JR札幌駅
撮　　影 ――篠澤建築写真事務所

知多信用金庫緒川支店

設計監理　伊藤建築設計事務所
施　　工　七番組


ロビー

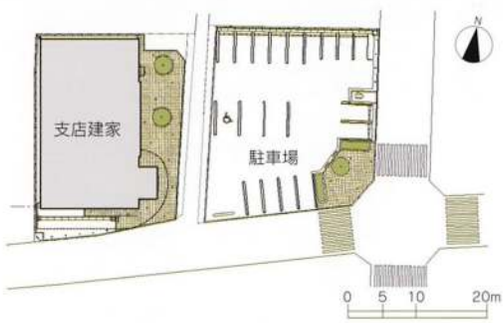

支店北東より



南東交差点より

駐車場等の利便性の確保、支店機能の充実、建物の耐震性確保のため、建て替えとなった。
敷地は幹線道路に面した既設の支店敷地の奥に位置し、既設建家敷地との間は2.5mの生活道路がある。計画に当たっては、建物新築後、既設建家敷地を駐車場として整備し、幹線道路に面した敷地に建つ建物として、一体的な空間となるように配慮した。
周辺との関係に関しては、歩道の確保ができていない交差点に待合スペースを提供し、建物正面はゆとりをもたせてポケットパークとして緑地やベンチを配置するなど、利用者と地域へ開放している。また、ポケットパークや待合スペースに、歩行感の良いゴムチップ層を持つリサイクル保水性舗装の採用や、建物の基礎躯体にラス型枠の採用等、小規模ながらも利用者と環境にやさしい施設とした。

（冨田　昌志）



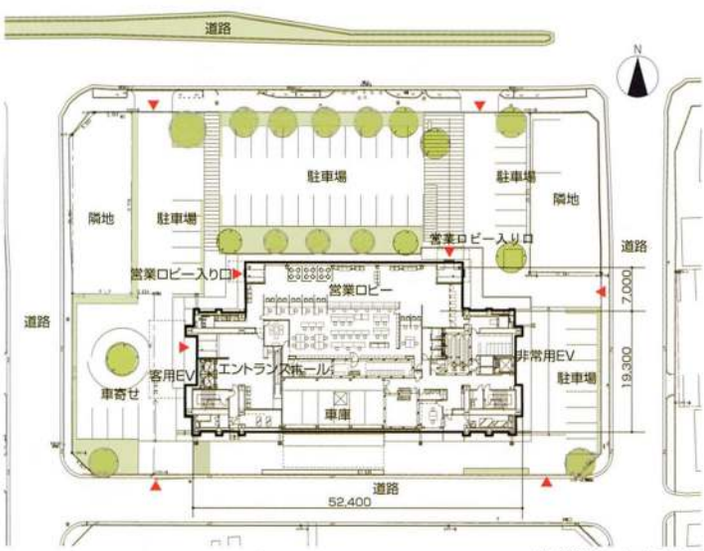
所 在 地 ――愛知県知多郡東浦町大字緒川字屋敷弐区138-2、竹塚8-45
敷地面積 ――建家側600.10㎡、駐車場側636.22㎡
建築面積 ――390.12㎡
延床面積 ――631.80㎡
構造規模 ――S造、2F
工　　期 ――2008年３月～2008年11月
最 寄 駅 ――JR武豊線 緒川駅
撮　　影 ――センターフォト



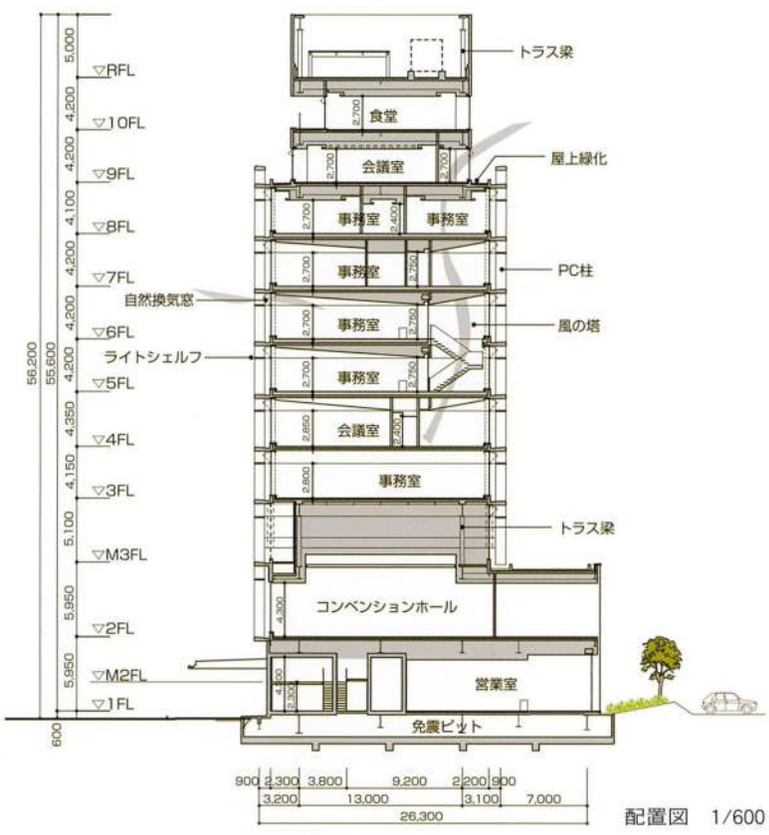
いちい信用金庫　新本店

建 築 主　いちい信用金庫
設計監理　日建・垣見設計監理共同企業体
施　　工　鹿島・中村工業・榊原・中野建設工事共同企業体

所 在 地 ――愛知県一宮市若竹3-2-2
敷地面積 ―― 3,927.50㎡
建築面積 ―― 1,386.89㎡
延床面積 ――10,286.70㎡
構造規模 ――SRC造　RC造（PCaPC造）S造、12F、P1
工　　期 ――2007年３月～2008年10月
最 寄 駅 ――JR尾張一宮駅、名鉄一宮駅
撮　　影 ――エスエス名古屋



配置図　1/1200



配置図　1/600

いちい信用金庫 新本店は、一宮駅近くに立地していた旧本店の新築移転として計画された。敷地は駅から南東約３kmにある「せんい団地」付近に位置するが、周辺には名古屋高速一宮線や市勤労福祉会館が位置するなど、昨今、目ざましく発展する場所でもある。建物は、信用金庫本部機能、本店営業機能に加え、地域貢献など多目的な利用ができるコンベンションホールを備えている。

クライアントの要求は「本店らしい構え」、「免震構造」、「優れた環境性能」と明快なものであった。我々が取り組んだ設計テーマは、最新の建築技術・環境技術を駆使し、トータライズすることで、金融機関の本店としての品格、信頼を表現する「高い質感」の実現であった。

外観の特徴である格子はPC造の柱と庇である。低汚染・高耐久のクリア塗料で仕上げ、無垢の素材感と部材の繊細さを生かした。そこにライトシェルフを絡めて、奥深さと軽快さを表現している。この柱は執務ゾーンのPC床板の鉛直荷重を受け、全体の骨格であるロの字型のフレームに荷重を伝えることで内部を無柱化している。フレームはロングスパンの営業店舗とコンベンションホールを跨ぐ形で地面に荷重を伝えている。この架構方法により、免震装置は東西両サイドの基礎に集約する配置とし、構造の合理性と軽快な意匠表現を両立させている。

さらに、格子の組柱・梁の仕口、サッシュの納まり、ライトシェルフ、傾斜した天井などによって特徴付けられたオフィス空間の窓周りが設計において特に力を入れた部分である。傾斜天井はライトシェルフからの光を内部に導く効果を生むと同時に、照度センサーによる調光、換気窓と吹抜けを利用した自然換気システム、床吹出しの居住域空調など、省エネルギーと快適な執務空間の創出の両立も特筆すべき点である。

その他、四季を通じて楽しむことが出来る郷土の樹木による緑化、利用者に優しい営業店舗、コンベンションホールのバリアフリー化、北アルプスや名古屋の高層ビル群を一望できる最上階の職員食堂など、すべての人が快適に安心して利用でき、「人にやさしい」「環境にやさしい」トータルバランスのとれた建築といえる。

（村井達也・塩田哲也／日建設計）


格子柱ディテール


事務室


コンベンションホール


本店エントランスホール



営業ロビー

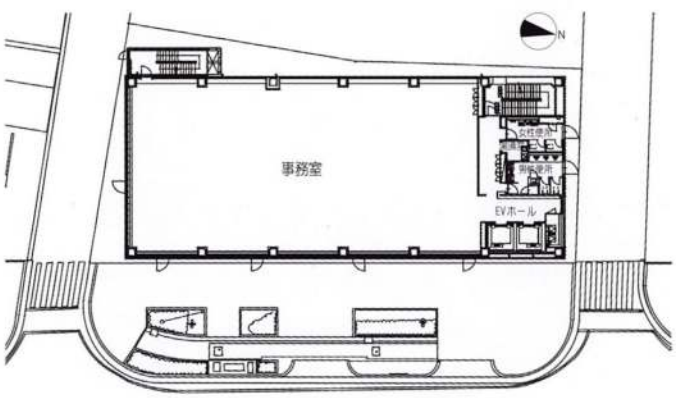


スペース名古屋本部ビル

設計監理　伊藤建築設計事務所
施　　工　清水建設

クライアントはショッピングセンターや専門店をはじめ、さまざまな店舗の企画から設計・施工及び引渡しまでトータルで店づくりに携っている企業で、老朽化への対応や耐震性の向上、オフィス空間の充実を図るため建替えをおこなった。
建物はシンプルで飽きのこないものとし、カーテンウォールの透明感のある清楚なデザインの外装に、各層にある子庇がアクセントとなっている。１階は白基調の花崗石で、安定感と共にガラスのエントランス部分をより強調したものとしている。
受付は２階で、吹き抜けのある待合スペースは開放感があり、床の白大理石と受付正面の深い茶の壁のコントラストが、上品な雰囲気をかもし出している。
事務室はスパン約15mの無柱空間で、窓際は足元のホッパーによる自然換気システムのほか、ロールブラインドと外部サッシ間の空気を上部より排気することにより、夏・冬の窓周りからの熱負荷低減を図っている。
７階にある大会議室は、正面をガラス張りにして、外部テラスの緑化により、四季を通じて緑を楽しむことができる。屋上緑化は７階と８階に行っており、環境負荷低減の効果も期待できる。

（冨田　昌志／伊藤建築設計事務所）



▲配置図兼基準階平面図　1/1500

所 在 地 ――愛知県名古屋市西区那古野2-2-1
敷地面積 ――　705.34㎡
建築面積 ――　589.48㎡
延床面積 ――4,149.07㎡
構造規模 ――S造、8F
工　　期 ――2007年７月～2008年11月
最 寄 駅 ――地下鉄桜通線 国際センター駅
撮　　影 ――センターフォト







外観正面（北面）



展示エリア



屋上緑化



オークマグローバルCSセンター

設計監理　伊藤建築設計事務所
施　　工　大林組名古屋支店
施工協力　川北電気工業（電気工事）
　　高砂熱学工業名古屋支店（空調・衛生工事）
　　日立ビルシステム中部支社（昇降機工事）

日本を代表する工作機械製作メーカーであるオークマ株式会社は、創業110周年を迎え、本社工場内に新しいショールームとして「グローバルCSセンター」を建設した。

1階は工作機械が30台以上並ぶ展示エリア、最新の加工技術を紹介するプレゼンテーションエリア、そして機械操作の実習を行うNCスクールエリアからなり、先進技術の情報発信とものづくりの楽しさが実感できる新しいコミュニケーションスペースである。

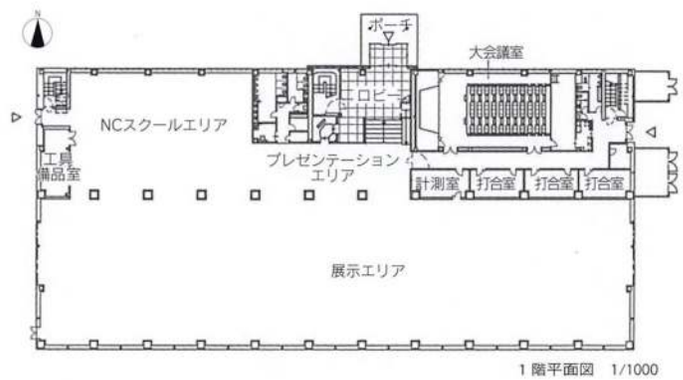
3階は東半分をNCスクール用研修室などのお客様エリア、その西側と4階全フロアーは事務室とし、特に展示エリア上階の執務スペースは80m×20mの無柱空間で、将来の組織変更などに柔軟に対応できる。

既設建屋の解体から工事完成まで8ヶ月、新設建屋の工事期間は実質6ヶ月しかなく、構造は工期の短縮を図るため鉄骨造としたが、展示エリアに設けられた天井クレーンの走行時に発生する振動対策のため、走行レールを受ける柱については1階から3階までをSRC造としている。

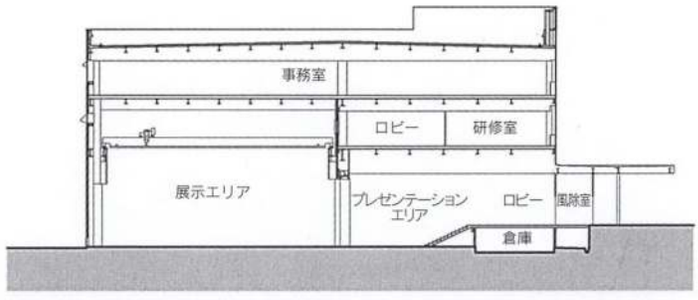
環境負荷低減を目的として、CO2濃度による外気風量の制御、大温度差送水による搬送動力の低減、空調ドレン水の屋上散水利用、事務室内照明のプルスイッチによる個別入切スイッチの設置、複層ガラスや汚染防止型外装タイルの採用、屋上緑化などの省エネルギー手法を取入れた。屋上緑化については屋根面積の四分の三を地被植物（セダム類）によって被うことで、試算では空調消費電力を7%削減できる。

施設整備においては、1階エントランスロビーと展示エリアには1.7mの高低差があり、車椅子利用者のために直角二方向型出入口のエレベーターを設置するなど、人にやさしい建物を目指した。

（澤村喜久夫／伊藤建築設計事務所）



1階平面図　1/1000



南北断面図　1/600

所 在 地 ――愛知県丹羽郡大口町下小口5-25-1
敷地面積 ――154,392.92㎡
建築面積 ――　3,096.37㎡
延床面積 ――　8,171.57㎡
構造規模 ――S一部SRC、4F
工　　期 ――2007年8月～2008年4月
最 寄 駅 ――名古屋鉄道犬山線　柏森駅
撮　　影 ――センターフォト



外観（南西）

京寿楽庵本社工場

建 築 主　京寿楽庵株式会社
設計監理　東畑建築事務所
施　　工　ナカノフドー建設

京寿楽庵㈱は東京の㈱田村米菓が親会社となる菓子メーカーグループの１つであり、本施設は本社機能を兼ねた和洋菓子を製作する工場である。小さな町工場や資材置場のある一角に位置し、新築を機会にそれまで数箇所に分散していた事務機能・工場機能を本工場に集約する事で、作業効率の向上を図った。
食品工場らしく、明るく・清潔感のあるファサードを意識し水平に伸びるアルミハニカムの庇が軽やかさをより強調している。エントランス廻りは歩車の分離を明快にし、会社名から連想する和風なしつらえが訪問者の意識に触れるように考慮した。食品衛生管理が話題となる時期の計画であり、従業員・原材料・製品のそれぞれの動線を「HACCP」の思想に準じたゾーニングで構成しており、縦動線は２基のエレベーターの使い分けにより解決している。各フロアーには生産機械のラインが並んでいるが、将来の製品増産体制にも対応が可能なように構造を計画している。製品工場内は、焼き菓子・水菓子の生産環境を整備するため温度・湿度の管理はデリケートな部分であり、生産機械との接続等にあっても綿密な協議を繰り返し行った。
道路に面する外構の樹木が大きく育ち景観を形成し、従業員を和ませる空間になる事を望んでいる。

（塘　伸夫・林　彰吾／東畑建築事務所）

所 在 地 ――京都府久世郡久御山町大字佐古小字外屋敷72-1
敷地面積 ――1,369.83㎡
建築面積 ――　758.25㎡
延床面積 ――2,727.27㎡
構造規模 ――S造、4F
工　　期 ――2008年３月～2008年９月
撮　　影 ――有限会社千里工業

施工協力
ＡＬＣ工事　㈱セルドムシントー
鋼製建具　不二サッシ㈱
シャッター　三和シャッター工業㈱
軽天・ボード　㈱三和産業
断熱パネル　三洋昭和パネルシステム㈱
金属工事　藤岡金属㈱
塗装工事　建装工業㈱
内装工事　㈱利倉
塗床工事　㈱キューケン
電気設備　㈱クリハラント
機械設備　大成温調㈱


外観（南西）夜景


エントランスホール


休憩室


1階製品工場


本館／TORAYウォール


実験棟


全景


ショールーム

東レオートモーティブセンター

建 築 主　東レ株式会社
設計監理　日建設計
施　　工　東レ建設
　　錢高組

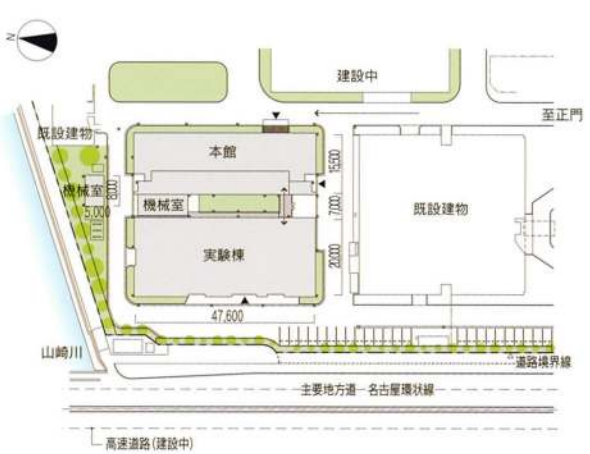
所 在 地 ――愛知県名古屋市港区大江町9-1
敷地面積 ――153,662.86㎡
建築面積 ――　1,937.99㎡
延床面積 ――　4,222.31㎡
構造規模 ――S造、4F、P1
工　　期 ――2007年11月～2008年６月
最 寄 駅 ――名鉄大江駅
撮　　影 ――エスエス名古屋

東レが名古屋事業場を「自動車・航空機」分野向け中核工場として機能転換を図る第一段階として計画した自動車向けの技術開発拠点。自動車メーカーの顧客を対象としたショールームと事務・会議機能を備えた本館と、物性・性能評価などが行える実験棟の２棟で構成される。工場敷地内に立地しながらも、顧客向けアピール性が求められる施設であることを踏まえ、ダイナミックな表現を意識している。

本館のファサードは、東レのコーポレートカラーを意識したブルーのルーバーにより、車のスピード感・風の流れ、そして東レのテーマであるイノベーション（革新と創造性）を表現する「TORAYウォール」とした。アプローチの動線に対して視覚的な効果が高まるよう、ルーバーの型は新規に設計、また動きのある表情とするために、ルーバーのレイアウトを実寸模型、3D-CADなどを活用して検討した。ブルーはiPod-miniにも採用されている染色アルマイトによるものである。染料は高耐候とはいえ有機顔料であるため経年変化はあるが、塗装やフィルムに見られる著しい劣化は無いため、塗替えや張替えをせず使い続けられる。

一方、実験棟の外壁は、工場地帯などの厳しい環境でも高い耐候性を発揮する金属板とした。設備用の開口を排煙・採光窓のパネル部に集約して確保することで、金属外装の穴あけ（＝シーリング箇所）を極力減らすなどローコスト化、外壁性能の向上に努めた。

（村井達也・塩田哲也／日建設計）



配置図　1/2,000

新東工業株式会社『東寿庵』

設計監理　生活工房 仙　１級建築事務所
施　　工　錢高組名古屋支店

所 在 地 ――愛知県豊川市諏訪3-119、120、121、122
敷地面積 ――4,802.81㎡
建築面積 ――　164.79㎡
延床面積 ――　154.25㎡
構造・規模 ――W造、1F
工　　期 ――2007年11月～2008年10月
最 寄 駅 ――名鉄諏訪駅
撮　　影 ――エスエス名古屋



『東寿庵』は新東工業㈱の元社長・元会長の永井嘉吉氏（故人）の私邸として1974年に名古屋の八事近くに建設されたものを、2007年に解体し、翌年最高顧問永井譲氏から、従業員の教養を高める場として活用するようにとのことで寄贈を受け、豊川市にある福利厚生施設用地内に移築（減改築）したものである。伝統技法を伝える数寄屋普請の茶室付き和風住宅として、当時でも既に少なくなった宮大工の手で建設されたものを、現代に移築再生し、新たな息吹を与え、社員の厚生施設として再利用するものである。

庇を周囲にゆったりと跳ねだしたこの数寄屋建築は外部に木材を露出しているにも関わらず永年の風雨にも傷みは少なく、屋根瓦から畳・天井材・木製建具までの大部分の古材を再利用することができた。

品位ある茶室、ゆったりとした和室広間と広縁から待合・にじり口を繋ぐ大小の飛石と低高木の露地と併せ、全体が古色で落着いた数寄屋建築を再生・復旧することができた。

深い庇で建物の耐候性が高まることや木部の露出により傷んだ部分ができても早期修繕を可能にするなど、木造建築の古の知恵の一端を実感することができた。

また、地震対策は現行の耐震基準を満たすと共に、木造建物が比較的に長い固有周期をもつ特性であることから、制震性能を持つ『仕口ダンパー』を付加することで充分な耐震性を持たした設計とした。

今後この建物は、当企業のこれまでの発展の記念館として、技術と信頼の経営理念を受け継いでいく次代を担う社員の人材育成の場として、社員相互のコミュニケーションを深める憩いの場として、また世界の人々やお客様との歓談の場として、大いに活用いただけるものと思います。

（生活工房　仙　仙田　篤）





南東面から望む

世界心道教浄知教会

建 築 主　世界心道教
設計監理　東畑建築事務所
施　　工　鹿島建設

所 在 地 ——愛知県名古屋市西区堀越2-601
敷地面積 ——7,810.78㎡
建築面積 ——2,091.33㎡
延 面 積 ——4,847.93㎡
構造規模 ——RC造、4F
工　　期 ——平成19年２月１日～平成20年３月15日
最寄り駅 ——名古屋地下鉄鶴舞線　庄内通駅
撮　　影 ——SS名古屋



配置図　1/1500

世界心道教は昭和27年に設立され、愛知県豊川市に本部を置く宗教法人で、全国に教会数57・支部数52・信徒数22,000人を擁している。

本施設は、名古屋市内にある旧浄知教会の老朽化及び信徒の増加に伴う建替新築工事として計画された。建物の平面及び階の構成は、世界心道教本部の「普請委員会」を経てまとめられたものである。その空間構成は３階の御神前の間口と奥行寸法によって、建物全体が決定されており、建物方位は、御神前の祭壇が東側になるように定められている。また、建物の内外の音に対する配慮から諸室がレイアウトされた。なお、御神前（23.0m×36.0m）の無柱空間を確保するために、３階までは鉄筋コンクリート造で梁にはPC鋼線を入れプレストレスを導入、屋根架構は鉄骨造を採用している。

建物のメインアプローチは、車で来訪する方の安全に配慮し交通量の多い東側（国道22号線）を避け、西側としている。また、外壁は華美な外装材等は一切使われてないが、単調とならないよう西側および玄関部分は“御簾”をイメージしたタイル張りとなっている。

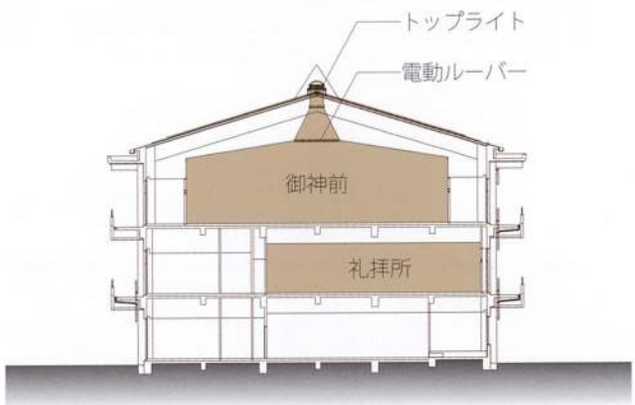
建物内部に於いては、高齢者の信徒（転倒による怪我等）に配慮し、弾力性のある二重床を採用している。また御神前は参拝者のためにトップライトと電動ルーバーを設けて自然光をふんだんに取り入れた空間となっている。なお、自然光を取り入れることで照明の負荷を軽減している。

屋外の床舗装は、透水性アスファルトやインターロッキングブロックを採用し、下水道の負担を軽減する試みを行っている。なお外構の植栽等は、信徒の奉仕作業によって全てなされている。

（井上哲也・柱健太郎／東畑建築事務所）



１階　受付



断面図　1/500



北西面から望む（夜景）











設計監理■
安井建築設計事務所＋HIRO Takimoto Architects

施工■
ナカノフドー建設　名古屋支社

T. Gate House

敷地は愛知県の郊外、建築協定により比較的大きな街区で、建物高さも抑えられ、環境に恵まれた、緑豊かな佇まいの住宅地にある。高低差約15メートルと起伏のある傾斜地の、短辺が広い部分で約27m、長辺約90mという長細い形状の敷地で　西側はアプローチ道路が接道し、北東側には計画道路が予定されている。

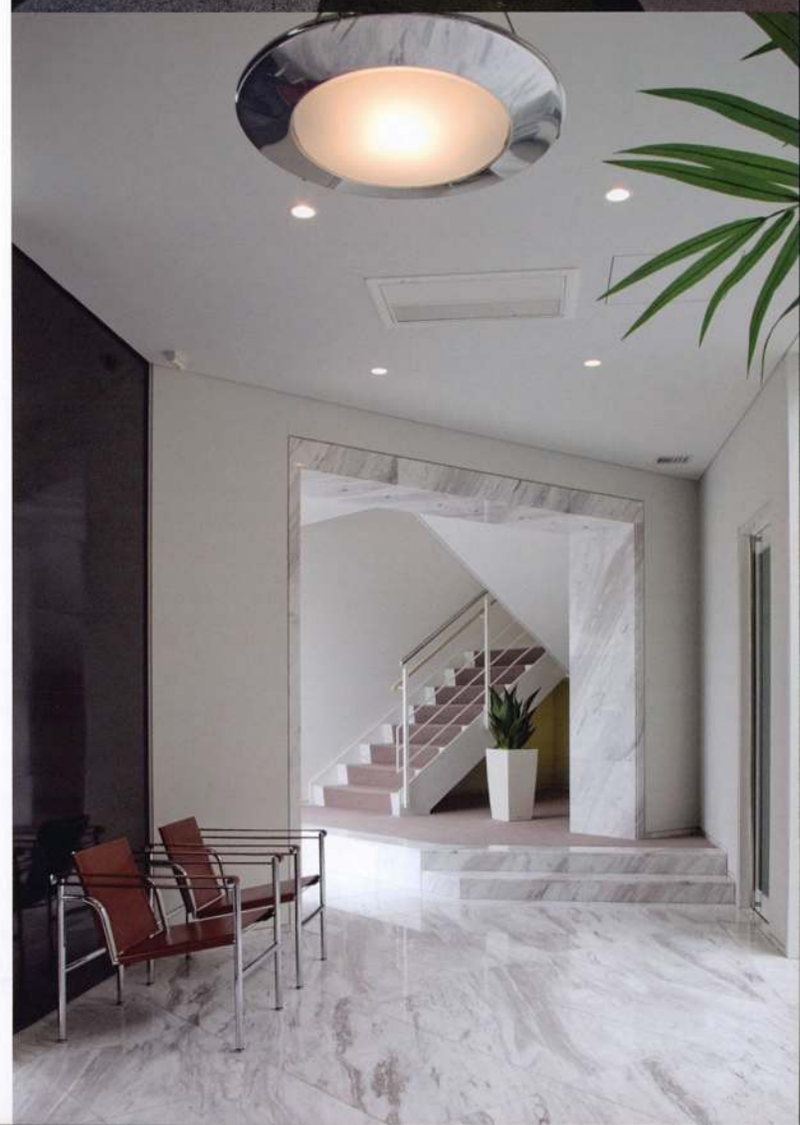
ソリッドなSRC造の妻壁と軽快な鉄骨造の柱と梁で床スラブを支える構造を採用し、２方向にオープンな門型のシェルターを建物の基本的なユニットとしている。リビングルームや寝室のある２つのユニットをL型に配置して、居住スペースの全ての部屋が道路からの視線の届かない静寂な庭空間に面する計画とし、ゲスト用の個室とパーティルームは居住スペースと干渉しない距離感を確保し、前面道路側に面した庭園と、隣地の樹林を借景とし奥行きの少なさを感じさせないような計画としている。階段部分はカーテンウォールに面して視線の抜ける空間に、廊下部分は断熱材入りのプロフィリットガラスを使用して、雪の壁面から透過したような柔らかな光に包みこまれた空間になっている。

このように、建物を起伏に富んだ敷地に慎重に配置して、各用途に呼応した豊かな内・外部空間が形成されることを意図している。また、建物周りには、四季折々の風情が楽しめるよう、数々の樹種を選定・植樹し、数年後には敷地の南東部分に保存した既存樹林や隣地の雑木林と連続して、木々の緑に包まれた住宅となるよう構想されている。

（篠原佳則／安井建築設計事務所、滝本浩章／HIRO Takimoto Architects）

所 在 地 ――愛知県
敷地面積 ――2,008.28㎡
建築面積 ――　482.88㎡
延床面積 ――　750.71㎡
構造規模 ――S＋SRC造、2F、B1
工　　期 ――2007年12月～2008年９月
撮　　影 ――SS名古屋（新名　清）







街道宿場町シリーズ

序文にかえて

—飯田街道・足助街道から三州街道への道—

河田克博

■名古屋をとりまく街道■

東海の府、名古屋は、近辺の五街道の２つ、東海道・中山道とは実は離れている。中山道に達するには、かなり北上して一番近いのが現岐阜県の鵜沼、東海道は比較的近いにしても宮（熱田）が東海道の宿場であり、近代になって名古屋市域にはなるものの、江戸期までは名古屋城下と宮は別域の扱いであった。また、鉄道や自動車交通が発達する以前は、陸運よりも水運のほうが多量の物資を運搬するのに適していたから、東京（江戸）には利根川が流れ、大阪には淀川が流れ、それぞれ大河を利用した水運が発達したが、実は名古屋には大きく水運が発達するほどの大河が通っていない。一見すると木曽川があるではないかと思われがちだが、木曽川は名古屋市中からかなり西に寄った地域を流れており、尾張藩の管理していた著名な良材の木曽材は、木曽川の水運を利用して河口に流した後、古くから知られる白鳥貯木場に集められ、それを適宜、それこそ川がないからこそ名古屋城築城に発し人工的に開削してつくられた堀川の水運を利用し、名古屋城下に運ばれていたのである。

したがって、名古屋周辺には水運を補うためのさまざまな副次的な陸路、○○路・△△街道・□□往還といった類が網の目のように発達していた。岐阜に至る美濃路などもその一つであるが、今回は、名古屋から東に目を向けてみると、主要な街道として飯田街道・足助街道があり、それが三河の岡崎と信州の塩尻とを結ぶ、いわゆる三州街道につながっている。

■飯田街道と足助街道■

飯田街道は、名古屋市東区駿河町（現在の東区東桜１丁目）を始発点とし、昭和区の半ばまで南東に進み、昭和区・天白区をほぼ東方に経由し、近世各村絵図には「駿河道」「駿河街道」と呼ばれ、八事、平針村を経て赤池村へと続くが、平針村からは岡崎街道が分岐し、赤池村からは、挙母（ころも）（現豊田市中心部）へと続く挙母街道と信州へ通ずる街道に分かれていた。「駿河街道」の呼称は平針村までであったらしい。赤池村からは、「伊保海道筋」「伊奈海道筋」「三州足助街道」「信州街道」等、街道名の統一は見られず、三河に入ると「伊奈道」「伊奈街道」の名称が多く見られる。いずれにしても飯田街道とは、名古屋から平針・赤池を経て、伊保（豊田市）・枝下・力石・足助・伊勢神峠・稲武を経て、杣路峠から信州根羽の伊那谷に出る街道である。ここからは、三州街道となり、飯田・伊奈（伊那）方へ出る。現在の飯田街道は、近世の伊奈道を改修に改修を重ね、近代的な道路にしたため局所的には道程に変化が見られるが、多くは旧道も残り、街道の旧態を訪ねることができる。ほぼ国道153号線に沿った道が飯田街道といえるが、名古屋の八事辺りから豊田市中心部に至る現在の153号線は名古屋・豊田間の大量自動車交通に対処して近年開発されたバイパスであり、実際の飯田街道はそれよりかなり北方の県道58号線沿いであることが大きく異なるくらいであろう。

ところで、こうした駿河街道と伊奈街道とが、飯田街道の名称に改められたのは明治９年６月８日の太政官達第60号通達以後のことである。この規定に応じ、県は駿河街道を経て伊奈街道に結び信州飯田や伊奈に達する県道（三等）に指定することを決めたらしいが、もともと伊奈街道と言い継いだ街道名を改めて、飯田街道とした理由は明らかではない。明治12年の「管内国道県道一覧表」によれば「愛知郡平針村より長野県伊奈郡界に至る」道を「飯田街道」としているが、旧駿河街道の区間は県道の指定もなく「里道」の指定になっていたらしい。しかし、官道でなかった飯田街道は、原型を奈良時代まで遡ることができ、５世紀末から始まった猿投山西南麓の窯業地帯（猿投窯）の製品は尾張国衙を経て都へ、あるいは信濃へと運ばれていき、鎌倉時代から室町時代にかけては軍事的に大きな意味をもつようになるとともに、宗教伝播の道、商品流通の道でもあり、近世には、名古屋城下へ山地の産物を運び、帰り荷には塩をはじめ雑貨を運び込む交易路として山間僻地の生活を支え、現在も庶民の道として生きている。

足助街道は、足助町中心部から西行した追分（井ノ口）から飯田街道と分岐し、ほぼ巴川に沿って西南に進み、矢作川合流点から南

下し、桑原・岩津を経て岡崎の市街地に至る街道である。里程が7里あったため「七里街道」、また「中馬街道」「信州街道」「善光寺街道」の別称があった。

矢作川の水運が盛んであった時代、とくに近世には物資の交流は岡崎を拠点にしていた。山間への塩は巴川を遡り、九久平で陸路に変えたため、水陸運送の積替地点ともなり、村の繁栄をもたらしていた。

■三州街道■

三州街道とは、中山道の脇往還として、また中馬で荷駄を運ぶ通商の道として、あるいは信仰の道として、江戸時代は盛んに利用された道である。別名、伊奈街道・中馬街道とも呼ばれ、中山道塩尻宿から分岐し天竜川沿いに伊那谷を下り飯田・駒場・根羽・杣路峠を経て三河足助を経由し東海道の岡崎に至る道。要するに信州と三河を結ぶ道の総称であるが、先に述べた根羽から足助の追分までの伊奈街道（飯田街道）と足助街道と重なり、その部分では三州街道とは呼んでいないようだから、厳密には信州から見て三州に至る道として根羽から北方を三州街道と呼んでいたようだ。中馬は、賃馬の転訛であるが、宿で馬を乗り継ぐ伝馬と異なり、街道を通じて馬を変えない方式であり、公用の荷物が優先された伝馬に比し、運賃と速度が違ったため盛んに利用され、農民たちの馬による駄賃稼ぎを期に発展していた。馬の供給地は足助であり、飯田はこの街道の中心地で、長姫藩城下町、中馬中継基地として、また大平峠・清内路峠を越えて中山道木曽路へ、遠州街道を通じて新野への分岐点として大いに栄えた。岡崎より南方への道は吉良路（きらみち）と呼ばれていた。

三州街道の終点岡崎は、幹線の東海道の宿の一つで、街道は二十七曲（まがり）と呼ばれる複雑な町並みで、『東海道名所図会』の岡崎宿の項には「岡崎は当国都会の地にして、商人多く万の物たらずということなし。……」と大いに賑わっていた（図参照）。

■物資の交易■

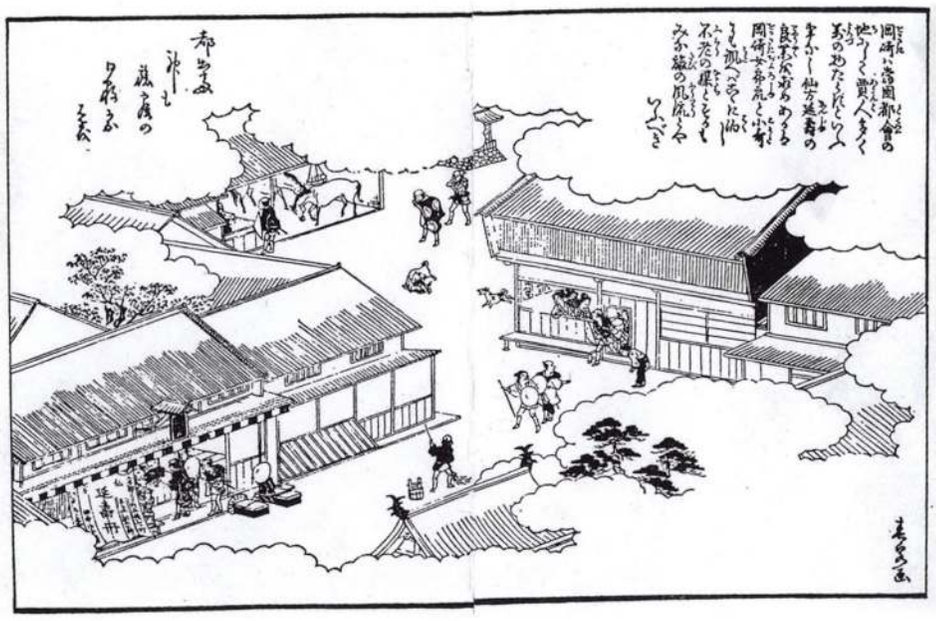
近世には、星崎七カ村（名古屋市南区の塩田地帯、近世後期には廃絶）や三河の塩をはじめ名古屋・岡崎方面からの荷は飯田街道・足助街道を利用し、また矢作川・巴川の水運を利用しても、最終的には中馬や手馬（荷付馬、日戻り馬）によって足助に運ばれた。産地の異なる塩荷は重量がまちまちであったので、一旦、足助で荷が解かれ、7貫目に統一された俵に積み替えられ、信州飯田方面へ継ぎ送りされた。三信地方の中馬には伊奈路の信州中馬と飯田街道の三州中馬があり対立した。足助には、明治中頃には塩問屋が13軒、馬宿が6軒あった。有名な信州味噌も塩がなければつくれないわけで、海のない信州に送られる物資のなかでも塩は最も重要な産物であった。

名古屋から飯田方面に送られた荷には、塩・綿・砂糖・乾魚・昆布・太物・茶・陶器・荒物・蝋燭・扇子があり、飯田から名古屋方面に送られた荷には、煙草・生糸・真綿・元結・麻苧・紙・串柿があった。また矢作川・巴川の水運では上り荷に鉄・綿・綿実・米・麦・大豆・雑穀・味噌・干し魚・樽・荒物・小間物・塩・〆粕・鋳物・土管・醤油・酢などがあり、下り荷に木材・竹・薪炭・石などがあった。しかしその後、明治30年の伊勢神トンネル開通、明治45年の中央線全線開通、大正12年の伊那電鉄（現JR飯田線）開通によって、中馬による運搬から、荷車・トラック・貨車と輸送手段が大きく変わり今日に至っているわけである。

新道・新線の開発によって、取り残されたように旧街道の面影を残すところもまだ少なくはないが、これ以上の開発により、ひそかに残す街道の面影を壊したくはない。今後、この貴重な歴史的文化遺産をいかにして後世に伝えていくか、各地で知恵を出す必要があろう。手元にある昭和46年の名古屋市地図には「駿河町」があるが、現在の地図では全く知る術（すべ）がない。

（かわた　かつひろ／名古屋工業大学大学院教授）

〔参考文献〕
・平成4年度『愛知県歴史の道調査報告書Ⅷ』―飯田街道・足助街道―、平成5年、愛知県教育委員会文化財課編



岡崎宿（『東海道名所図会』より）

街道宿場町シリーズ

足助街道を歩く

野本欽也

■はじめに■

足助街道は、岡崎城下能見口より東海道と分かれ、北上して岩津・桑原・松平を経て足助に至る、足助・岡崎間の街道名である里程が七里あったため「七里街道」また、「信州中馬街道」「善光寺街道」などとも呼ばれていた。

足助街道は、塩の移入路として、矢作川を遡ってきた塩を、岡崎や巴川の九久平で陸路に変え、馬の背に積み替えて運んだ重要な生活道路的役割を担っていた。

■岡崎城下町の見どころ■

岡崎城下町の繁栄は、矢作川の舟運と三州中馬及び信州中馬街道の陸運と接続していたことが背景にある。矢作川河川交通には大きく3ルートがある。1は矢作川上流の古鼠越戸（豊田市）まで船で上がり、そこから陸路で北上し、中金から飯田街道に入るもの、2は岡崎で陸揚げし、そこから陸路足助に向うもの、3は矢作川支流の巴川に入り、九久平で陸揚げし足助街道を経て飯田街道に入るというルートである。すべてのルートは陸路からは中馬と呼ばれる馬が利用されて信州方面に物資が運ばれており、矢作川の舟運の発展には三州中馬との深い結びつきがあることが伺える。上り荷には、塩・鉄・大豆・干魚・醤油・味噌・酢・〆粕・干鰯・陶器など、信州または奥三河からの下り荷には薪・木材・木炭・竹・刻みたばこ・米・栗・椎茸などがあげられる。

（1）土場

岡崎城下に多くの川舟が行き交い、荷物を積み降ろす土場が築かれた。矢作川近くには塩の荷あげをする八丁土場、菅生川では、殿橋東に御用土場、唐沢から菅生にかけて、桜馬場土場、満性寺土場があった。



御用土場



八丁味噌　六尺樽

（2）八丁味噌

松葉通りを西へ進み八帖町へ入ると、家並みの様子が変わる。松葉町の近代的な様子に対して、往還通りは旧東海道の面影が強く残っている。八丁味噌はこの古い町並みの中程に早川家と太田家が創業以来の伝統を守り伝えている。

八丁味噌で特色があるのが、大きな仕込み桶とぐり石である。仕込み桶は六尺樽とか三十石樽とか呼ばれ、吉野杉で出来ており、高さ約2mである。一つの桶にポリバケツ300杯分の味噌が入る。これが400～500樽もあり、3年程熟成させるという。嘉永年間（1848～54）の墨書銘の入った樽も見られる。

（3）唐弓弦

本町通りを西に曲がり、木まち通りを300m程行くと、道路北側に格子のはまった古い作りの家が見える。これがかつて唐弓弦商を営んでいた森家である。江戸時代の街道筋の家の様子を今に残し、当時の東海道の面影や旅人の様子が思い出されるような、たたずまいである。

この森家の軒先に古い看板が掛かっている。厚い一枚板に唐破風の屋根と唐草模様の台が着き、板の一面には「唐弓弦」、もう一面には平仮名が彫られている。唐弓弦というのは、綿打ちの道具で、綿花の種子を実繰で分離した荒綿をほぐす時に使用したものである。



唐弓弦看板


松応寺


昌光律寺


明願寺



井田坂の道標

■能見（足助街道起点）から郡界川までの見どころ■

（1）松応寺

足助街道起点付近から北へ350mほど行き、西へ少し入った所にある。能見山瑞雲院と号す、浄土宗の寺である。永禄３年（1560）、徳川家康が父広忠の菩提のため建立した。松平広忠使用の青貝鞍などを所蔵している。

（2）昌光律寺

本町から能見通りを北上し、神明社前のバス停の100m先から右に折れるのが旧足助街道。幅４m弱の旧道に沿って進むと、再び県道に合流する。合流点の右側に落ち着いたたたずまいの昌光律寺がある。大恩山と号す、浄土宗の寺である。明和２年（1765）開創で、開祖は徳巌和上。三河の浄土律寺の根本道場として存在していた。鉦鼓用引架一掛は国指定重要文化財、僧月遷作品群―書画・襖絵―（60面）は県指定文化財。

（3）伊賀八幡宮

昌光律寺を出て北へ、伊賀川を渡れば朱色がひときわ鮮やかな伊賀八幡宮が見えてくる。松平親忠が松平家の氏神として、文明２年（1470）に伊賀国から勧請したと伝える。現在の社殿は徳川三代将軍家光の命で寛永13年（1636）に造営されたものである。権現造りの社殿、透塀、随身門、神橋、鳥居は国指定重要文化財。

（4）明願寺

伊賀八幡宮から北へ500mほど行くと明願寺がある。天台宗真福寺の別院であったが、住職の清山が蓮如に帰依し、文明２年(1470)に浄土真宗本願寺派に属す。寺には12世僕民が茶を好み、享保20年（1735）、掛川市の円満寺より譲り移された茶匠山田宗偏の二帖茶室（県指定文化財）や茶道具、不蔵庵竜渓の四帖半茶室（市指定文化財）がある。苔むした茶室の露地の北端に、「矢落井」と呼ばれる、茶事の良水が湧き、この水で茶を点てたと伝えられている。

（5）井田坂の道標

明願寺を出て北へ300m程行くと井田観音前の三叉路に出る。正面の道は足助街道、左前方に伸びる道は大樹寺に向う道、右前方に伸びる道は瀧山寺に向う道である。この道標は現在、他に移されている。以前は、ここに２基の道標が建っていた。１基は「右　瀧山寺道」「中道　信州ぜん光寺　岩津　信光明寺　はせう天神」「左　大樹寺道」と刻まれている。他の１基は「右　瀧山寺道」「中　岩津信光明寺　信州善光寺道」「左　大樹寺道」と刻まれている。

（6）大樹寺

井田坂から800mほど北上すると成道山松安院と号す浄土宗の大樹寺に到着する。三門は他を圧倒する大きさである。この寺は、松平親忠が勢誉愚底を開山とし、文明７年(1475)に創建された。徳川将軍の菩提寺として広く知られている。多宝塔・大方丈障壁画・絹本墨画淡彩如意輪観音図は国指定重要文化財。大樹寺伽藍・絹本著色山越阿弥陀如来像・絹本著色当麻曼荼羅絵・絹本著色二十五菩薩来迎図・木造阿弥陀如来坐像・木造勢誉上人坐像・大樹寺文書は県指定有形文化財。絹本著色勢誉上人像・梵鐘は市指定文化財、松平八代の墓は市指定史跡。

（7）瀧山寺

大樹寺から東へ約3.5kmのところに瀧山寺がある。最初に朱塗りの大きな仁王門(三門)が見えてくる。これは、文永４年（1267）飛騨の匠であった藤原光延が建立したものである。瀧山寺は吉祥院陀羅尼山薬樹王院と号す、天台宗の寺である。鎌倉末期成立の『瀧山寺縁起』によれば、役小角が青木川の滝壺より薬師如来像を拾い上げて安置したのに始まると伝えられている。瀧山寺三門・本堂・木造観音菩薩・梵天・帝釈天立像は国指定重要文化財。木造狛犬・木造菩薩面・錫杖・孔雀文磬は県指定有形文化財。高階惟行・坂上惟伴連署田地寄進状・木造仁王像・木造十一面観音菩薩立像・木造慈恵大師坐像・木造日光・月光菩薩立像は市指定文化財。

（8）瀧山東照宮

瀧山寺本堂の東隣に建てられているのが瀧山東照宮である。正保２年（1645）に徳川三代将軍家光の命により創建された。これは、日光および久能山の東照宮と並ぶ日本三東照宮の一つである。本殿・拝殿・幣殿・中門・


伊賀八幡宮


大樹寺三門


瀧山寺三門


瀧山寺本堂


足利尊氏石宝塔


岩津1号墳


岩津1号墳出土品

鳥居・水屋・太刀二口は国指定重要文化財。板地著色三十六歌仙図扁額は市指定文化財。

(9) 足利尊氏石宝塔

大樹寺から西へ1km程行った、矢作川近くの大門水郷公園西の八剣神社境内本殿裏に足利尊氏の墓がひっそりと建っている。塔身の部分に「源尊氏公　足利治部大輔　征夷大将軍　等持院殿妙義　干時延文三天　四月晦日　足利内臓之尉　敬白　正啓□□」と彫られている。笠石2個と塔身が延文3年(1358)の創建当時のものである。また、八剣神社には懸仏が残されている。永仁4年(1296)の墨書銘があり、「三河国額田郡大門寺」とある。

(10) 真福寺

足助街道を北上し、青木川のたもとから北に500m程進むと東蔵前の交差点に着く。足助街道は北に延びているが、ここから東に延びる道を1.5kmほど進むと真福寺に到着する。真福寺の起源は古く、およそ1400年前、推古天皇の時代（白鳳時代）に物部守屋の二男真福が本堂山で霊験を得て、山上に湧き出る泉を発見した。これを広く世の人のために分け与えようと思い立ち、建立したのが真福寺であると伝えられている。

木造慈恵大師坐像は国指定重要文化財。塑像仏頭は健指定有形文化財。仁王門・木造仁王像・絹本著色三千仏像・絹本著色慈恵大師並侍者像・紙本墨書真福寺勧進帳・塑像仏頭・鰐口は市指定文化財。

(11) 岩津1号墳

東蔵前の交差点から足助街道を北に400m程進むと岩津の交差点に至る。足助街道はその先の分岐点で左に折れる。分岐点をそのまま100m程直進し、右に曲がると岩津1号墳が見えてくる。岩津1号墳は、天神荘南の児童公園の一角にあり、円墳である。内部の造りは、横穴式石室で2室に分かれている。この古墳からは、水晶製切子玉・勾玉・金環・鉄鏃・飛禽鏡・須恵器・土師器・環頭太刀柄頭など約100点の副葬品が発掘された。岩津1号墳は県指定史跡。出土遺物約100点は県指定有形文化財。

(12) 石田第1・第2号墳

足助街道は魔於御所の交差点を過ぎ、東名高速道路の高架下をくぐり、さらに700m程進み、岩脇の手前から右に折れ北斗台団地に向う道が旧道である。新道は今の県道39号線と同じで、細川・門立を経て桑原に至る。双子古墳とも呼ばれる石田1・2号墳は、新道沿いの丘の縁辺にある。細川小学校の南に二つの後期古墳が並んでいる。墳丘は1号墳が直径約20m、高さ3.5m、横穴式石室は全長約8mである。2号墳はかなり崩落が進んでいる。直径23m、高さ2.6m、横穴式石室は全長9.6mであった。

(13) 道標地蔵石仏と渡し場

北斗台団地入口の細川交差点から西に入る細道を400m程進むと、一体の道標地蔵石仏の前に出る。宝珠を左手に持った地蔵の光背部分に「右　わたしば」「左　仁木」と彫られている（高さ52cm）。これは、権水の渡しへの道標の役目を果たしていた。権水の渡しは、そこから右へ1kmほど先の矢作川堤防にあった。

(14) 分一番所跡

細川には矢作川を下る船から運上金を徴収する分一番所が置かれていた。番所は、権水の渡しの近くに矢作川・巴川の川船を見張るのに良い位置に設けられていた。また、陸分一銭徴収のための出張所は、足助街道沿いにあった。現在の龍渓院より桑原へ少し下がった所に位置していた。

(15) 龍渓院

足助街道が新道、旧道に分かれる地点から旧道を200m程進むと、道路南側端に「従是龍渓院」と刻み込まれた石柱が建っている。大沢山と号し、曹洞宗の寺である。宝徳3年(1451)の開山とされている。境内一面には、苔が生えて、まるで緑のじゅうたんを敷き詰めたみごとな景色が広がっている。「岡崎の苔寺」とも称されている。

(16) 桑原の道標石柱

龍渓院から足助街道を北に進むと桑原の集落に出る。奥殿への道の分岐点で、細川・門立と進んできた新道とも合流する地点に道標が建っている。「右　おくとのみち」「左　ぜ


真福寺


細川の道標地蔵


桑原の道標石柱



神明宮祭礼「山車」



瀧山寺鬼祭り

んこうじみち・足助」「右　おかさきみち」「文化七庚午年春桑原□□」と彫られている（高さ56cm・15cm角）。ここから東に400m程行くと奥殿陣屋に至る。ここから１km程北東に進むと郡界川に出る。

■街道沿いの祭り■

（1）神明宮大祭（能見町）

５月第２土・日にかけて行われている山車祭りである。８台の山車を保有し、試楽（前日）・本楽（当日）で山車（各キレで１台ずつ保有）の曳き回しが行われる。山車のせり出し舞台では、手踊りが奉納される。踊り子には、氏子の家の女の子が選ばれる。身内の人は、山車について廻り、「花」と呼ばれる包み金を投げる。本楽の夕刻から、山車の引き込みが行われ、この祭りの見せ場を作って終わる。

（2）瀧山寺鬼祭り（瀧町）

旧暦の元旦から７日間、本堂で天下泰平・五穀豊穣を祈る修正会が行われ、その結願日（７日目）の晩に祭りが催される。祭礼日に近い土曜日を当てている。平成20年は、２月16日に行われた。祭りは、午後２時から十二人衆の饗応、４時に行列、６時に仏前法要、鬼塚供養、庭祭り（田遊祭）、午後８時に火祭りが行われる。庭祭りでは、東次郎・西次郎の２人が12kgもある大薙刀による悪魔切りをした後、コツボネ・福太郎が田植えまでの所作（田遊び）を演ずる。

祭りのクライマックスは、火祭りである。12歳、25歳、42歳の男子の厄除け祈願も含まれ、各年齢から１名ずつ選ばれた者は、本堂で執り行われる儀式に参加する。そして、３名は本堂で儀式用の面を被る。42歳の男子は祖父面、25歳は祖母面、12歳は孫面を被る。さらに、30名の年男も松明を持って儀式に参加する。３匹の鬼がたくさんの松明をかざした厄男たちと外陣を走り回る姿は、とても壮観である。岡崎に春を告げる祭りでもある。

（3）古村積神社大祭

10月第３土・日に行われる。１日目は試楽と呼ばれ、午前中は祭礼の準備、午後からは境内でチャラボコ囃子を行う。各キレ（上・中・下）ごと、別々に行っている。３地区とも同じ拍子で行っている。２日目は本楽と呼び、午前10時頃から囃子が出て、各キレごとに、飾り馬（オマント）作りに取り掛かる。午後１時頃、飾り馬・裸馬共に引き出して、各キレとも、午後２時から２時30分頃、神社に着くようにしている。神社に着くと飾り馬は、飾りを外し、馬の首の方に２人、尻の方に２人付いて、神社の境内を１頭ずつ走らせた（駆け馬）。

（のもと　きんや／岡崎市図書館プラザ交流「むかし館」）

参考文献

『愛知県歴史の道調査報告書Ⅷ』―飯田街道・足助街道―　平成４年　愛知県教育委員会

『矢作川―川と人の歴史―』　平成11年　岡崎市美術博物

『岡崎―史跡と文化財めぐり―』　平成15年　岡崎市



馬の塔（オマントウ）古村積礼神社祭礼



チャラポコ奉納（古村積神社）

街道 宿場町 シリーズ

足助における歴史的町並の保存・修景

—まちづくりのあゆみ—

大森峰輝

■はじめに■

旧足助町は、2005年に周辺市町村と合併し、豊田市となった。豊田市足助地区の中心部（以下、足助という）は、江戸から明治期に尾張・三河と信州を結ぶ交通の要衝「宿場町」として発展した。足助を通る伊那街道は、三河湾で取れた塩を信州まで運んだこと、足助からは馬に荷を積み替えて運んだことから、「塩の道」、「中馬街道」とも呼ばれていた。

足助は明治初期に最も栄え、商家や宿屋が密集した。しかし、輸送手段が鉄道へと移行するにともなってさびれ、戦後はさらに過疎化の道をたどっていった。

足助には、現在も古い町屋建築が多く残り、背景の山々、足助川と一体化して魅力ある町並空間を形成している。産業構造の変化などにより、宿屋の数は著しく減り店舗形態も変化しているが、その古い町並を活かして「中馬のおひなさん」や「たんころりん」といったイベント開催など、住民によるまちづくりが盛んなところである。

■足助の町並■

足助は、緩やかに蛇行する足助川の南に位置する西町、北に位置する新町、本町、田町にかけての約2kmである（**写真1**）。新町、本町、田町は、寛永6年（1629年）の「足助村見地帳」にも現在の地名が記されている。街道沿いには、妻入と平入の町屋建築が並存する伝統的な町並が残っている。足助川は建物が密集した町並に空間的拡がりを演出し、山々はその背景としての役割を演じるとともに街道の方向性を強調している。

玄関口にあたる西町は明治から大正期にかけて宿屋が軒を並べていたところであり、町屋構えの残る旧渡辺家住宅や妻入二階建ての玉田屋（旅籠）などがある。入口に馬頭観音、大日如来などの石仏が祀られている新町は、妻入や白漆喰塗籠造の町屋が混在する町並を形成している。妻入の商家は、間口は5m程度と狭いが奥行きは40～50mもある。本町は江戸期に足助の中心であったところで、大商人が集まり大きな商家が建っていた。鈴木家住宅（紙屋）は間口が約30m、奥行きが70mという広大な屋敷で、7つの土蔵、茶室がある。他に、佐久間家（両口屋）、太田家住宅（三嶋館・**写真2**）、白木屋など、江戸から明治期にかけての町屋建築が多く残っている。田町は江戸期に多くの人馬が行き交ったところで、明治中期には塩問屋が集まっていた。県の有形文化財に指定されている足助中馬館（旧稲橋銀行足助支店・**写真3**）のほか、古い町屋が残る。



写真1　足助の町並



写真2　三嶋館



写真3　足助中馬館

さらに、足助には町並を特徴づける街道から山側や足助川に延びる小路がある。小路の両側には敷地の境界まで迫る土蔵が建ち並び、街道沿いとは異なった印象を与えている。新町のマンリン小路（**写真4**）は、黒の腰板張りと白の漆喰壁の土蔵が4棟連なり、山側への通路としての空間を演出している。海老屋小路など足助川の川辺へ降りる小路は、見通しを確保している。川辺からは、石垣の上

に町並の背面を見ることができる。

以上のように、足助の町並には町屋建築が多く残り、背景の山と川辺という地形的特徴を有する景観がある。



写真4　マンリン小路

■足助のまちづくり■

「足助の町並を守る会」

足助では、1975年に町並の保存と住環境の整備を目的として「足助の町並を守る会」が結成された。1978年に、第一回全国町並ゼミを有松（名古屋市緑区）と共同で主催したことは有名である。また、1977年に持ち上がった足助農協金融部の建物の取り壊し計画を撤回させ、1982年にこの建物を修復し商業、金融、交通、町並などの資料を展示する足助中馬館を開館したことでも知られている。

この会の最大の目標は「重要伝統的建造物群保存地区（以下、重伝建という）」の選定を受けること、それに先立つ条例の制定であった。これに向け、1977年に「足助町町並保存対策協議会」による調査が行われ、保存条例の試案が作成された。しかし、「重伝建」選定を歓迎しない住民が相当数いる、看板などに関して商店の合意が難しい、交通規制が難しい、町屋の修復に費用がかかる（足助町の財政難）などの理由により、条例の制定及び重伝建の申請は見送られた。

その後、古い町屋を利用していた豊田信用金庫の鉄筋コンクリート造への改築の話が持ち上がった。この会の熱心な要望により、1979年に町並に調和するような土蔵造り風の外観に改築された。これ以降、多くの住宅や商店が町並に調和するように新築・改築されたり、屋根や漆喰壁の修繕、格子や看板のデザインなどが相次いだ。町に補助金の要綱はなく、これらはいずれも自己負担によるものであった。このように、住民の町並保存・修景への取り組み気運が高まっていった。

「足助まちづくりの会」

1987年には、新たなまちづくりの組織として「環境基金の会」が発足し1990年に「中部地区の総合的な景観整備についての陳情書」を提出した。そして、1991年に行政と住民らが参加する「中部地区環境整備委員会」ができた。

1993年には、「足助の町並を守る会」、「環境基金の会」、「足助の川を守る会」、「中心市街地活性化委員会」などの住民組織7団体が官民一体となってまちづくりに取り組む組織を作ることを旧足助町に要望し、行政担当者を加えた「足助まちづくりの会」が発足した。そして、自主的な町並保存活動と修景の役割を担うようになった。

「足助まちづくりの会」は、1994年に「足助の街づくりに関する要綱」と「足助の街づくり規範」を制定した。その基本となる考え方は、保存・修景を通して魅力的な足助の町並を形成していくことであった。これにより、町屋の新築・改築に際しては事前に町に届け出て、意匠・材料・色彩などについて建築士と協議し、建築確認申請が受け付けられるようになった。

「足助まちづくりの会」は、1994年に建設省（現国土交通省）の「街なみデザイン推進事業」の補助金により、町並デザインの手引書を作成した。さらに、1995年から2004年にかけて建設省（現国土交通省）「街なみ環境整備事業」の補助金を利用し、「足助らしさを活かすまちづくり事業」を進めていった。具体的には、補助金の受け皿的役割を担い、小公園の設置、郷倉・区民館の新築、小路や街路の石畳化、住宅の修景などを実施した。「足助まちづくりの会」はこの事業終了と同時に解散した（現在、活動は「足助まちづくり推進協議会」に引き継がれている）。

行政と「足助まちづくり推進協議会」

2005年、足助町は周辺の豊田市、藤岡町、稲武町、旭町、小原村、下山村と合併した。

2007年に策定された豊田市景観計画では、足助は景観重点地区の候補地区にあげられている。そして、歴史と自然と生活が一体となった景観づくり、伝統的建造物の保全と新しく建てられる建造物などの景観配慮が基本方針として記されている。具体的には、建築物などに関するルールづくり、無電柱化や街路の美装化などにより歴史的景観の演出を進めていくことが計画されている。

現在、豊田市では都市再生整備計画を策定中であり、国土交通省認定を目指している。また、「足助まちづくり推進協議会」と協力して、修景・保全案の作成や住民への広報活動、「重伝建」選定を目指した取り組みも進められている。

■おわりに■

足助には、平入と妻入の漆喰塗籠造の町屋が多く残る歴史的町並がある。1970年代半ば以降、「足助の町並を守る会」、「足助まちづくりの会」に代表されるまちづくり組織の活動により、住民の町並保存・修景への取り組み気運が高まっていった。

現在、「足助まちづくり推進協議会」が行政と協働しながらこれまでの活動を発展させるべく精力的な活動を続けている。残念ながら、町並保存・修景に対する住民意識には温度差がある。建物を改築する際の工法・費用、看板や広告の氾濫などの問題克服といった課題も残されている。

活動のさらなる展開によって、足助のまちづくりが実を結ぶことを祈念したい。

（おおもり　みねてる／豊田工業高等専門学校教授）

[参考文献]

1）加茂郡足助町（1978）『足助の町並―伝統的建造物群保存地区調査報告―』
2）愛知県史編さん委員会（2006）『愛知県史別編　文化財1　建造物・史跡』
3）西村幸夫（1997）『町並みまちづくり物語』
4）豊田市（2008）『豊田市景観計画』
5）豊田市（2006～）『足助のまちづくり瓦版』
6）まちづくり部会（2008）『あすけまちづくり部会だより』

街道宿場町シリーズ

稲武宿

野田理吉



稲武朝だち足助で一夜
*　三州岡崎まだはるか　まだはるか*
宿り重ねて情けに明けりゃ
*　明日の夜明けは雨となる　雨となる*
赤いたすきの娘の唄を
*　聞けば稲武が近くなる　近くなる*
朝は朝つゆ夜は夜つゆ
*　馬よいそげや日がくれる　日がくれる*
（稲武馬子唄）

■はじめに■

今から40年程前であろうか、信州旅行の帰りに木曽路の国道19号線を通らずに、天竜川沿いにおりて、飯田から国道153号線を通り名古屋まで帰って来たことがある。雨が激しく降っていた。今にして思えば根羽村の月ヶ瀬付近であろう、昼なお暗い杉の大木が林立した中のくねくねしたひどく細い一本道を、渓流を左岸に見ながら走っていた。そして対向車が来ないことをひたすら祈りながらハンドルにしがみついて稲武にたどり着いた記憶がある。

当時の稲武には道の駅のある現在のようなバイパスはなく、当時唯一の信号交差点である役場前を左に曲がって大橋を越え、一本道の商店街を抜けて次のポイントである足助を目指した。稲武を出てしばらくは比較的緩やかな上りが続いたが、徐々に道は険しい山道にさしかかってきた。伊勢神峠である。郡界橋の大きなカーブをきり、峠に近づいてみると真新しい有料のトンネルが待っていた。多少拍子抜けである。そこからは坂道を転がり落ちるようにひたすら下り、足助にたどり着いたときは何とも言えぬ安堵感を覚えた。それが三州街道と知ったのは、それからしばらくたってからである。

■稲武の地形と歴史■

地形的には町域の大部分が起伏ある山地で覆われ、その中央部を流れている黒田川と名倉川、あるいは西を流れている小田木川、段戸川と、一級河川矢作川の支流沿いに多くの集落が点在している。周辺は険しい山々に囲まれ、西に伊勢神峠、東に杣路峠と、三州街道の４大難所と言われる峠の二つがここ稲武にある。黒田川と名倉川の合流付近の市街地が武節、稲橋で、稲武町の中心市街地として位置している。

稲武町は昭和15年に武節村と稲橋村が合併した山間の閑静な町であったが、現在は平成の大合併により豊田市稲武町である。古くから稲武は名古屋・西三河文化圏の影響を受けているが、行政区分から見るとごく最近まで北設楽郡に属していた。なぜ行政区分のみ北設楽郡東三河豊橋・浜松文化圏に属していたかは大変興味があるところだ。戦国時代には信州と三河の重要な戦略上の拠点として武節城が築城され武節郷十一ヶ村を支配していたが、度重なる戦乱でその帰属は翻弄され続けた。戦国時代の武田勝頼が長篠合戦の敗走途中に立寄り翌朝信州に逃れた史実や、さらに南北朝時代にさかのぼると尹良親王関連の事跡等も残っており、歴史的に見てもこの地は古くから交通の要衝として発展していたものと思われる。

■三州街道■

三州街道とは信州方面から見た場合の呼び名で、名古屋方面からは信州飯田方面に通じる街道として飯田街道と呼ばれていた。信玄が軍事上整備したとも、家康が命じて整備したと言われているが、それ以前の鎌倉・南北朝時代から既に信州への往来は見られた。南北朝時代、南朝尹良親王が北朝方から追われ足助から逃れてきたのであるが伊勢神峠を越える厳しい山路であったろう、それが今回の三州街道の前身であったことは想像に難くない。現在も足助には中御所、稲武には御所貝津という当時を彷彿とさせる地名が残っている。

三州街道を名古屋・西三河方面から信州方面に辿ると、まず足助の手前、足助追分で岡崎方面からの七里街道と合流し、物流中継地として賑わっていた宿場である足助を抜けると眼前には険しい伊勢神峠。前にも述べたが三州街道４大難所の一つであるこの峠は古くは石亀峠と呼ばれていた。かつて峠から伊勢方面が望めたとのことで、奥三河や信州の人々が伊勢に行かずとも拝礼できるよう峠には伊勢神宮遥拝所がある。その昔、奥三河の村からお伊勢参りに出かけた村人を「峠むかえ」といってここまで迎えに出たとのこと。この厳しい伊勢神峠にも明治31年に馬車用トンネル（伊世賀美トンネル）、昭和35年に現在のトンネルができ、往時の険しさはまったく想像できない。旧道は峠を下るといっそう急峻になり足助荘連谷集落が現れる。街道は郡境の段戸川を越えて稲武に入る。川向こうは西小田木集落。またすぐに坂を上り六部峠に出る。峠を越えると畑の向こうに小田木集落が見え、水別峠が望める。旧道は上り下

りが険しい。水分峠からは黒田川に沿ってゆるゆると下り坂が続き、視界は一気に広がり遠く険しい信州の山々が見えてくる。御所貝津、武節の稲武中心街が目前である。町の中心部では名倉川が設楽方面から流れ込んでいる。川向こう河畔にある大銀杏脇に渡りそこから稲橋。稲橋の集落を抜け隣の夏焼集落を通過するとまた地蔵峠が迫る。峠を越えて杣路峠の麓の野入集落に入る。野入は今なおのどかな風情が漂っている集落である。そして難関の杣路峠を越えるといよいよ信州根羽村に入る、以上が稲武を通過する三州街道のあらましである。

■三州街道は中馬の道、塩の道、信仰の道■

三州街道を語るときに中馬や塩の道を抜きに語ることは出来ない。家康は五街道を始めとする幹線街道に宿駅制を設けた。さらに人馬継ぎ立てという伝馬制度も設けて、宿場ごとに馬と馬子を替えてゆく輸送方法を確立した。荷を同じ馬の背に載せて運ぶ「付け通し馬（通し馬）」は禁じられ、宿場ごとに荷を積み替える、口銭も徴収される、参勤交代等で荷が遅れがちになるなど、安全に荷を運搬するには非常に不便であった。代わりに利用されたのが三州街道のような脇街道である。馬の背に荷を載せて運ぶ物流の道、中馬の通る道として三州街道は「中馬街道」とも呼ばれた。

「中馬」とは信州の駄賃稼ぎのことで、山間部の農民の農閑期の副業から専業化したのが始まりのようである。道が狭いため一人の馬方が4匹の馬を縦に連ねて後ろから追う一綱四疋の馬追いであった。運搬する物資は生活物資が主で、信州からは米やタバコ、栗やクルミ、木地椀や麻布等々多種多様の品が、戻り荷として三河より海産物や綿、砂糖や塩等が運ばれた。特に海のない信州では塩は貴重なもので生活の必需品であった。そのため、この街道は「塩の道」とも呼ばれている。三河各地から足助に運ばれた塩は「足助直し」で馬の背に積みやすい一定の大きさにそろえられ、信州まで運ばれた。現在のような大量運搬のトラック輸送や列車輸送等が確立するまでは、このような馬による物資運搬で信州との交流が行われていた。明治40年に国鉄中央線が東濃地方に開通すると、この機能は貨車運搬に取って代わられ、徐々に足助、稲武とも交通の要衝としての役目を終えた。

稲武には十三の集落がある。中馬の時代、中でも三州街道沿いの西小田木、御所貝津、野入には計八軒の馬宿があった。もちろん一般の旅行者の為の普通の旅籠もあったのであろうが定かではない。中馬の馬宿は町の中心部より峠の麓の集落に多く見られる。杣路峠麓の野入には「中之屋」「大和屋」「津田屋」があり、稲武の町の中心には御所貝津の「馬宿」一軒のみ、西小田木には「もんや」「タワカネ」「ハネ」「おくて」の馬宿があった。西小田木は連谷同様、伊勢神峠麓の段戸川を挟んだ谷間の集落である。通し馬は峠の麓でゆっくり休んで翌朝の峠越えに備えたのであろう。現在、野入にドライブイン中之屋があるが、祖先はかつての馬宿主だそうである。「通し馬」は馬宿泊まりを重ねて名古屋・西三河方面から信州飯田まで運ぶものであるが、馬稼ぎの中に「継ぎ馬」もある。「継ぎ馬」は問屋から次の継ぎ問屋までしか運ばない輸送方法。武節の中心部には多くの継ぎ問屋があり荷をさばいていた。多い日には100頭もの馬の出入りがあったそうで、中でも塩問屋等で隆盛を極めたのが「つたや」と「大和屋」である。現在「つたや」は寿司屋として、また「大和屋」は武節街並の中でもひときわ際立ち、街道宿場町らしい景観として現在も残っている。

一方、当時は農山村の人々を始めとする多くの一般大衆に信仰が深く根付いていた。農民の自然神崇拝は一般的で、山の神、水の神などの自然神を祭神としている神社も多くある。また各種の講も生まれ、当時は信仰が生活の精神的な支えであった。遠く伊勢神宮や熱田神宮、或いは長野の善光寺などにも代参講として村の代表者が参詣に出かけ、御札を土産として配ることも日常であった。稲武の中心部には火ぶせの神を祀っている遠州秋葉山本宮秋葉神社への参道（名倉街道）を指し示す石灯籠も現存している。このような信仰の路としての往来も多くあったようで、多くの信心深い人々にこの街道が利用されていた証である。

■最後に■

観光地となった足助には数えきれぬほど出かけたが、稲武は通過するだけでわざわざ出かけることはなかった。しかし、調査で幾度か通っているうちに、足助を過ぎてからの三州街道、とりわけ素朴な連谷や小田木集落、あるいは今も往時の姿が蘇る野入集落のたたずまいや里山などの風情から、都会にはない、自然の魅力や歴史の魅力に触れることが出来たことは得難い貴重な体験であった。しかも、幸運にも稲武の歴史家の方から話をうかがう機会もあり、稲武町内に今なお当時の面影を残している幅員3尺程度（約90cm）の旧街道を案内していただいた。それは山の南斜面の際を縫うように馬方が4頭もの馬に荷を載せて運ぶ。すれ違いもままならない路を日に約8～10里（約32～40km）稲武から足助までを一日で移動した、とのこと。当時の人々の苦労が脳裏をよぎり、感慨も深く、いろいろ考えさせられる今回であった。

（のだ　りきち／愛知県立芸術大学美術学部教授）



武節の町並、旧街道の大和屋界隈



六部峠を下り、小田木集落を望む

街道宿場町シリーズ

飯田市下伊那の三州街道

金澤雄記
竹ノ内雅人

■飯田周辺（下伊那）の三州街道■

〈下伊那の三州街道の歴史〉

岡崎宿から飯田宿を通り塩尻宿へ続く三州街道は、伊那街道、飯田街道とも称される。途中、駒場宿から清内路峠を通り木曽路へ抜ける清内路街道、飯田宿から遠山郷を通り掛川へ抜ける秋葉街道と、新野へ抜ける遠州街道、さらに木曽路へ抜ける大平街道、伊那部宿から木曽路へ抜ける権兵衛街道、諏訪へ抜ける杖突街道などの分岐がある。

総延長約130km（32里）の三州街道であるが、飯田宿から飯田以北と以南でその性格がことなる。ひとつは地形で、箕輪から飯田城下近辺までは伊那谷の比較的平坦な河岸段丘上を南北に通るが、それから南は寒原峠、治部坂峠、赤坂峠など山間地の難所を通るルートとなり、近世の関所も浪合などに設定されていた。もうひとつは参勤交代の有無である。飯田近辺までは飯田藩主のほか、知久氏、座光寺氏など旗本が参勤で往来するため、宿場の地子が免除されるなど、地元の領主によって保護されてきたが、飯田以南となると定期的な領主の参勤がみられないため、もっぱら中馬など輸送にたずさわる人々を中心とした往来がさかんで、本陣・脇本陣はなく、問屋や村・町役人が宿場の経営にあたった。しかし旅人の往来を通して、幕末にさかんとなった国学のほか、手筒花火や歌舞伎、浄瑠璃など、この地域を特徴づける文化を今に伝えている。そのほか、水戸藩天狗党の西上ルートとなった経緯から、幕末の動乱の息吹を感じる事のできる資料も数多く残されている。

また三州街道は中山道の脇往還としての役割のほかに、尾張・三河・遠江と中南信地方との物資輸送を行う主要なルートとして栄えたことはよく知られている。この物流の主要な役割を担った中馬は、周辺村落の民衆が手持ちの馬を用いて輸送にあたったもので、耕地面積の少ない山村部の村々の重要な収入源となった。このほかにも、通常の伝馬に比べて長い距離を継ぎ送りし、しかも短期間のうちに安い賃銭で輸送できるといった理由から各地の商人に好まれ、本来宿駅の問屋が担っていた物流の役割を脅かすまでに成長していった。このため18世紀ころ、三州街道沿いの



下伊那地域を通る三州街道略図

宿駅の問屋が、中馬稼ぎの村々と松本町など城下町商人を相手取り、訴訟を起こすまでに至ったが、最終的には幕府の裁許によって中馬の権利が認められ、三河や遠江からは塩、肴、茶といった信濃で需要のある物資を、中信・南信地方からはたばこ、柿、椀、木櫛、紙、生糸といった特産品を輸送する担い手となった。このような中馬の往来が活発であった様子は、飯田町を往来する中馬が「出馬千匹、入馬千匹」とうたわれたことからもわかる。この中馬は、明治期における道路開鑿事業の完成と荷馬車の導入まで、この地域における主要な流通手段として活躍した。こうした背景から、伊那街道のほか遠州街道、秋葉街道沿いの宿場では旅人や中馬稼ぎを対象とした宿場が発達した。なかには市田の原町や八幡町など、中馬によって輸送された商品を売買する在郷町としての性格も帯びる場所があらわれ、飯田城下町とのあいだで商業の権利をめぐる争論がおこることもあった。

〈下伊那の三州街道の町並みと建築〉

下伊那の宿場町を総じて見ると、三州街道は現在国道153号線とほぼ同じルートをたどるが、宿の中心部は国道がバイパスとして外れて通るため、宿の中を通る街道は旧道となり、街区はよく旧状をとどめている。

宿の町並みに関しては、江戸期の町家建築は大火や取り壊しによりほとんど残っておらず、古写真や部分的に切妻造、平入、もと板葺の町家建築を確認できる程度である。概ね宿の建物は明治以降の建築であり、景観にそぐわない近代的な家屋も見受けられる。

さらに下伊那を代表する建築として「本棟造」が挙げられる。本棟造とは、中南信特有の民家形式であり、切妻造、妻入で、もとは石置板屋根であり、緩勾配の屋根が美しい建

物である。間口が6間以上と広く、正面はほぼ左右対称のプロポーションで二階に出格子窓を付けるものが多く、優美な印象を与える民家建築である。多くは農家として広大な農地の中に建てられるが、特に街道に面して連続して建てられる本棟造は、軽快な印象を与える町並みで、飯田市座光寺原、高森町、市田宿、松川町、片桐宿、辰野町、小野宿などで見られ、三州街道特有の景観である。

その他、下伊那地域は明治期から戦後にかけて養蚕が盛んな地域であり、二階を飼育室とする二階建ての大型の主屋や、付属する蚕室長屋が街道添いにも多く見られ、養蚕の風情を色濃く残している。

なお、下伊那地域は「市田柿」が名産であり、秋になると各戸で柿の皮をむき、軒先や二階、長屋一帯に柿を吊るすため、辺り一面オレンジ色に染まった美しい風景が見られる。

以上のような景観が三州街道の下伊那地域での特徴である。



三州街道に面する養蚕民家（座光寺宮崎）
軒先に柿すだれが見える



三州街道に面する本棟造（座光寺原）

■飯田宿■

〈飯田宿の歴史〉

戦国時代坂西氏の居城であった飯田城の城下町開発は、武田信玄の伊那攻略後、城代となった秋山信友らがこの地方の経略拠点のひとつとして部下の将兵およびその家族を城の周囲に住まわせると同時に、市や町場の整備が行われたことを端緒とする。1590（天正18）年、豊臣秀吉の命によって毛利秀頼が10万石の大名として入城すると、その格式にみあった城の拡張と町地の開発が行われるようになり、あとを継いだ京極高知とともに「十三町」とよばれる碁盤の目状の町人地および仲ノ町、馬場町などの武家地をつくりあげた。また、飯田町の伝馬制度も高知の知世である1594（文禄3）年に整備されている。その後1600（慶長6）年の小笠原秀政入封、および1612（慶長18）年の幕府領編入の時期は一端城下町が衰微したが、1617（元和3）年に5万5000石で入封した脇坂安元は、あらためて城下町の整備につとめた。1645（正保2）年に伝馬制度を充実させて、名残町を伝馬町と改名させると同時に、惣曲郭外北側の三州街道沿いの土地に桜町を建て、伝馬町と桜町をあわせた5町を宿場として人馬継ぎ立ての役目にあたらせた。このほか城下南西部の三州街道沿いの土地に箕瀬町が、また遠州街道へつながる南の街道沿いには愛宕町が、飯田城下町続きの在郷町となり、市田宿の原町などとともに中馬流通の隆盛にあわせて発展した。このふたつの町は現在でも往時をしのぶ建物が残っている。こうした在郷町の発展は飯田城下町の商業を脅かすまでになり、享保年間以後には塩・肴・茶といった品目を城下町以外の場所で売買することを禁じる法令が、脇坂氏のあと1672（寛文12）年に2万石余の大名として入った堀氏により出されるなど、領主による保護をうけていくようになった。

〈飯田宿の町並みと建築〉

飯田宿は宿場町であるとともに、飯田城の城下町であるため、街道一本筋に広がる宿場町とは性質が異なり、武家地や町人地の住み分けがなされた町である。

一般的な城下町は三叉路や鉤の手などを多用し、複雑な街並みを構成するが、飯田城下は地形的な歪みや路地空間を除けば、明快な碁盤の目状に道が配備されている。ただし、三州街道の両口と、木曽へ抜ける大平街道の入口の計3箇所に桝形が設けられていた。

また、飯田城は天竜川に向かって突き出る尾根の先端に築城され、山手側に城下町が形



飯田宿略図

成されているため、城下町から本丸に行くほど標高が低く、城を見下ろす景観になるのが特徴であり、同様の地形の城下町が下伊那地域でいくつか見られる。

宿の建築に関しては、昭和22年の大火で城下町の約8割を焼失し、明治期以前の町家や寺社の建物はほとんど残っていない。明治から大火までの町並みは多数の古写真や絵図から知ることができ、板屋根の切妻平入の二階建ての町家が三州街道添いに連なっていたことが分かる。

被災後の整備で防火帯が設けられるなど道筋が変わり、さらに近年の再開発整備により



大火で焼け残った箕瀬の町並み
手前が町人地、奥には足軽長屋があったところで、突き当たりに直角に折れる桝形があった





殿町に残る福島家住宅
（市指定文化財）
切妻造妻入で、質素な造りの武家住宅の遺構



駒場宿略図

高層ビルが建てられ、宿や城下町としての景観は大きく変容している。

■駒場宿■

〈駒場宿の歴史〉

駒場宿は飯田宿より南西へ約３里（12km）のところに位置し、この先浪合宿へ続く三州街道（伊那街道）と、木曽へ抜ける清内路道に分岐する交通の要所である。現在の地籍は阿智村駒場である。

宿自体は近世初期から存在しており、元禄ころまで旗本の宮崎氏知行所だったために上町、下町へ宮崎氏の陣屋が置かれ、領地運営の中心となっていたが、史料が少ないために詳しい事はわかっていない。その後宮崎氏は幕府の楮木（板材に利用される木材）収納不首尾などを理由に改易されると、駒場宿は幕末まで幕府領となった。また、飯田以北の宿場町とは異なり領主からの地子賦課免除などはなかったため、1772（明和９）年には中馬と宿伝馬の荷物継ぎ送りに関する争論が起こり、駒場の宿場御用は免除された。しかし触状や西国大名の武家通行による人馬の継ぎ送りは依然行われており、駒場宿の負担を軽減するための補助を求める史料が残されている。近世後期になると駒場宿のほか浪合・平谷・根羽などの村々で中馬稼ぎの数が増加し、1820（文政３）年には19軒76頭の中馬稼ぎが計上されるなど明治中ごろまで宿の主要な産業となった。近代に入ると大正・昭和初期を中心に養蚕業を主体とした農家を対象とする商業で栄え、多くの料亭が軒を連ねるようになった。

〈駒場宿の町並みと建築〉

駒場宿の町並みは、まず宿の中央で三州街道がほぼ直角に折れており、そこを境に上町と下町に分かれている。

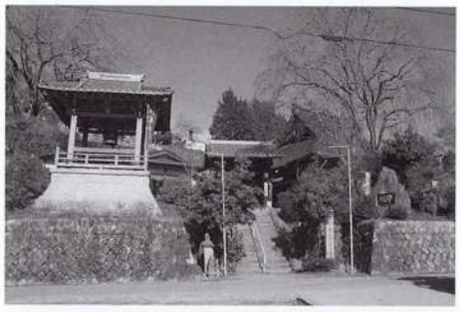
上町は1866（慶応２）年の大火で町の約８割を焼失し、また昭和15年にも幾棟かを焼失する火災があった。しかし町並みには明治期の切妻造平入の町家が軒を連ね、宿としての景観をよく残しており、また大火以前のものも含め土蔵も数多く残存している。

下町は明治23年に上町からの街道を直線延長した新たな拡張道路が敷設されたことから、比較的新しい町並みが広がっている。

その後、鉤折れの辻から昭和２年に新たに川端へ下りる道が造られ、もと鉤折れだったところは今では十字路と変わり、複雑な街区を形成している。

明治期には、近くに組合製糸工場ができ、養蚕景気で経済が潤ったため、町には芸者が30人いたとされ、置屋や飲食店の三階屋が幾棟かあり、現在でも３棟ほど残存している。

現在、地元の商工会や史学会を中心に、まちづくりが行われている。


1573（元亀４）年、武田信玄は三河から甲斐に帰参の折、駒場山中で死去し、宿内の長岳寺で火葬されたと伝えられる。国道バイパス敷設の際、寺の位置は移動しているが、新しい境内には供養塔（石造十三重塔）が祀られている。


現在の駒場宿上町の町並み
切妻造平入の町家が建ち並ぶ中に、ハイカラな擬洋風の旧阿智村郵便局（昭和8年建築、木造二階建）が建ち、町並みのアクセントとなっている。


駒場宿の町中の路地に残る銭湯と三階屋（もと飲食店、写真家熊谷元一氏の旧宅）

■市田宿■

〈市田宿の歴史〉

市田宿は飯田宿より北へ約１里８町（4.8km）のところに位置し、大島宿へと続く。現在の地籍は高森町上市田原である。

宿の歴史は「関川氏代々記」によると、1572（元亀３年）に問屋（関川家）と伝馬役20軒が移り住み、伝馬宿として整備されたことに始まる。武田氏・織田氏の没落後、1582（天正10）年から1590（天正18）年頃までは徳川家康の伊那郡代菅沼定利の支配下にあったが、飯田城主が毛利秀頼に代わると、執政の篠治秀政によって市田宿の再整備と伝馬役の規定が行われた。市田宿にはこうした御用人馬の継ぎ立てなど伝馬役負担のかわりとして、小物成など賦課の免除が認められていたという。宿場の機能としては、問屋の関川氏が本陣も兼ねており、関川氏の邸内には飯田藩主によって御茶屋がつくられ、本陣としての利用に供した。また、一般の旅人が利用する木賃宿のほか、各地村役人が幕府の代官所へ公用の出張のため利用する郷宿も存在していた。こうした宿場の運営は問屋とそれを補佐する年寄が中心となり、伝馬役の割り当てなどの業務を取り仕切った。また1718（享保３）年５月には飯田藩から旅人に対する商売可能な品目の定めが出されるなど、在郷町としての性格も帯びていた。

その後、1828（文政11）年の大火で中心部を焼失し、さらに1869（慶応５）年にも部分的な火災があった。



市田宿略図

〈市田宿の町並みと建築〉

市田宿を抜ける三州街道は、天竜川側に新

しく敷設された国道や農道バイパスとともに、現在でも伊那谷を南北に走る主要道路の1本であり、交通の往来も多い。1593（文永2）年、飯田城主の京極高知により、飯田宿から市田宿・大島宿・片桐宿・飯島宿の間の天竜川添いを通っていた街道が山側へ引き上げられたため、この間の三州街道は天竜川添いを通る国道153号線と同じルートになっておらず、旧道（県道）になっている。宿の北側には桝形があったが、車の往来のため直線的に整備された。わずかながら鉤型の広場となっており、面影は残っている。

町並みは付属屋を除くと、江戸期の建物は2棟の町家と、2棟の本棟造が残存しており、宿場町としての街道の風情を残している。

町家2棟は隣り合わせで建っており、宿の連続する景観に貢献している。間取りは似ており、間口6間、北側2間を通り土間とした2列3室型の町家建築である。下座敷に相当する接客空間を「しもで」と称するのはこの地域の民家建築の特徴である。どちらも二階は明治期以降に蚕室として使ったため、総二階になっており、広いスペースが確保されている。

本棟造に関しては、市田宿での現存は2棟のみだが、古写真を見ると数棟の本棟造が左右に連続していたことが分かる。

宿の各戸は、一般的に見られるような、いわゆる間口3間程度の狭い敷地ではなく、間口6間程度を有している。また妻入の本棟造と平入の町家が混在したリズミカルな町並みが市田宿の特徴である。

金澤雄記　飯田市歴史研究所研究員（建築史）
竹ノ内雅人　飯田市歴史研究所研究員（近世史）

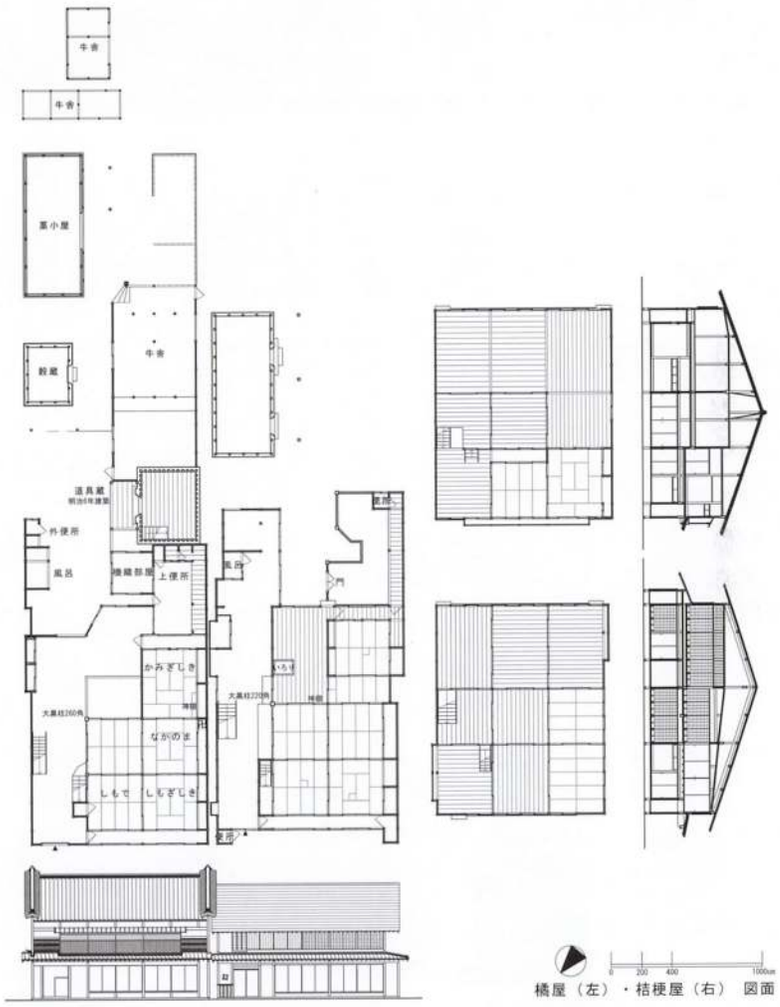
参考文献
・『下伊那史　第8巻』下伊那誌編纂会、2006.3。
・『定本　信州の街道』郷土出版社、1991.7。
・『長野県史　美術建築資料編』長野県史刊行会、1990.2。
・『飯田城ガイドブック』飯田市美術博物館、2005.3。
・『高森町史　上巻後編』高森町史編纂委員会、1972.2。
・『阿智村誌　上巻』阿智村誌刊行委員会、1984.3。
・古島敏雄『古島敏雄著作集第4巻　信州中馬の研究』1974.12。
・都筑方治『馬宿　近世街道のローマンチズム』南信州新聞社、2004.1。
・吉田伸之「飯田城下十三町と商売物」（『飯田市歴史研究所年報3』2005.8）。



市田宿の現状
手前に袖壁がある町家（桔梗屋）と、隣に大きな本卯建を持つ町家（橘屋）、その奥に本棟造の屋根が見える。街道の奥（写真左側）に桝形があった。



古写真（昭和初期）
古写真を見ると、手前の2件ももとは本棟造であり、道をはさんだ向かい側（撮影場所後側）にも本棟造が残る。



橘屋（左）・桔梗屋（右）　図面

郷宿として用いられた橘（立花）屋と桔梗屋

現代の三州街道を行く

—周辺の美術館、資料館めぐり—

名古屋駅周辺の新しい名古屋の顔を見ながら、国道153号の出発点である名古屋市東区小川の交差点を出発。
153号線を通って鶴舞、平針を経て、グリンドーロに入り足助へ、足助からは153号線に戻る。
一方、吉良からは、吉良を出て国道208号線で岡崎市、豊田市へ、豊田からは平針からのびる国道153号線で足助、稲武、根羽、飯田市へ。飯田からは153号線と並行に走る中央自動車道路で。少し寄り道しになるが茅野へ。茅野から終着点塩尻に到着。

支部特集担当小委員会　林　金之・松本壮一郎・今津　芳清・前田　薫子

●名古屋・長久手


ノリタケの森


産業技術記念館


名古屋能楽堂


ナディアパーク

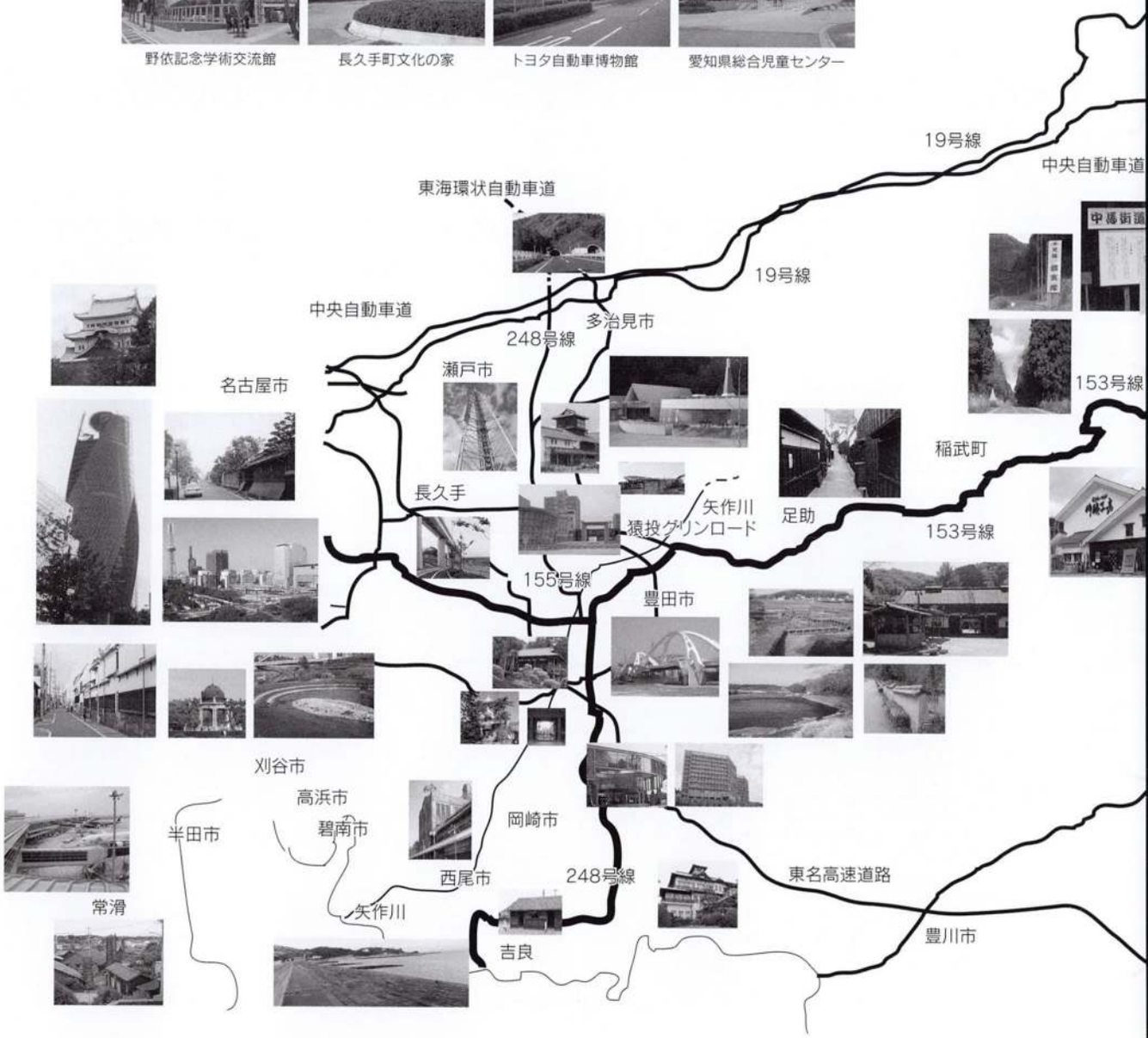

愛知芸術文化センター


野依記念学術交流館


長久手町文化の家


トヨタ自動車博物館


愛知県総合児童センター



塩尻市
岡谷市
諏訪市
茅野市
中央自動車道
伊那市
153号線
19号線
駒ヶ根市
152号線
中央自動車道
飯田市
阿智村
浪合村
152号線
根羽村
151号線












●瀬戸・多治見


愛知県陶磁器資料館


あいち海上の森センター


パルティせと市民交流館


瀬戸蔵


マルチメディア伝承工芸館


セラミックパークMINO

●飯田・茅野


小笠原資料館


飯田市美術博物館


信州高遠美術館


八ヶ岳美術館


諏訪湖博物館


神長官守矢資料館


高過庵


茅野市民館

●半田・碧南・西尾・岡崎・豊田


新見南吉記念館


高浜かわら美術館


へこなん芸術文化村


西尾市岩瀬文庫


岡崎市美術博物館


岡崎市図書館交流プラザ


豊田市美術館


参号館(コンサートホール)


豊田スタジアム


トヨタ鞍ケ池記念館


愛知県緑化センター


百年草

しなやかに浮かび上がる屋根

トヨタ葵体育館

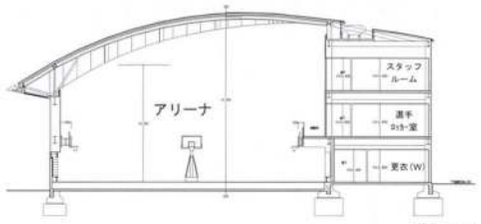
名古屋市東区

株式会社竹中工務店設計部
鈴木貴紀・渡辺俊治・浅野三男

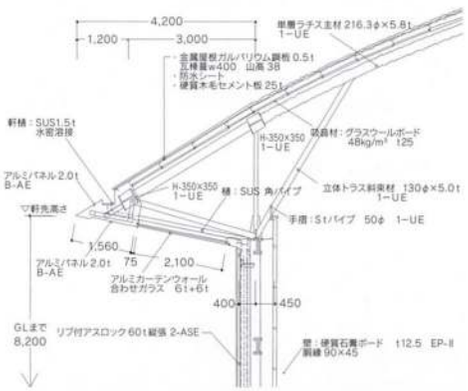
この建物はトヨタ自動車株式会社の女子バスケットボールチーム「アンテロープス」の本拠地として計画されました。アンテロープとはウシ科の哺乳類のうちシカに似た優美な形態をもつものの総称で、胴が細く、足が長く、飛び跳ねるのが得意な動物です。その生態的特徴にちなんでチーム名がつけられましたが、その器となるこの体育館にも同じく軽快なデザインを与えたいと願いました。その想いは特に屋根のデザインに結実しましたが、これはわずか216.3φの鋼管パイプによる単層ラチス構造で実現されたものです。屋根断面は極端に緩やかなアーチ形状のため端部に立体トラスを構成させています。その部分をうまく活用して鳥のくちばしのような鋭利な造形を軒先に与え、軒下開口をあわせて設けることで、外装デザインのコンセプトと採光方法の融合をはかりました。



アリーナ内観写真



断面図



軒先ディテール



外観写真



軒先夕景

ecoとdesignの両立

e-生活情報センター「design no Ma」

名古屋市千種区

株式会社竹中工務店設計部
長谷川　寛・山田基裕

中部電力㈱が約80社の賛同企業を集めて行う生活デザインのための拠点で、高感度な生活層に向けてgood designとeco lifeを発信するプロジェクトです。

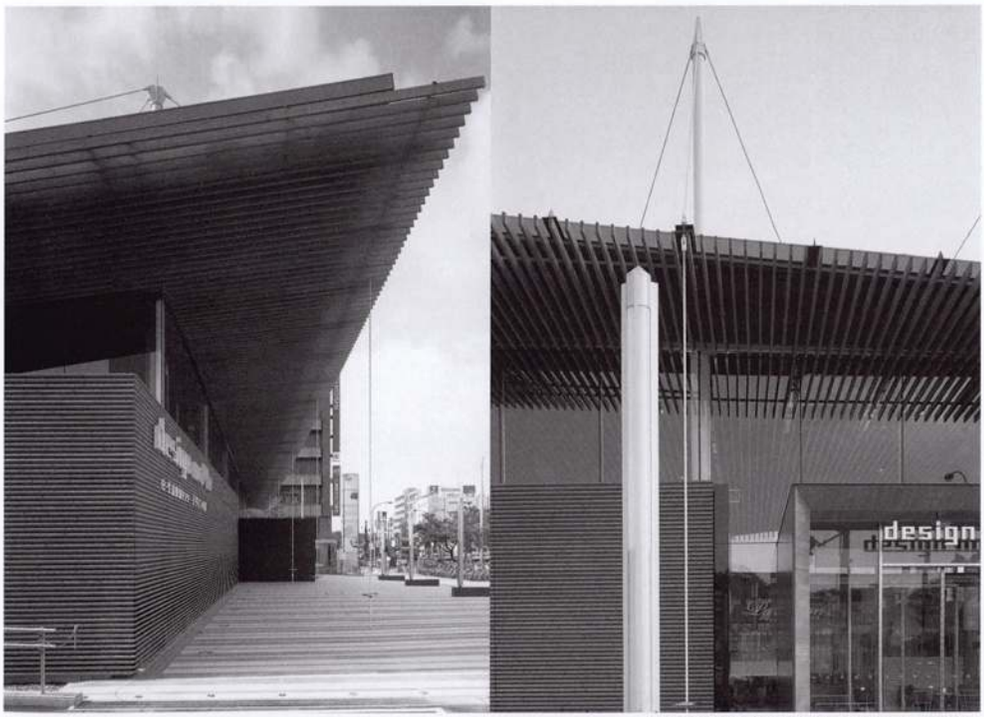
敷地は名古屋市東部の高級住宅街、星が丘駅前ターミナルの起点となる坂の下にあり、隣接する三越・星が丘テラスへ街並みとランドスケープが一体化するよう計画しています。

自然素材を最大限活用した木と緑とガラスの建築とし、屋根を浮かせることで「フォルムと光」による、「スケールによらない存在感」を生み出すことを主眼としています。

緑化屋根と軒天井赤松集成材ルーバーを、坂の上下どちら側でも、同時に両方共見せることを意図して双曲放物曲板とし、その間にある架構と屋根厚を極力薄くすることを追求しています。長辺方向で18mスパンとなる大梁の変形と梁成を小さくするため、吊り構造とし、柱の剛性を高めてサイズを小さくするために鋼管柱内にコンクリートを充填しました。

鉄骨屋根架構は1800mmピッチに直交配置された直線部材の勾配を一定の比率で変化させています。高低差が4mあり、四周共先端鉄骨小梁を90°回転させて軒樋と兼用とすることでシンプルさとシャープを追求しています。

吊り材の柱を定規に屋根の湾曲がわかりやすく見えるよう、軒天や外壁といった木の部分(面)を、柱という鉄の部分(線)でハイライトして特徴付けてライトアップを行い、「屋根を浮かす」というコンセプトを強調しています。



屋根四周は先端小梁を軒樋として使用



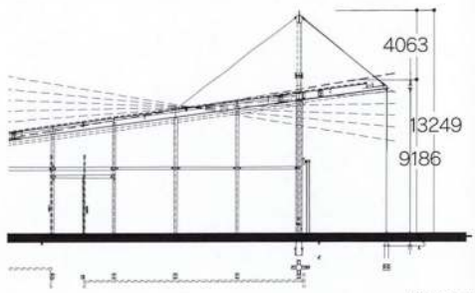
面を線でハイライトする夜景



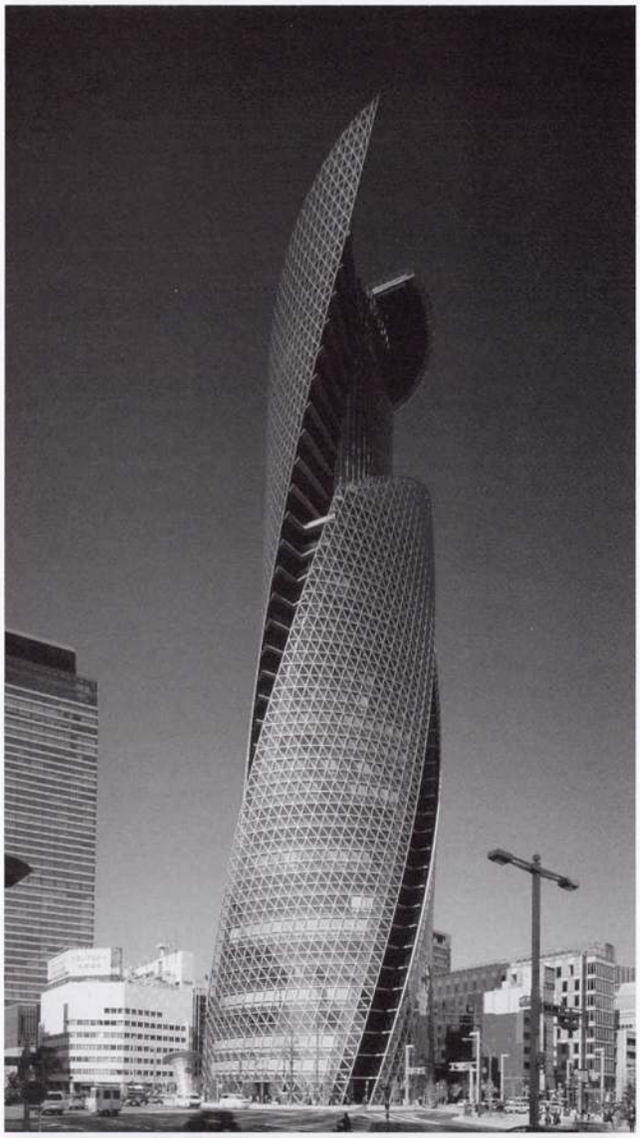
西側鉄骨柱には縦樋も内含

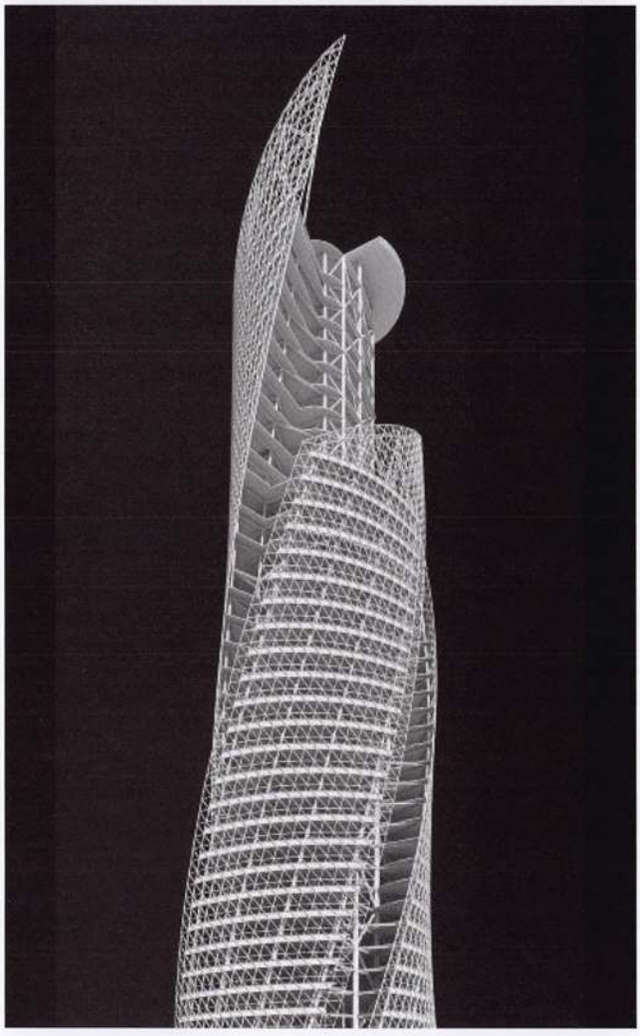


双曲放物面板緑化屋根と軒天井木を同時に見せる構造



断面図





捩じれた超高層建築を精度の高い鉄骨でつくる

モード学園スパイラルタワーズ

愛知県名古屋市

日建設計
構造設計部門主管
山脇克彦

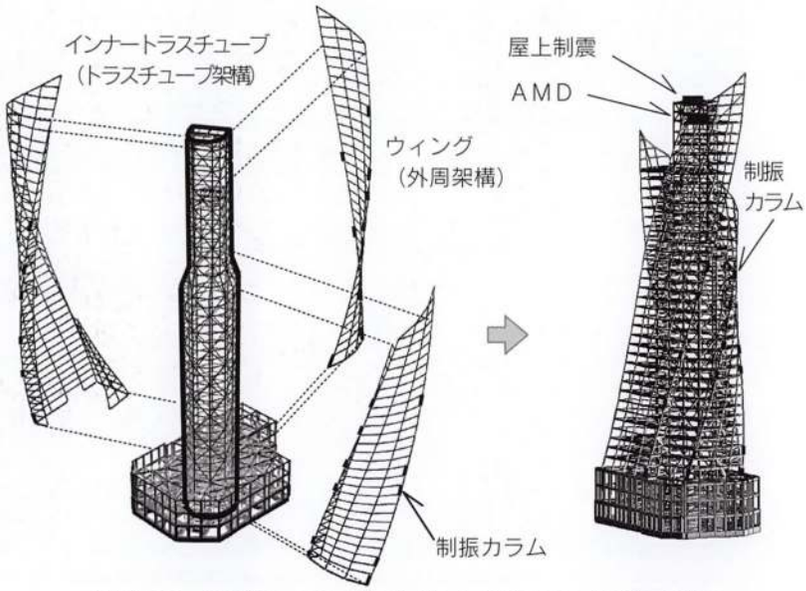
箱型の建物が並ぶ名古屋駅前の街並みにあって、特異なスパイラル状の形態で新たなスカイラインを見せるスパイラルタワーズは、その捩れた形を建物内部に垂直に建ち地震力に耐えるインナートラスチューブを大黒柱として形成して、その外周部に超高層ビルとしての眺望を阻害しないよう細い斜め柱を螺旋状に形成する、合理的な構造計画でつくっている。

大黒柱となるチューブを構成するために、柱とブレースに鋼管を多用しているが、要となる接合部には極めて難易度の高い設計と製作が求められた。

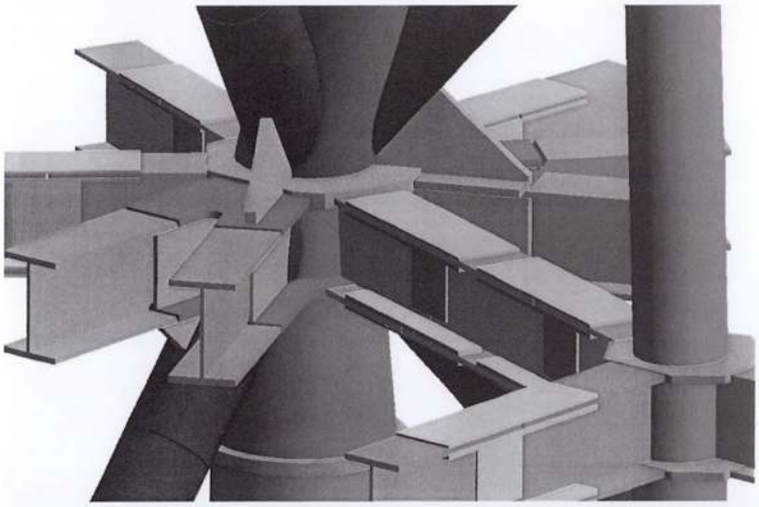
設計は3D－CADを用いて行い、このデータを施工図に、さらには鉄骨やトライアングルサッシュの製作図へと展開した。

鉄骨の製作は日本の７つの工場で行われ、まず部材寸法や接合部形状など、3D－CADによる検討から始まった。３次元加工を可能とする治具、熟練した溶接工の技術、さらには完成した製品が正しい寸法で組み上げられたかを検査する工程など、経験に裏打ちされた職人さん達の技術により実現することができた。

架構を構成している約１万トンの鉄骨には、設計から竣工まで、実に多くの人の技術とものづくりへの思いが込められている。



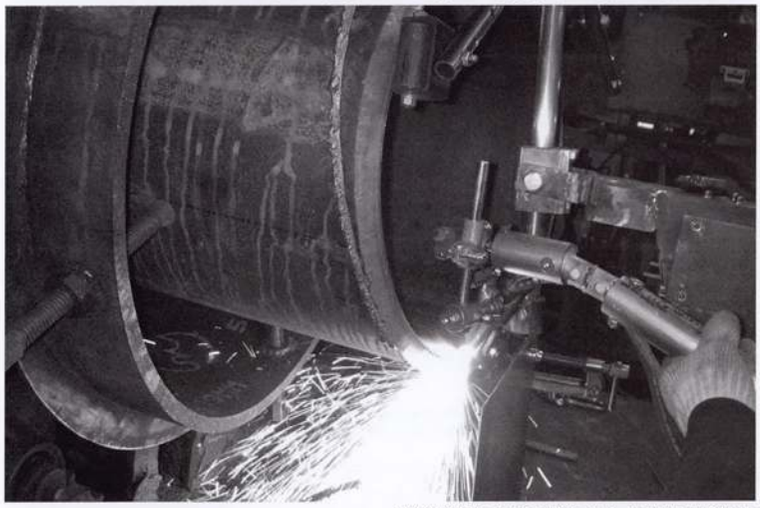
制振カラム、屋上制震、AMD：地震や風による建物の揺れを低減する装置



3D-CADの進歩により立体での部材干渉の確認が可能になった



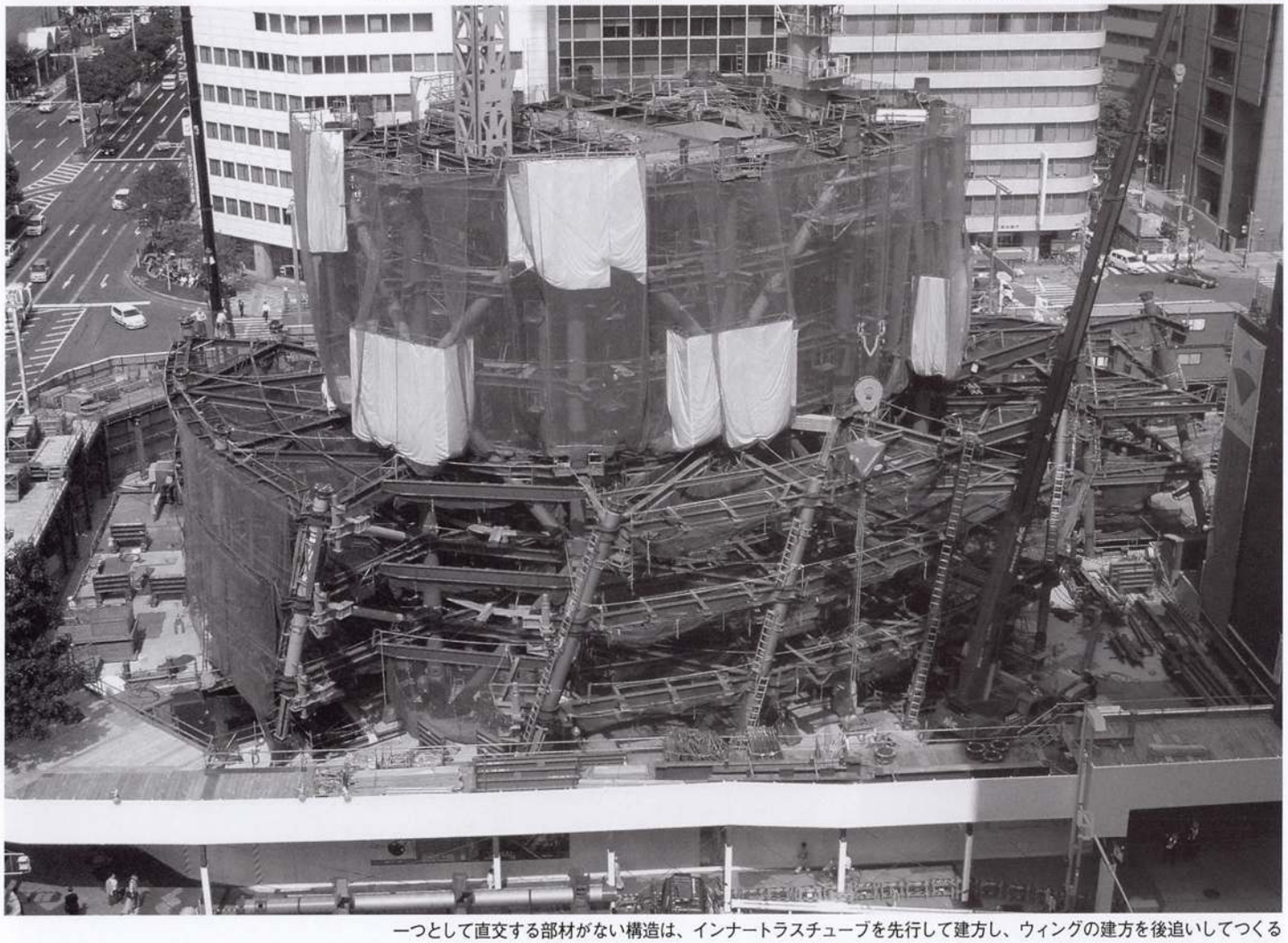
鋼管同士の複雑な溶接は熟練工の経験と技術が必要となる



鋼管端部に溶接角度に合わせた加工を施す



製品の寸法や角度の検査は糸と錘で行い図面と照合する



一つとして直交する部材がない構造は、インナートラスチューブを先行して建方し、ウィングの建方を後追いしてつくる

座談会

35歳はターニングポイント

新旧青年技術者表彰者に聞く

出席者
野村昌宏
寺西敦敏
石原清孝
小柳英治
塩田哲也

若林　亮
（司会）



野村昌宏（竹中工務店 設計部設計課長）
第41回青年技術者
豊橋技術科学大学大学院修了後、1985年入社。設計施工のプロジェクトだけではなく他社設計プロジェクトの施工図のとりまとめ業務も行ってきた。最近では、ミッドランドスクエアの作業所において、プロダクト設計という立場で施工図全般を担当した。

青年技術者への応募はそれまでの仕事を振り返る良い機会に

若林　今日はお忙しい中、お集まりいただきましてありがとうございます。日建設計の若林です。日本建築協会の中で東海支部は、来年、支部復活50周年を迎えることもあり、今までに青年技術者に選ばれた各世代の皆様方に集まっていただいてお話を伺うことになりました。青年技術者は様々な分野で頑張っている35才までの若手を顕彰するものですが、これに選ばれた皆さんの建築や街づくりへの思い、また、日頃持たれている悩みなどをお聞かせいただき、今後の支部活動の参考にさせていただきたいと思っております。

はじめに「青年技術者」に選ばれたときの感想や思い出についてお話をいただきたいと思います。私自身も第42回の青年技術者に選ばれていますが、応募する年齢条件になっている35才の頃は、個人で表彰されることはなくて、当時はすごい励みになった記憶があります。その点皆さんはどうでしたか。

寺西　安井建築設計は、大阪で多くの先輩が表彰されていて、名古屋では少なかったですね。だから名古屋で応募するとき、大阪からプレッシャーがありました。「ちゃんと書類作れよ」と言われた覚えがありますよ。

小柳　私の場合は、入社して9年目でしたが、自分のやってきた仕事を振り返るいい機会になったように思います。文章を書く中で、苦労した事なんかも思い出して次に繋げるためのいい機会にもなりました。それがたまたま受賞させていただいたということですかね。仕事に追われていると自分の実績を振り返るということがあまりないですから。

塩田　私も応募資料を書くときにいろいろなことを改めて思い起こしました。

小柳　私の場合は刈谷の再開発のプロジェクトを長年やっていたので物件数があまりなく、受賞できるのかなという気持ちはありました。その分、刈谷の再開発に対する思い入れは当然あるんですけどね。計画段階から現場の監理まで担当させてもらっているので、非常に恵まれているのかなとも思います

青年技術者の「声」にこれから将来に向かう自分の気持ちを

若林　そんな苦労をして皆さんは表彰されたわけですが（笑）、「青年技術者」の声として「建築と社会」に書かれた思いをどのように実践されてきたかをお聞きしたいと思います。石原さんは、地に足の着いた構造設計者になりたいと書いてありましたが。

石原　受賞が決まってから書く文章ですよね。うれしくて気合を入れて書きました。自分で言うのも何ですが、今読み返してみても良いことを書いているなと思います。現在の心境と大きく変わりません。このような賞をいただくと、自分はどういう構造設計者になりたいのか？ということを真剣に考え始めます。それを文章にするのは難しいのですが、文章にすることで自分の目標がはっきり見えてきた気がします。

若林　応募の資料をまとめるときに今まで自分が何をやってきたかって、一通りまとめながら振り返る事が出来る。そういう意味でいい節目になるんでしょうね。ちなみに私の社内では28歳一人前説って言うのが以前はあったようですが、昨今では自分も含めて28歳ではなかなか難しい状況にありますね。今のようなお話を聞くと35歳の頃にやっと一人前なのかもしれません。

小柳　建築って経験職じゃないですか。必要

な知識が多岐にわたっていますから、広く深く持っていないと、なかなか一人前とは言えませんよね。

若林　自分のことを言うと40歳の頃に、ようやく図面が一通りわかって描けるようになったように思いますね。

野村　入社したときに上司が言っていたんですけど、建築は40代からだと。一通り現場で恥をかかなくなるのは10年目の35歳くらいですかね。相手の見る目も違うし。

寺西　現場に行って自分で指示が出来るようになるのが35歳あたりかな。若い頃は流されているだけで、自分のことをやろうと思ってもなかなか。35歳とか40歳にならないとなかなか思ったこと出来ないですね。

小柳　僕が今35歳ですが、ちょうど今現場に揉まれているときです。経験を積まれたゼネコンの施工者さんからは教わることが多くて、非常にためになります。

野村　いわゆる現場側から見た設計をいろいろ指導してくれますね。

若林　設計者、施工者という立場を超えて、技術や経験を教えて頂ける大切な方ですね。ただ、再開発の場合は、大変期間が長いと思いますが、自分が成長しようとする中で、どういう風にモチベーションを高めていっているんですか。

小柳　外部とのコラボレーションは非常に勉強になります。刈谷の場合、海外の事務所で経験を積まれたデザイナーの方や、劇場がありますので音響設計や舞台などの専門コンサルさんともコラボレーションしています。自分にない知識や考え方を吸収できて、こういう考え方があるんだと気づかされたりもします。それが実際の空間になったときが楽しみでもあり、モチベーションがあがりますね。再開発のプロジェクトの前は、入社して1年目に新ミュージカル名古屋劇場の基本、実施設計をやりました。ボウリング場だったところを劇場にリニューアルしたんですけど、必死になって図面を描いてたという状況でしたね。その後は、1日の間に計画物件の1/25000の図面をやりつつ、ディテールの1/10とかの図面を描いていたということもありました。いろいろやらしていただいているという意味では非常に恵まれていたように思いますね。



寺西敦敏（安井建築設計事務所 設計主幹）
第49回青年技術者
名古屋工業大学大学院卒業後、名古屋で設計活動。「青年技術者」に選ばれるまでは官庁の仕事が多く、春日井や多治見、津島などの多くの図書館を設計。現在は金融機関など、民間の設計も多い。

若林　寺西さんは若いときからしっかりした建物をつくられてますが。

寺西　津島の図書館をメインでやらせてもらって、そこから自分が変わったかなと思いますね。一つの現場を任された、といっても最後は先輩の助けを仰ぐのですが。それが津島で35歳前後でした。

若林　構造設計者である石原さんは始めて仕事を任されたのはいつ頃からですか。

石原　比較的若い時から任されています。1年目はひたすら手書きで構造図を書いて納まりを覚え、2年目は電算プログラムを使用せず、手計算で計算をして、力の流れを理解するよう指導されました。建物規模も最初は小さな建物から始まり、徐々に規模が大きくなりました。プロジェクトを任されたという意味では、小さい建物ですが、2，3年目にはそれなりに任されていました。このようにステップを踏みながら、根気よく育ててもらったなと感謝の気持ちでいっぱいです。

若林　竹中さんでは、そのようにステップを踏んで人を育てられているのですか。

野村　風潮としてどうかは別としていろいろな個性の上司がおりますので、やり方は千差万別で特に決まったことはないと思います。

若林　塩田君の場合は、最近竣工した「いちい信金」が一人前になった仕事のように思いますが。

塩田　そうですね。一人で任されると言うのは大きいですが、そうでなくてもデザインに自分なりの思いをこめていくことでモチベーションが高まります。ラシックとかレクサスではじっくり取り組むことが出来ました。



塩田哲也（日建設計 設計部門主管）
第55回青年技術者
東京藝術大学大学院終了後、97年に入社。名古屋で設計活動を行っている。商業、研究所、金融機関など、分野に捉われず、様々な設計を経験。現在は、博物館の設計を行っている。

育てられる世代から
育てる世代へと
青年技術者はその節目に

若林　青年技術者をとった頃と今の仕事の取り組み方で変わってるところはありますか。

野村　考え方自体は変えているつもりはないんですが、やはり当時と立場が変わったことによる違いがあります。受賞したころは仕事を任されていて、やはりこういうことをやりたいんですよと直接建築主にお願いして説得する、あるいは要望も聞きながらということが直接ストレートに出来ました。今は担当者というひとつ介在している立場になって、担当者に任せています。ただ変なほうに行かないようにだけしています。もちろん完成形としては自分が納得するものでないとあれっていうのはありますから、いかに担当者を導くかというところですね。直接建築主に何か言うことを私は控えるようにしてます。

寺西　野村さんが言ったように上の立場として大きなプロジェクトとしての意見で進めなくてはと思う一方で、自分ならこうする、こうしたいという気持ちがあって、その葛藤がどうしてもありますね。今そのあたりが非常

にプレッシャーと苛立ちとで、厳しいときかなと思います。

若林　これは、僕達の先輩も経験した同じ悩みだと思いますね。小柳さんは再開発などの長期間のプロジェクトを進める上で、上の方とどのように仕事を進められていますか？

小柳　現場には上司もいて一緒に現場監理をしています。私が主に設計監理を担当しているのですが、デザイン的な側面と品質的な側面での葛藤はあります。仕様書などをベースに技術的な側面との兼ね合いを見ながらやっています。

若林　上の人と考えやデザインでぶつかったりしませんか。

小柳　極力ぶつからないようにやっているつもりですけど。(笑)

塩田　上とぶつかるのは少ないですが、最近は入社間もない若手に対して、守りの発言をするようになっている自分に気付きました。そこまでやる必要があるかとこちらが言わなければいけない。

若林　僕が塩田君に言おうと思ったことを先に言われました。(笑)

塩田　若い頃に若林さんに言われたことと同じことを自分で言っています。当時はつまらないこと言われてるなと思って聞いていましたが。

若林　そのときは、まずは「気持ちは分かるけど、」から入るんですよ。

塩田　確かに言っちゃいますね。(笑)

若林　石原さんは若いうちはステップを踏んで教えてもらったとお話されましたが、今は下の子にも同じように指導をされているんですか。

石原　それがなかなか難しくてね。昔の人は偉いなと思うのですが、答えを直ぐには教えてくれない。苦労して自分で答えを導き出し、自分なりの考えを示しなさいと言われました。思い返すと苦労した分、自分は成長できたなと実感できる。これに対し僕は若い人から聞かれると答えをパッと教えてしまう。長い目で見て、考えるヒントを言ってあげた方が、本人のためには良いと思いますが、なかなか言えないのが現実です。



石原清孝(竹中工務店 設計部課長代理 構造担当)
第51回青年技術者
名古屋工業大学卒業後、1992年入社。トヨタ自動車に1年間出向していた時期があり、有意義で貴重な経験を積む。仕事は工場などが多いのでS造が多いが、RC造やSRC造の仕事もあり、幅広い構造種別を経験させてもらっており、この名古屋地区は気に入っている。

野村　それどころじゃないんだよね。すぐ言ってもらわないと困るみたいなね。時間的なものがありますから、すぐにやってもらわないと困りますよね。

若林　新人の頃はトイレのスケッチ一つに、長い時間をかけて、いろんなことを考えて覚えることができましたが、今は設計期間も短くて、なかなかそうさせてあげられない。僕の新人の頃の上司は、基本的に何も言わない、案が良くなくても、まず応援してくれる。失敗しても面倒はきちんと最後まで見るって人で、その人に任されているって意識がすごくあったからモチベーションも上がったし、頑張れたと思うけど、なかなか若手にそうはしてあげられない自分が悩ましいところです。

塩田　妻が個人で仕事をしていまして小さな規模の住宅を、コストも非常に限られた中でやっているんですけど、それと自分がやっている仕事とのコントラストがすごくあって、良い仕事に恵まれているなと思います。だからしっかり納得いくものを技術的にも意匠的にもチャレンジしなければ、と責任のようなものを感じます。

若林　奥さんが自分を映し出す鏡のような存在ですね。小柳さんの悩みはどうですか。

小柳　今現場に行っていますので、コストコントロールに気を使いますね。メーカーさんのことを鵜呑みにしてしまわないよう、技術的な裏づけとか自分なりに解釈してやっています。

若林　以前よりも原価やコストコントロール、品質、事故防止という観点が非常に厳しくなりましたね。

小柳　特に最近は品質面の監理には非常に気を使います。それと現場の場合、プレッシャーがあるじゃないですか。時間に追われるなかで、決断を迫られる。こういうディテールにしたいけど、品質的、技術的に問題ないか。そのあたりのせめぎ合いがありますよね。施工図でも力不足でなかなか全て見切れないところはあります。実際出来てみて「あっ」ていうことあるじゃないですか。「えっ、こんなふうになってたの」ってね。(笑)

若林　寺西さんも同じような悩みはありますか。

寺西　名古屋事務所は同じ世代が非常に多く、この年になって今主幹という立場でやるにおいて、もう一回勉強しないといけないと非常に思っています。現場に出て自分はどこまで本筋のことを知っているのかなとふっと疑問に感じるときが多くなってきたなと思ってます。自分の知識や技術力とかデザイン面も含めてもう一度勉強しないといけない時期かなと思います。自分がステップアップするのになにか持っていなければいけないなと。しかし、なかなか行動に移せないというのが現状ですがね。一番忙しかったときに比べて時間はつくろうと思えばつくれるんですよね。それが今の時代かなと。ただそれがうまく使いこなせてないな。

石原　僕もそう思います。時間をかけて、じっくり設計ができたら良いのですが、なかなか目が行き届かない。本当は隅々まで目の行き届いた設計をやりたいけど、次から次に仕事をこなしていかなければならないので、時間が取れない。時間に流されてしまい、立ち止まってゆっくり考えることを止めてしまっていた。でも今は、幸か不幸か不景気で仕事量は減少してきました。今こそがじっくり考えるチャンスだと思い、しっかり足元を固めたいと思います。

野村　去年の後半から急激に情勢が変わって、設計の立場から言って設計の進め方が今のままでいいのかなということをね、会社の内部だけでなくてね、全体的に考える必要があるのかなと思いますね。設計する物件もなくなっちゃうかもしれないという危機感があると思うんですよ。設計の本質みたいなもの

をもう一度考え直していかないといけないのかなと思いますね。当時のスクラップアンドビルドの時代はすでに消滅していて結構リニューアルやったり改修やったりというプロジェクトが今増えてきているんだけど、ヨーロッパでは何千年も前からやっていたことを日本はまだシフトしきれてない。われわれは新たな仕事を見つけていかないと飯を食っていけないと思うんですね。新規はなくなるんじゃないかなと。

若林　そう言う意味では、ちゃんとした力をつける時代と捉えることが大切ですね。

名古屋の街に思うこと

若林　名古屋の駅前では大きなプロジェクトが進み、一方では名駅と栄地区の二極化と言われています。また、地下街が発展していて地上に賑わいが少ないとも言われています。そういう名古屋の街だから出来ることとかこういうことを大切にしていきたいなど、思うところはありますか。

小柳　名古屋の東部には丘陵地帯がありますからそういったところにもう少し仕掛けがあると、もっと面白くなるのかなと思いますね。外部から見た名古屋というのは道が広いなというような印象が結構あるじゃないですか、それ以外の「もっとこうなんだよ」というところが発信できたらいいなと思います。

若林　道が広いことで言えば、広い歩道に面する建物の1階2階には賑わいの仕掛けをつくって、それを街につなげていくことをいつも大切に思っています。

野村　以前に比べて歩くようになりましたよね。

若林　通りに面して小さくても元気な店舗がわりと増えてきた効果かもしれません。名古屋駅前と栄だけでなくて、他にも賑わいの拠点があれば、もっと面的な広がりが期待できると思っています。東京で言うと渋谷の次は恵比寿、その次は六本木、赤坂といった具合に。

野村　恵比寿の再開発は当時すごく注目されましたけど、いまどっかいっちゃいましたね。名古屋の街って戦後の都市計画が進んでいてかなり整然とした雰囲気があるんだけど名古屋の駅前だけ軸がずれている。駅前の通りと広小路と。あの辺り若林さんの作品を初め、いろんな高層ビルが出来てきてあの並びが非常に面白い。今後どう進むかって非常に楽しみですね。



小柳英治（東畑建築事務所 設計部主任技師）
第54回青年技術者
名古屋工業大学大学院修了後、1998年入社。名古屋で設計活動。以前にプロジェクト限定で半年ほど東京事務所に勤務した経験がある。基本計画段階から刈谷駅南地区の再開発を担当し、現在はほぼ常駐という形で監理を行っており、長いプロジェクトが「かたち」になりつつある。

小柳　整然としすぎても面白くない。カオス的な要素が面白い空間を作り出して、それが広がっていくと街の賑わいも広がっていくんじゃないでしょうか。

若林　刈谷駅の再開発は、そういう取り組みはありますか。

小柳　ちょっと違うかもしれませんが、角度を少し振ってやることで空間に広がりができるじゃないですか。刈谷でも軸線を裏道の方に持っていって、メインとなる道沿いに空間を取り広場的に使えるスペースを出してあげる、そういうことは考えていますね。

若林　ディズニーランドは動線がしっかりしていてすごく分かりやすいですよね。だけど商業施設はもっと迷路のような動線の方が賑わいがでるんじゃないかと。

小柳　大須なんかいま人が戻ってきているのは、そういうカオス的な要素があるんだなと思いますね。

野村　むやみにデザインコードとかつくらないほうがいいなと思うんですけど。ただ設計者ってある程度ここにこんなんつくっていいのってあるじゃないですか、その辺はわきまえつつやっていけば自ずと良くなっていくんじゃないかな。モードスパイラルタワーっていうのは個性がすごいですけど街全体で見てもありと思います。

若林　モード学園では道路境界からセットバックして、そこに樹木を植えました。名古屋の駅前は地下街があって土かぶりが少なくて、高木の根が張らないから緑がすごく少ないんですね。

寺西　そういった意味では今後の緑はテーマになっていくんですよね。建築と相反するもので、名古屋市の緑化制度も変わったばかりですよね、緑をひとつのテーマにすると大きな武器になるけど、逆にあだになる可能性もある非常に怖いものだなとは思いますね。

環境を考える

若林　環境という点では、ゼネコンの設計としての取り組みはどうですか。

野村　環境の切り口は多いです。環境ありきでやっていかないと。「サスティナブルワークス」というテーマを標榜して建物を建てています。

寺西　竹中さんは設計から施工まで含めてそういうかたちですよね。

塩田　今の建物は付加していくものが多くて、いまいち違うんじゃないかと思うんですけども、設備や構造、意匠の人が勉強してまとめて形にしたいですね。環境にやさしい建物というのは。

野村　たとえばソーラー付ける。今のところは企業姿勢のアピールでしかないもんね。それが実際どれだけの効果があるかって、ないものね。昔の名護市庁舎でしたっけ、あーいう考え方でないと。あそこまでいけるかどうか分からないですけど。

若林　視点は違いますが、以前に設計した小学校はのこぎり屋根の教室で、全面に自然光が入ってきて照度は700ルク以上あるにもかかわらず、先生は照明をつけます。建物のエンドユーザーの方とどれだけ環境技術やその効果を理解していただけるかが大切になっていきますね。

寺西　どう説明して納得していただくかという点においてまだまだ設計者としても弱いんでしょうね。それが設計者だけの責任かといわれればそうでもなく、社会全体で変えてい

かないとどうもむずかしいですよね。設計者のエゴだと言われたらそれまでになりますからね。

石原　のこぎり屋根は昔の工場の象徴だったのですが、のこぎり屋根の建物に入ると本当に内部が明るいですよね。構造面から見ても、とても合理的な架構形式になっており、もっと普及しても良いと思うのですが、最近はあまり見かけなくなりました。

野村　あれは先人の知恵の塊みたいな、北側採光は省エネからも環境からも室内環境からも優れたものですよ。

日本建築協会の活動が見えない

若林　僕自身は日本建築協会の活動に入ったのは、協会の組織事務所の若手が集まって福祉の勉強会を始めた「21世紀委員会」がきっかけでした。寺西さんもそのメンバーの一人でしたが、当時、「人にやさしいまちづくり条例」をつくった愛知県の星野さんが、手弁当で来てくださってレクチャーをしてくださったり、そのうち、メーカーさんも参加していただいて、中身のあるいい勉強会ができたと思っていますし、そこで教えていただいたことが大切な財産になっていると思っています。大学の先生や設計者や施工者、メーカーさんといった広い範囲の会員で構成されている日本建築協会だからこそできた勉強会だと思います。しかし、なかなかその活動の輪が広がっていかない。そのあたりのことで忌憚の意見を頂ければと思います。

野村　誠に申し訳ないんですけども、日本建築協会の設立主旨から知らなくて、どういう主旨でどういう目的の社団法人なのか正直分からない。イメージの中で先ほど若林さんがおっしゃった、へんに建築士でもなく建設でもないという意味では非常に建築の本質ではないかなと、雑多ではあるけど本来の建築の集まりであるんじゃないかな。ただここで何をされていてというイメージが湧かないので何をして欲しいも湧いてこないです。

寺西　建築協会、建築士会、家協会の役割が分からないんです。たまたま今建築協会で若林さんとやらせていただいているのでなんとなくは分かるんですけど。実際若い者に聞くと「えっ自分は入っているの？」というくらいで。いい見学会やシンポジウムをおこなっているので、もっと大々的に宣伝されてもいいのかなと思いますね。特に名古屋は東京や大阪に比べて講演会とかもすごく少ない地域なんです。そういうのもサポートしてくれるような立場の協会であるとものすごく私たちにとっては助かるんですがね。



若林　亮（日建設計 設計部門副代表兼設計室長）
第42回青年技術者
豊橋技術科学大学大学院修了。入社後1年間の東京研修の後は、名古屋で設計活動。日本建築協会の21世紀委員会に所属して、福祉の勉強会を行った経験を持つ。モード学園スパイラルタワーズやラシックの設計を担当。

若林　役割が分からないというのもあるし、他の団体と何が違うのかということが分からない。「建築と社会」の記事なんてどう思います。

野村　読んでますよ。毎号じゃないけど。3月の東海支部特集で東海地区の建築が載るじゃないですか。あれがわりと偏っていなくて結構面白い。

若林　読むと面白い記事がありますが、なかなか目が留まらない。文章が多い。構造の記事もありますが、読みませんか。

石原　なかなか目に留まらない。写真だけをぱらぱら見ています。構造では構造技術者協会（JSCA）という団体があり、僕はそちらの方で主に活動をやっています。

若林　メールで広告することも足りないかもしれませんね。

野村　隔月発行にしてカラーの頁を増やすとか。

小柳　建築協会はメーカーさんも入っているんですよね、勉強会みたいなものがあったらいいなと思いますね。

若林　月一回の役員会の前に30分くらい、メーカーさんの商品説明会をやっていますが、オープンなものにしても良いかもしれませんね。

小柳　うちの事務所でもメーカーさんに来ていただいて説明会をやることがあるのですが、1社だけでなく、建築協会で複数のメーカーさん、例えばある建材についてA社、B社、C社とかを呼んで勉強会をすると、各メーカーの製品の違いなんかも分っていいですよね。

若林　商品そのものの説明会ではなくて製品の説明会のような感じの勉強会がいいですね。

野村　うちも先日防水メーカーに来ていただいたんですが、非常に面白いですね、知っているようで知らないことが多い。

寺西　タイル職人の話って面白かったですね。INAXさんでやっていただいたんですけど、INAXの製品ではなくて貼り方など工事の話で、別に商品の話もあったんですが、この貼り方はこうなんだと。意外と盲点で面白かったですね。

若林　メーカー、施工者、設計者、大学の先生方などがフラットに話しができる利点やネットワークをもっと生かすことが大切ですね。

石原　先述のJSCAは構造設計者の集まりなのですが、こちらにも若い人があまり入らない。もっと若い構造設計者に入ってもらい、協会を活性化するためにはどういう活動をすればよいかについて真剣に考えています。建築協会と同じ悩みを抱えてるなと感じました。

小柳　実は私は青年技術者に応募するために協会に入ったんですけど。

他　　僕も同じです。みんなそうです。

若林　青年技術者をきっかけに、日本建築協会に目を向けていただくようになればと思っています。また、これからも皆さんの力をかりながら、様々な活動が見えるような展開をしていきたいと思います。その際にはお声を掛けさせて頂きますので、よろしくお願いします。今日はどうもありがとうございました。

■日　　時：2009年1月26日（月）
■対談場所：日本建築協会東海支部

459
法令コーナー

全国建築審査会協議会

宮川和久
全国建築審査会事務局
（京都市都市計画局建築指導部建築指導課）

全国建築審査会協議会の概要

「全国建築審査会協議会」とは、建築基準法の規定に基づき、全国の特定行政庁（都道府県、政令指定都市、特別区、その他一部の市町）に設置されている建築審査会から構成される全国組織である。

建築審査会は、建築物の許可に対する同意のほか、特定行政庁や建築主事等の処分またはこれに係る不作為に不服がある場合に提起する審査請求に対する裁決、関係行政機関への建議などを行う第三者機関である。

本協議会は、毎年１回開催される全国建築審査会長会議の開催を中心に、全国特定行政庁の建築審査会相互の課題共有や情報交換などを行い、建築行政の適正な運営を目的として設立されている。

本協議会は、昭和29年の第１回全国建築審査会長会議の開催以降、毎年、全国会議を開催し、平成20年度の北海道会議で55回を数える、歴史ある協議会である。

また、協議会の事務局は協議会会長の所属する建築審査会の特定行政庁に置くこととなっており、平成15年度から京都市建築審査会会長が協議会会長を務めているため、現在、京都市が事務局を担当している。

協議会の主な事業は、次のとおりである。

- 全国建築審査会長会議の開催（年１回）
- 世話人会の開催（年２回の定期開催及び必要に応じての随時開催）
- 全国審査請求事例集の発行（毎年作成）
- 全国建築審査会委員名簿の発行（３年ごと）
- ホームページでの情報発信
- ブロック別会議の開催
- シンポジウムの開催
- アンケート調査の実施
- その他、建築審査会のあり方に関する研究会等、協議会の目的達成のために必要な事業

近年の活動状況

近年、建築行政への社会的な関心が高まる中で、建築物の安全・安心を適正に確保するための建築行政の仕組みづくりが求められており、建築審査会も、建築行政の一翼を担う主体として、積極的に問題解決に関与することが求められている。

また、近年のわが国の社会経済システムは大きな変革期にあり、国民生活が「量から質へ」と転換する中で、建築審査会が対象とする領域も広がりを見せており、単なる建築基準法の運用から、より広い「良好なまちづくり」という視点で考えることが不可欠になっている。

さらに地方分権の進展により建築行政は自治事務とされ、各自治体の意欲と工夫次第で「良好なまちづくり」を実現できる環境も整いつつあることから、各自治体においては、その地方の実情や課題に対応する独自の条例を制定するなどの取り組みが活発化している。

同時に、住民が建築審査会に対して解決を求めるような建築紛争（審査請求）も増加しており、建築審査会としても、単に裁決や同意を行うだけではなく、関係行政機関において何らかの対策が取られるための意見等を発信していく必要性が高まっている。

建築審査会は、まさに地域の現場で発生している建築・まちづくり分野での課題等に直接的に対処することを求められている機関であり、その活動をより効果的かつ実効性のあるものにしていくことが極めて重要であり、協議会での連携を強め、その活動内容を充実させていく必要がある。そのために、平成18年度の第53回会長会議において、目指すべき方向性と協議会活動の充実・強化に向けた具体的な行動方針を、次の５つにまとめた。

①全国建築審査会長会議プログラムの一層の改善・強化
②関連機関との連携
③協議会としての調査・研究活動の推進
④協議会としての「建議」等の活用
⑤効果的な情報提供と情報交流の推進

現在、この５つの行動方針に基づき、建築審査会制度の改革に向けての取り組みを進めているところである。

たとえば、会長会議プログラムの一層の改善・強化については、会長会議における意見発表の改善、審査請求事例報告の導入、議論を活性化する仕組みづくりや、表彰式の簡素化、現地研修の充実など、様々な改善を積み重ねてきた。その結果、全国各地の協議会の会員がそれぞれの地域独自の問題を抱えながら集まり、議論を行うための貴重な機会となっている。

また、日本建築学会と連携した研究活動の推進等、様々な協議会活動に取り組み、さらに、これまでの会長会議での議論や、19年度に実施した「建築審査会のあり方に関するアンケート」等から、「建築審査会制度の課題と改革の方向性」について検討し、20年２月の「建築審査会制度運用に関する研究会」において建議等の政策課題につなげるべく意見をとりまとめた。

平成20年10月27日に北海道で開催した第55回全国建築審査会長会議記念シンポジウムで議論を深め、翌28日の会長会議において、建築審査会制度の改革に向けての建議・提言の策定方針及びそのスケジュールが承認されたところである。



建議・提言の策定に向けて

第55回会長会議で承認された「建議・提言の策定に向けた重点テーマ」は、次のとおりである。

①地方分権に即した建築審査会へ
②建築審査会の審査機能・審査能力の強化
③中立公平な建築審査会への基盤強化と財政的充実
④建築審査会の社会的・行政的役割の向上

具体的には、再審査請求制度の見直しや、建築審査会の調査・調整権限の拡充、社会への情報発信能力の強化などが挙げられる。

このテーマに基づき、国等に対する建議、各建築審査会や協議会自身が改善に取り組むべき提言として、とりまとめを行う。現在、協議会会員からの公募により委員会を設け、具体的な建議・提言の内容について議論を行っており、今年10月に開催される第56回会長会議で、建議・提言の承認を受けて、実行に移す予定である。協議会としては、これまでの長年の取り組みの大きな節目を迎えることになる。（みやがわ　かずひさ）

367
構造の頁

E-ディフェンスにおける既存木造住宅の耐震性能検証実験

三宅辰哉
㈱日本システム設計代表取締役　博士（工学）

現在、既存不適格の住宅は1,000万戸を超えると言われ、その大部分を木造住宅が占める。このような既存木造住宅の地震被害を防ぐためには、それらの耐震改修は依然重要な課題である。平成14年度から５ヵ年にわたって実施された「文部科学省大都市大震災軽減化特別プロジェクト・木造建物実験」では、既存木造住宅に対する耐震改修の有効性の実証を目的として、大型破壊実験施設E-ディフェンス（防災科学技術研究所、兵庫県三木市）における既存木造住宅の震動台実験が行われるとともに、並行して、地震動による木造住宅の倒壊応答解析手法開発に関する研究が行われた。

E-ディフェンス震動台

E-ディフェンス震動台は、現存するその他の加振施設と比較して、面積（300㎡）、搭載可能重量（1200ton）は最大であり、限界加振性能も大きい。特に、最大変位振幅は水平方向±100cm、鉛直方向±50cmであり、他施設に比べ群を抜いている。

既存木造住宅試験体

震動台実験に用いた試験体は、兵庫県明石市に現存した築30年の木造軸組構法２階建住宅２棟であり（**写真１**）、両者の間取り、仕様はほぼ同一である。これらの精密耐震診断による評点は0.3～0.4であり、「倒壊する可能性が高い」という診断結果となった。このうち一方の住宅について「倒壊しない」という診断結果とするために、筋かい・合板による耐力壁の補強、および金物による柱端接合部の補強を行い、評点を1.5以上とした。

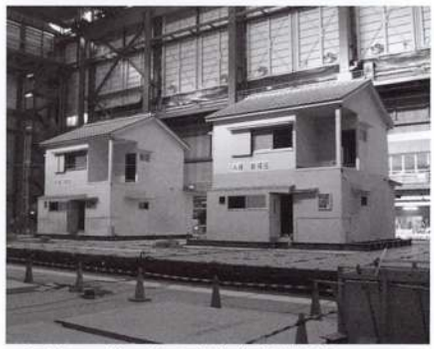


写真１　築30年の木造住宅試験体
―左棟・補強、右棟・無補強―

入力地震動・実験結果

入力地震動として、震度７に相当する強さを有するJR鷹取（兵庫県南部地震，1995）を用いた。震動台に対する直接の制御命令は変位であり、一般的に震動台実験では再現される加速度波形を目標波形に一致させることを条件として、震動台を制御するための命令変位を決定する。この際、変位振幅を震動台の限界性能以下とするためにハイパスフィルタが施され、地震動の長周期成分が除去される。

これに対して、本実験では無補強住宅の倒壊が予想され、倒壊という長周期応答に対する地震動の実強度再現のためには長周期成分の保持が重要であること、および震動台の変位性能を有効に活用することに留意して、加速度データの数値積分により速度データを求め、それに中立軸補正を施した上で再度数値積分を行って命令変位データを作成した。ハイパスフィルタを施した変位波形と本実験に用いた命令変位波形、および対応する加速度波形を**図１**に示す。加速度波形は両者でほぼ同一であるが、変位波形は大きく異なる。

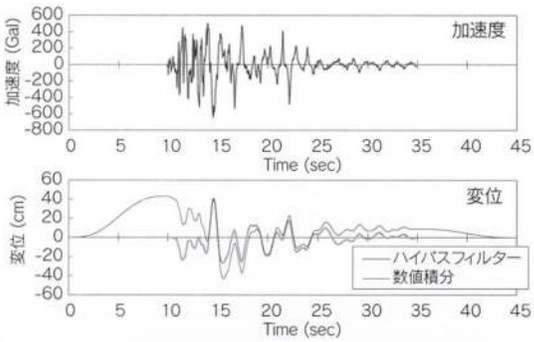


図１　目標加速度と命令変位

加振の結果、無補強住宅は予想通り倒壊に至った。補強を施した住宅は１階の層間変位が18cm程度に達したものの、倒壊を免れ、耐震改修の有効性が実証された。

倒壊応答解析手法

倒壊応答解析手法開発の主要な目的は、多数現存する既存不適格木造住宅について、解析による倒壊挙動を写実的な三次元アニメーションとして示すことで、住宅所有者らに適切な耐震設計・仕様の重要性の理解を促し、耐震改修促進を図ることである。



図２
試験体に対応する
解析モデル

本解析手法では、対象建物を**図２**に示すような立体フレームモデルに置換する。本モデルはトラス要素、接合部の変形・破断を表現するバネ要素、および柱・梁の曲げ耐力・剛性を表現する曲げ要素群により構成される。各要素の応力変形特性を表す復元力モデルについては、前述の既存木造住宅の震動台実験を含めた各種動的・静的実験および調査等によって得られた知見を反映することにより、精度の向上を図った。

前述の既存木造住宅の震動台実験に対応する解析結果アニメーションを実写画像と比較して**写真２**に示す。無補強住宅、補強住宅とも解析結果アニメーションは実写画像によく一致しているとともに、十分な写実性を有している。今後、本解析手法を活用した耐震改修促進並びに耐震設計法の高度化が期待される。

（みやけ　たつや）

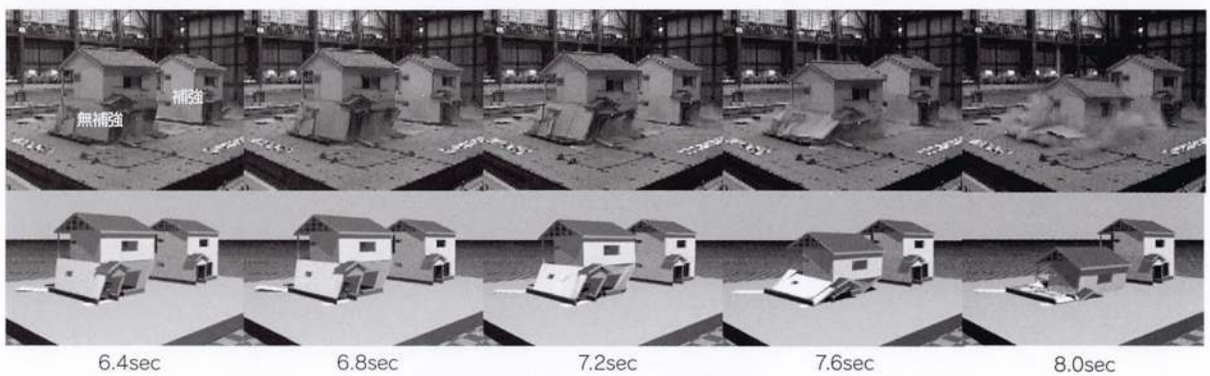


写真２　実験結果および解析結果―左棟・無補強、右棟・補強―

お知らせ Information

▶「平成21年経済センサス・基礎調査」の実施

総務省統計局は、７月１日（水）に「平成21年経済センサス・基礎調査」を実施する。
この調査は統計法（平成19年法律第53号）に基づく基幹統計調査として、全国のすべての事業所及び企業を対象に行われ、統計結果は国や地方公共団体の経済政策・雇用政策などの基礎資料として利用される。
調査方法①一定規模以下の事業所・企業
—調査員による調査
②一定規模以上
—国、都道府県や市区町村による調査

▶平成21年３月１日～３月７日は建築物防災週間

国土交通省は毎年２回建築物防災週間を実施。平成20年度下期３月１日～３月７日は、①住宅・建築物の耐震診断・耐震改修の促進②既存建築物に対する定期報告の徹底③既存建築物の窓ガラスの地震対策等の調査及び是正指導の徹底—を重点に取り組む。

▶「国土技術開発賞」の募集

（財）国土技術研究センターと（財）沿岸技術研究センターでは、住宅・社会資本整備にかかわる研究開発意欲の啓発と建設技術水準の向上を目的として「国土技術開発賞」を設けており、第11回では、ソフトを含めたより広範な新技術の募集を期待している。
なおこの賞の最優秀賞・優秀賞は、２年に１回開催される「第３回ものづくり日本大賞」の内閣総理大臣賞候補として、国土交通省の選考有識者会議へ推薦される。

応募技術　計画・設計手法、施工方法、維持管理手法、材料・製品、機械など、近年開発し、かつ実用に供された新技術
応募資格　応募技術開発の中心となった個人または法人、共同開発者ら
応募期間　2009年２月４日～４月６日（月）
応募資料　所定の応募書等、技術の内容等、地域への貢献等々

応募及び問い合わせは、（財）国土技術研究センター研究第二部「第11回国土技術開発賞」事務局（東京都港区虎ノ門3-12-1ニッセイ虎ノ門ビル、TEL03-4519-5005）へ。

▶大阪市ハウジングデザイン賞受賞作決まる

大阪市内に建設された良質な都市型集合住宅を表彰する「大阪市ハウジングデザイン賞」。過去５年以内に大阪市内に完成した民間マンションを対象とし、22回目は、昨年６月に推薦を募った。21回同様に、都心部に立地するタワー状の集合住宅の推薦が多く、全体的に画期的なデザインや新しい技術の提案は乏しかったが、与えられた条件の中で工夫を凝らした良質なものが多かった。
審査委員会（委員長：髙田光雄、委員：狩野忠正／大森敏江／中嶋節子／八野行正／藤井俊樹）で審査対象の98件を書類審査、現地審査し、都心立地の集合住宅２点を受賞作とした。



●シティタワー西梅田
（分譲）
・所在地
福島区福島７丁目
・設計者
竹中工務店大阪一級建築士事務所
・施工者
竹中工務店大阪本店
・構造規模
RC造一部SRC造
50F、B1、347戸

…ガラスのカーテンウォールで包み込んだ外装は都心のオフィスビルに融合したモダンなデザインになっている。建物中央部にロの字型断面の耐震壁（バックボーンチューブ構造）を配置することで、柱や梁を小さくした住戸内は、床から天井までの大きな開口部をもった眺望に優れた開放的な住戸を実現し、…既存基礎の再利用、将来のプラン変更にも容易に対応できるSIの採用、さらには上記の構造の開発など、その開発姿勢や技術的努力を評価した。



●GLASHAUS
（賃貸）
・所在地
西区靭本町２丁目
・設計者
ケイ・アソシエイツ一級建築士事務所
ケイ・アソシエイツ・EX一級建築士事務所
・施工者
鴻池組大阪本店
・構造規模
RC造、14F、28戸

…ガラス面で覆われたダブルスキンの外壁の採用により、従来の集合住宅のイメージを払拭している。ガラス外壁の内側にさらにガラスサッシが入れられ二重のガラス面に囲まれた空間がバルコニーに代わるサンルームとして機能し、ガラス外壁に設置された可動ルーバーにより光や風の制御が可能であり、…断面設計の工夫により、スキップフロア、高天井、メゾネットなど多様な変化に富んだ住空間を実現している。

▶松柏美術館花鳥画公募展開催

「第15回松柏美術館花鳥画展」開催に当たり、50歳以下の作家を対象に㈱松柏美術館は花鳥画作品を一般公募していたが、全国から99名・106点の応募があった。1月18日には審査員（岩倉寿／上村淳之／小西通博／竹内浩一／福井爽人）が35点の入選作品を決定し、松柏美術館花鳥画展に展観している。



大賞「闇舞」柳澤優子（愛知県愛知郡長久手町）

大　賞　「闇舞」柳澤優子
優秀賞　「想いのふち」池田真理子／「地湧金蓮」城野奈英子／「額紫陽花」立木美江／「あき」田端照美
会　期　2009年2月11日～3月29日（日）
10：00～17：00　月曜日休館
会　場　①松柏美術館　TEL0742-41-6666
奈良市登美ケ丘2-1-4
入選作と上村松園・松篁・淳之の5作品を展示
②文華ホール　TEL0742-45-0544
奈良市学園南1-11-6
入選作を展示
入館料　大人800円、小中生400円（①②含む）
ただし大和文華館本館は別料金
招待券は日本建築協会（TEL06-6946-6981）へ。

▶特集展示「唐絵師・福原五岳」

江戸時代に活躍した絵師・福原五岳（ふくはら・ごがく　1730～1799）は、京都で文人画家・池大雅に師事し、のちに住まいを大坂に定めて、山水と人物画では右に出るものがないといわれるまでになった。
大阪歴史博物館はこのたび、池田市在住の福原操氏より五岳の代表作「洞庭湖図屏風」の寄贈を受けた。その作品は中国の名勝・洞庭湖を雄大に描いた屏風で、大坂の知識人漢詩サークル・混沌社や漢学塾・懐徳堂のメンバーによる賛文が書きつけられている。
屏風の受贈を記念して、福原五岳を通じて、大坂の町人の文化への取り組みを紹介する。
会　期　2009年2月25日～4月6日（月）
9：30～17：00（金曜日は20：00まで）
火曜日休館
会　場　大阪歴史博物館　8階・特集展示室
大阪市中央区大手前4-1-32
観覧料　常設展示料金の600円、高大生400円
中学生以下・市内在住65歳以上は無料
出　品　「洞庭湖図屏風」「陶淵明図」「秋海棠図」など約30点
上記の常設展示招待券は日本建築協会（TEL06-6946-6981）へ。



洞庭湖図屏風（左）



洞庭湖図屏風（右）

▶伊達伸明「建築物ウクレレ化保存計画」作品展

取り壊される建物からウクレレを作る「建築物ウクレレ化保存計画」がアートスペース虹で公開展示される。近作ウクレレ7本に加え、通算50本を記念して開始した新シリーズ「ダテ版古」も初公開される。
会　期　2009年3月31日（火）～4月12日（日）
11：00～19：00　月曜日休館
会　場　アートスペース虹
京都市東山区三条通り神宮道東入る3丁目東町247
T/F：075-761-9238
展　示　奈良邸ウクレレ、矩邸ウクレレ、小宮山邸ウクレレまたは寺長本店ウクレレ、天ぷららっきーウクレレ、下山手教会ウクレレ、美章園温泉ウクレレ、村田邸ウクレレ、しん版平成ダテ版古

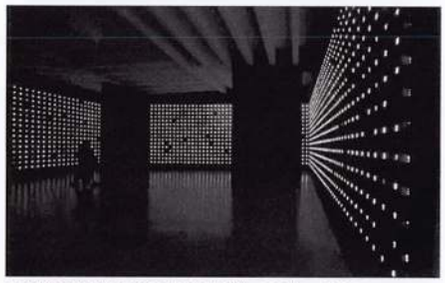
●チチ松村×伊達伸明　トークショー
日　時　4月10日（金）　19時より
場　所　法然院（京都市左京区鹿ヶ谷）
参加費　1000円
問い合わせはアートスペース虹へ。

〈伊達伸明プロフィール〉
2004　連続トークライブ「ウクレレと歌留多で語る新世界」（新世界各地）
2004　作品集「建築物ウクレレ化保存計画 2000.4-2004.3」出版（青幻舎）
2005　「新世界ウクレレ遊覧」（新世界各地）
2006　「ニッポンVS美術」（大阪市立近代美術館心斎橋展示室）
2007　アナザームーブメント2007（金沢市内）



美章園温泉ウクレレ

▶インシデンタル・アフェアーズ うつろいゆく日常性の美学



宮島達男《MEGA DEATH》1999年　©Shigeo Anzai, Courtesy of the Japan Foundation, SCAI THE BATHHOUSE

インシデンタル（incidental）とは「偶発的な」「とるに足らない」などの意味を持つ。刻一刻変化していく、その変化や偶発性をうつろいゆく美として捉えることで、普段の何気ない事柄が新たな美意識として甦る。
サントリーミュージアム［天保山］は国内外で活躍する現代アーティスト17人の作品を通して、人々の日常的な感覚の中に潜む価値観や感覚を呼び起こそうと試みる。
出品作家はフランシス・アリス、トーマス・デマンド、東恩納裕一、アニッシュ・カプーア、木村友紀、ウドムサック・クリサナミス、宮島達男、トニー・アウスラー、エリザベス・ペイトン、ミシェル・ロブナー、佐伯洋江、榊原澄人、さわひらき、田中功起、ウルフガング・ティルマンス、横井七菜、横溝静。
会　期　2009年3月7日（土）～5月10日（日）
10：30～19：30　月曜日休館
ただし3/30、4/6、4/27、5/4は開館
会　場　サントリーミュージアム［天保山］
大阪市港区海岸通1-5-10
入場料　1000円、高大生・60歳以上700円
小中生無料
招待券は日本建築協会（TEL06-6946-6981）へ。

▶「イタリア美術とナポレオン」京都文化博物館で開催

コルシカ島にあるフェッシュ美術館は、ナポレオン1世の叔父ジョゼフ・フエッシュ枢機卿（1763～1839）個人コレクションを基礎として設立された。現在、イタリア絵画のコレクションはルーヴル美術館に次ぐものである。京都文化博物館では、17・18世紀のイタリアの宗教画や世俗画に加えて、ナポレオン一族の肖像等々の日本初公開作品を紹介する。
会　期　2009年3月27日（金）～5月24日（日）
10：00～18：00（金曜は19：30）
月曜日休館
祝日開館・翌日休館、5/7は臨時開館
会　場　京都文化博物館　4階特別展示室
京都市中京区三条高倉

観覧料　1200円、大高生800円、中小生500円
展　示　サンティ・ディ・ティート《子供時代》フランソワ・ジエラール《戴冠式のナポレオン１世》など約80点
招待券は日本建築協会（TEL06-6946-6981）へ。



聖母子と天使
サンドロ・ボッティチェッリ
1467-70年頃

▶公開研究会「まちづくりの視点からみた京都市新景観政策の一評価」

日本建築学会近畿支部環境保全部会の第４回公開研究会は、京都大学・高田光雄教授からこれまでの京都市の景観政策を聞き、景観条例など景観政策の現状と課題について考える。
後援は㈳日本建築協会。
日　時　2009年３月26日（木）18:30～21:00
会　場　大阪市立大学文化交流センター・大セミナー室（大阪駅前第２ビル６階）
大阪市北区梅田1-2-2
内　容　①講演・まちづくりの視点からみた京都市新景観政策の一評価／高田光雄
②意見交換
参加費　500円（資料代）
定　員　36名
申込み　日本建築学会近畿支部環境保全部会の伊丹康二・大阪大学大学院助教へ。
e-mail: itami@arch.eng.osaka-u.ac.jp

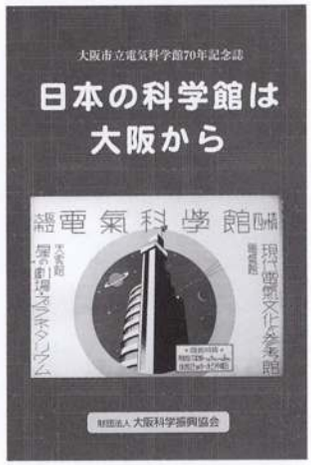
▶企業ミュージアムの協会で見学会

企業ミュージアムの協会主催の３月の見学先は嵐山方面。申し込みは企業ミュージアムの協会（TEL&FAX06-6872-0969）へ。
日　時　2009年３月14日（土）
集　合　9:40京福電鉄嵐山本線「嵐山駅」改札口
見学先　・百人一首の殿堂：時雨殿
・清涼寺（嵯峨釈迦堂）
・甘春堂（嵯峨野会場）で和菓子づくり
参加費　一般4700円（交通費・昼食代は別途）
定　員　20名

会員の横顔

川上貢さん

―「大阪市立電気科学館70年記念誌」で建築設計と施工監理の役割分担を考察



１月初めに、日本建築協会に『日本の科学館は大阪から』が届いた。A4判・204頁の分厚い冊子だ。郵パックの送り主の欄には、ボールペンで「川上貢」とある。

＊

大阪市西区四ツ橋の角地に建ち、日本で初めて導入したプラネタリウムによって子どもたちの星空への憧れを駆り立ててきた大阪市立電気科学館は、平成元年５月に閉館し、同年10月に中之島の阪大理学部跡地に竣工した「大阪市立科学館」へ、その活動の拠点を移した。そして2007年には開設70年を迎えて70年記念誌の企画が持ち上がり、『日本の科学館は大阪から』は平成20年12月に1000冊限定で発行された。発行は、（財）大阪科学振興協会（電話06-6444-5656）。

＊

川上さん執筆の「大阪市立電気科学館の設計者について」では、３頁にわたり「大阪市電気局電気科学館」（当時）の設計者が誰だったかを探る。

昭和12年に竣工した「大阪市電気局電気科学館」の建築設計は大阪市経理部営繕課設計係長・新名種夫とされてきたが、2006年末の朝日新聞科学欄掲載された大阪市電気局営繕係長・大内秀一郎が科学館を設計したのではないかという記事は、川上さんが改めて設計者を検討するきっかけになったのだという。戦前、建築家の地位や業務が確立されていなかった時代に竣工した「大阪市電気局電気科学館」における建築設計者と施工監理の役割分担を検討しようと、施工者・清水組発行の『大阪市電気局電気科学館新築落成記念』など、当時の資料から推論を始めた。



「大阪市立住まいのミュージアム」で2008年日本建築学会賞（業績）を受賞した谷直樹館長（右）との祝賀会の一コマ。2008年８月30日。

＊

東京市に勤め、のち1926年に大阪市に転じた新名種夫は、「建築と社会」の編集常務を担当していた昭和４年ごろからしばしば「建築と社会」に登場し、昭和18年３月号では「電気科学館と同館内プラネタリウムの概要並にその設計に就いて」を執筆している。

川上さんは当時の「建築と社会」「建築雑誌」などから、大阪市立電気科学館の建設は設計と現場監督の担当が分離されていたという特色に注目し、設計は新名種夫を中心に進められ、大内秀一郎は営繕係長として工事監理の重責を負い、現場監督の実際は電気局主計部計理課営繕係技手・大島鎌次郎が担当したと述べる。

当時の大阪市が事業者である建設現場の「もの」と「人」の流れは同記事に詳しいが、同記念誌の販売は大阪市立科学館のショップ内に限られているので、興味をお持ちの方は中之島に建つ大阪市立科学館へお出かけいただきたい。

＊

川上さんは建築史を専攻して京都大学で教鞭をとり、歴史的建造物の遺構や文献資料の調査研究を通じて日本の建築と生活の本質を究めることに心を砕いてきた京都大学名誉教授である。この10年余は、京都の埋蔵文化財の発掘調査にもかかわり、地下に残されたわずかな痕跡を究め、埋蔵文化財の遺跡や遺物の保護に取り組んでいる。

そして、日本建築協会の会員歴も51年となる。

コブレンツ雲井

昨秋、阪急夙川駅にほど近い西宮市雲井町の久出川沿いに「コブレンツ雲井」が完成し、阪神間に古くから育まれてきた上質なコミュニティーの新たな拠点としての活動が始まりました。コブレンツ雲井は、建材商社の王建工業㈱の創設者である永原義夫前社長の自邸であると同時に、多くの自作絵画をのこされた氏の絵画に対する深い造詣を反映した展示ギャラリーをはじめ、近隣の人たちや文化人が憩うサロン・カフェ等のコミュニティー機能をあわせ持つ施設です。

コブレンツとはドイツの地名で、ライン川とモーゼル川の合流地点に位置し、古くから水運の要衝として栄えた地です。すでに建築計画を開始していた約3年前永原夫妻がかの地を訪れた際、川沿いの立地が似ていることと、合流点の地名にちなみ自邸が人と人とが交流できるところになるようにとの願いを込めて永原氏自身により命名されたものです。

外観は阪神間のモダニズムの系譜から、「スパニッシュ風」（永原氏）を意識したものになりました。周辺の街並みに調和する淡いベージュの質感のあるタイルを使うなど景観にも配慮しています。

昨秋の完成記念の「小磯良平展」をかわきりに、次々と展覧会を開催するなど近隣のコミュニティーの拠点としての機能を順調に発揮し始めていた昨年末、誠に残念なことに、永原氏が突然逝去されました。関係者一同衷心よりご冥福をお祈りするとともに、氏の志を受け継いで、夫人と新社長になられたご次男永原穣氏がコブレンツを拠点として夙川文化を継承する活動をこれからも続けていただくことを心から願うものです。

（設楽貞樹　安井建築設計事務所）



【建物概要】

住　所	兵庫県西宮市雲井町8-43
敷地面積	273.95㎡（82.86坪）
構造規模	RC造、3F、B1
建築面積	10,714㎡（32.47坪）
延床面積	44,884㎡（135.01坪）
最高高さ	9.99m（最高軒高　8.74m）
屋根仕上	アスファルト外断熱防ト水の上　屋上緑化
外壁仕上	外断熱の上、タイル貼 1階部分　天然石貼
設　計	基本計画；永原聡
設計監理	安井建築設計事務所
施　工	藤木工務店



小磯良平版画展



永原さんと知り合ったのは何処だったか…財界のパーティーだったか、勉強会だったか…よく憶い出せないのだが、親しく話したのは、或る朝バッタリと出会った雲井橋を一緒に渡りながら…永原氏の夙川へ寄せる熱い想いに心うたれたのだった。

当初は実業家たちの財力によって築かれた住環境であることは確かだが、永原氏のみならず、無数といってもよい住民たちの思い入れが、この町の華やぎとステータスを支えてきた。なかでも、日本初のパークロード構想により整備された夙川公園が「阪神間ブランド」を形成する大きな要因となってきたのは確かだろう。四季折々に見せる風情、桜博士・笹部新太郎が丹精こめた桜…夙川は明治末期から現・片鉾池を中心に遊園地として最初は開けたが、大正九年に阪急「夙川」駅が開業すると、またたく間に高級住宅街となった。雲井町・殿山町界隈には瀟洒なデザインを競う家が集まり、関西学院や神戸女学院を設計したメリル・ヴォーリズの個人住宅も複数あって「ヴォーリズ村」とも呼ばれた。関西初の本格的ホテルと言われた「パイン・クレスト」は阪神間市民の社交場となり、ここで東郷青児と宇野千代が同棲したり、川口松太郎が逗留したりと…そんなエピソードが大正後期から昭和初期にかけて事欠かない。

昭和七年に完成、日本初のカリヨン（組鐘）が取り付けられ、作家・遠藤周作が受洗したという夙川天主公（カトリック）教会は、『黄色い人』や『影法師』といった小説に登場する。オハラさんというアメリカ人が戦災からの復興と満池谷に眠る愛児の冥福とを祈ってクリスマスツリーを羽衣橋に飾るのが街の風物詩となる。夙川の堤に接する御茶屋所町には、画家の須田剋太がアトリエを構えていた。阪神国道（二号線）を歩いていて何度か立ち話できたのも、今は懐かしい思い出である。

右岸から左岸に目を転じると、豪邸の建ち並ぶ名次山は、古く万葉集に詠まれた景勝の地で、アニメにもなった野坂昭如の『火垂の墓』の舞台にも。明治の国民詩人、薄田泣菫は大正以降分銅町に「雑草園」という居宅を構え、『茶話』『艸木虫魚』など随筆を書きつづった。谷崎の名作『細雪』に登場する「マンボウ」（ＪＲを潜る小トンネル）も「一本松」（常盤町）も健在だ。

大石輝一画伯が奥さんの邦子さんと千歳町に建てた『パボーニ』は、夙川の河原の石を使った暖炉や、天井にまで描かれた壁画が独特な佇まいを醸しだす喫茶店だったが、震災で姿を消し、大阪・堂島に扉や調度品ともども移転。往時の面影をしばせる店内では西宮市民の姿をよく見かける。

（河内厚郎　夙川学院短期大学教授）



永原 義夫（ながはら よしお）

昭和５年　大阪府生まれ
昭和27年　大阪府立大学工学部 修了
昭和29年　関西大学法学部 卒業
昭和35年　永原木材工業株式会社 社長
昭和49年　王建工業株式会社 社長

団体役員歴

平成８年５月10日　社団法人関西経済同友会 幹事
平成９年４月１日　財団法人日本建築総合試験所 評議員
平成10年４月１日　社団法人日本建築協会 常任理事
平成10年５月12日　社団法人日本建築材料協会 副会長

賞

昭和61年５月３日　大阪府知事表彰
平成３年７月10日　建設大臣表彰
平成12年10月20日　社団法人日本建築材料協会長感謝状
平成７年４月29日　黄綬褒章
平成13年11月３日　勲五等双光旭日章

ここに紹介するのは、日本建築協会で入手した図書です。数多くの出版物の中ではほんの一部にしか過ぎませんが、どの本にも著者の思いと夢がこもっています。

図書 建築 crossroads 著者

この人がこんなテーマに取り組んでいる、このグループがあの建築人にアプローチした、そんな人物交差点になることを願って、既刊、新刊の図書を紹介します。

書棚●2008.9

まとまりの景観デザイン

形の規制誘導から関係性の作法へ



著　者　小浦久子
発行所　㈱学芸出版社
体　裁　A5判、240頁
定　価　本体価格2600円

●

地域の生活文化の表出である景観をゆっくりと創出する仕組みがいま、必要だ。形の規制誘導だけでなく、周辺との関係を意識した景観づくりへと導く計画、協議の仕組み、景観法の生かし方を説く。

書棚●2008.10

まちなか戸建

持家化社会のまちづくり



著　者　森本信明＋前田享宏
発行所　㈱学芸出版社
体　裁　A5判、256頁
定　価　本体価格2700円

●

新規住宅の半分以上をミニ開発・ミニ戸建が占め、スラム化の恐れを指摘されながらも普及した事情を分析し、最新の住宅性能や地域ビルダーの成長、町並み形成型開発を展望、低中層市街地への変革を提起する。

書棚●2008.10

建築・土木 基礎の耐震設計と解析例



監　修　吉田 巌・世良耕作・平原 勲
編　集　基礎工事編集委員会
発行所　㈱総合土木研究所
体　裁　A5判、452頁
定　価　本体価格3600円

●

月刊誌「基礎工」に連載された土木・建築での耐震設計の見直しの成果に、計算実例として設計計算例と動的解析例を加筆したもの。

書棚●2008.10

〈住宅〉の歴史社会学



著　者　祐成保志（すけなり・やすし）
発行所　㈱新曜社
体　裁　A5判、上製本、334頁
定　価　本体価格3600円

●

住宅が「身の丈に合っていない住宅難」の今の時代に、あらためて住宅について何が問われてきたかを問う書。大正〜昭和初期の日本建築協会の住宅改良運動も紹介されている。

書棚●2008.10

武蔵野美術大学80周年記念出版

建築 板垣鷹穂



著　者　板垣鷹穂
発行所　㈱武蔵野美術大学出版局
体　裁　A5判変形、443頁
定　価　本体価格4572円

●

昭和41年まで武蔵野美術大学において西洋美術史を担当した板垣鷹穂の、昭和17年に育生社弘道閣から出版した著書に写真図版を入れ、復刊した。戦前の「建築と社会」誌からも引用。

書棚●2008.11

地域と大学の共創まちづくり



編　著　小林英嗣＋地域・大学連携まちづくり研究会
発行所　㈱学芸出版社
体　裁　B5判変形、192頁
定　価　本体価格3800円

●

地域と大学が連携し協働した中心市街地再生や地域資源活用から、環境のマネジメント、地域経済の創出、その担い手育成・仕組みづくりなどの事例を掲載。

書棚●2008.11

建築史に何ができるか

町並み調査と町づくり



著　者　西 和夫
発行所　㈱彰国社
体　裁　四六判、245頁
定　価　本体価格2200円

●

神奈川大学建築史研究室とともに「町の歴史を調べ、町の中の歴史的な建物を知り、それを生かして『歴史を生かした町づくり』をしようと試みた」（西和夫）その足跡を記す。

書棚●2008.11

シビックプライド

都市のコミュニケーションをデザインする



監　修　伊藤香織＋紫牟田伸子
編　者　シビックプライド研究会
発行所　㈱宣伝会議
体　裁　A5判、224頁
定　価　本体価格1900円

●

読売広告社都市生活研究局は「シビックプライド」（市民が都市に対してもつ自負と愛着）の研究を2006年より開始。本書はヨーロッパの都市を取材・分析したもの。

日本建築協会 月間の動き 平成21年1月分

理事会

第7回常任理事会
1月28日（水）16：00～17：30
出席者　中井会長ほか8名
議　事（1）平成20年度収支見込み
（2）平成21年度常設委員会事業計画
（3）後援名義等の使用承諾
（4）平成21年度理事会、総会日程について
（5）国土交通省の検査結果
（6）その他報告事項

編集委員会

第10回編集委員会
1月14日（水）18：00～19：00
出席者　設楽委員長ほか4名
議　事（1）2月号「水の都、にぎわいのある未来に向けて」特集の報告
（2）3月号「東海支部」特集の報告
（3）4月号特集の報告
（4）5月号特集の報告
（5）各小委員会・分科会の報告
（6）収支状況報告

第11回法令分科会
1月21日（金）15：00～15：40
出席者　谷本幹事ほか2名
議　事（1）「法令コーナー」の企画
（2）情報交換

第4回建築系分科会
1月15日（月）19：00～20：30
出席者　神戸幹事ほか4名
議　事　2009年7月号特集企画案検討

第5回建築系分科会
1月29日（木）20：00～21：30
出席者　神戸幹事ほか4名
議　事　7月号特集企画案検討

第4回計画系分科会
1月16日（金）19：00～22：00
出席者　飯田幹事ほか3名
議　事　4月号「楽しい福祉」（仮称）特集の企画

第5回計画系分科会
1月26日（月）19：00～22：00
出席者　飯田幹事ほか3名
議　事　4月号「楽しい福祉」（仮称）特集の企画

第6回設備分科会
1月7日（水）18：00～19：50
出席者　赤澤幹事ほか3名
議　事（1）「設備の頁」の企画
（2）2009年6月号設備特集の具体化へ
（3）新企画の提案
（4）見学会の提案
（5）“測定機器シリーズ”頁

第2回インテリア・住宅系分科会
1月19日（金）18：30～20：45
出席者　神谷幹事ほか1名
議　事　5月号インテリア・住宅系特集の企画

第3回インテリア・住宅系分科会
1月30日（金）18：30～20：30
出席者　神谷幹事ほか2名
議　事　5月号「五感とインテリア」（仮称）特集の企画

第10回作品作風小委員会
1月29日（木）19：00～20：00
出席者　居内副委員長ほか5名
議　事（1）作品の選定
（2）作品の掲載状況並びに掲載予定の報告
（3）「gallery」掲載報告・予定

第10回広告企画小委員会
1月14日（水）17：00～18：00
出席者　設楽委員長ほか6名
議　事（1）2月号特集「水の都、にぎわいのある未来に向けて」経過報告
（2）3月号特集「東海支部」報告
（3）いち押しアンケートの報告
（4）広告掲載状況の報告
（5）収支状況報告

事業委員会

第6回情報見学小委員会
1月8日（木）18：00～18：45
出席者　瀬戸川委員長ほか10名
議　事（1）本年度事業について
・武庫川女子大学建築スタジオ見学会
・清流亭茶室　実施報告
（2）来年度事業案件　ほか

出版委員会

第9回出版委員会
1月15日（木）18：00～19：00
出席者　上原委員長ほか6名
議　事（1）〈プロのノウハウ〉と特装本の経過報告
（2）進行中のテーマ
（3）その他

教育委員会

第3回工高生教育小委員会
1月16日（金）18：00～20：00
出席者　神野副委員長ほか4名
議　事（1）第55回工高生デザインコンクール募集規定原案の検討
（2）今後の作業予定等
（3）その他

「建築と社会」史料研究会

第1回「建築と社会」史料研究会
1月27日（火）17：30～19：30
出席者　山形委員長ほか5名
議　事　「再読 関西近代建築―モダンエイジの建築遺産」連載企画内容検討

入会者（敬称略）

〔団体正会員〕
北陵高等学校
〔個人正会員〕
酒井　一光　大阪歴史博物館
前田　　衛　㈱日建設計

東海支部

第8回役員会
1月30日（金）18：00～
出席者　佐伯支部長ほか13名
場　所　愛知建築士会会議室
議　事（1）支部復活50周年準備委員会
（2）「建築と社会」東海特集号
（3）次年度役員構成
（4）支部の動き

▼「清流亭」茶室見学会
紅葉した庭園を散策　2008年12月6日（土）





「建築と社会」誌

特集一覧●1987~2008

大正6年3月に誕生した日本建築協会（当時・関西建築協会）の、機関誌は大正6年9月に「関西建築協会雑誌」と題して創刊された。大正8年に「日本建築協会雑誌」、さらに1年後には「建築と社会」と改題し、今日に至っている。

取り上げてきた特集テーマは下記のとおりで、バックナンバー購入希望は、日本建築協会事務局（TEL 06-6946-6981、FAX 06-6946-6984）まで。販売価格は1200円（送料・消費税含）。

号	1	2	3	4	5	6	7	8	9	10	11	12
1987 vol.68	●入浴物語	●腐食	●創立70周年記念号	●躍動する東海へ	●貯蔵・保管施設 ●大阪府立体育会館	●室内の仕上床	●駅	●行政建築家の可能性	●シティホテルの設備	●宝塚の街づくり＊	●建物と町並みの接点 ●昭和設計作品集	●第34回青年技術者
1988 vol.69	●ホテル物語	●軟弱地盤と基礎 ●文化と伝統—東海からの報告	●設備におけるLCCとリフレッシュ ●東畑建築事務所作品集	●建物の外装リフレッシュ＊	●都心居住	●中国地方の展望とひろしまのまちなみ	●21世紀への照明＊	●制振＊	●超高層住宅を考える	●集合住宅のリフレッシュ＊ ●大阪府営善	●第35回青年技術者 ●800号記念＊	●讀賣テレビ
1989 vol.70	●夢をのせる輸送設備	●リゾート事情 ●竹中工務店創立90周年記念	●色の復権 ●東海の新建築と伝統技術＊	●省力化のための材料・工法	●まちづくりと法	●博覧会とまちづくり	●都市環境創造と設備I	●建築とアート	●構造の省力化 ●鹿島建設大阪支店建築設計部作品集	●都市環境創造と設備II ●ユーザー参加のハウジング	●第36回青年技術者	●最近の博覧会パビリオン
1990 vol.71	●商品化住宅のデザイン＊	●ニュータウン・ルネサンス	●東海の都市景観 ●佐賀市文化会館＊	●スケール感	●プレハブ住宅技術の現在と未来	●国際花と緑の博覧会	●建築家のための設備知識—中規模オフィスビルによるケーススタディー	●高強度化—設計の多様化をめざして—＊	●やわらかな住宅管理・ユーザーの役割	●都市のナイス・プレイス ●兵庫県営緒の歩み	●第37回青年技術者 ●和歌山県の展望と景観＊	●高級感—建物の顔：感性の時代を迎えての外装材
1991 vol.72	●新しい都市空間づくり—I—	●オフィス・プレジャー ●新しい都市空間づくり—II— ●建築の風景	●東海支部復活30周年記念	●大阪東京海上ビルディング	●今、京都 ●建築家のための設備知識—複合商業ビルによるケーススタディー	●建築と土木 ●毎日放送本社ビル ●近畿地方建設局営繕部	●一般号＊	●建築をめぐるトラブルとその解決 ●建設現場のイメージアップ作戦	●空間のアイデンティティ ●きんでん写真集 ●大建設計40周年	●自治体住宅政策への提言 ●大林組創業100年記念	●建築と土木—構造技術の世界— ●第38回青年技術者	●スリムでタフなコンクリート ●21世紀の住まいを考えるシンポジウム
1992 vol.73	●夢物語—人がかわる、まちがかわる—	●こだわりのインテリア ●近畿の郵政建築15年の歩み	●建築とデザイン—東海支部—＊	●建築家のための設備知識—集合高層住宅の設備システム—	●地球環境時代の建築	●街創り、住まい創り—住宅・都市整備公団関西支社10周年—	●木構造を使ってみませんか—集成材による構造—＊	●接着—建築分野への限りなき可能性	●中国地方の町並みと建築家の「語り、夢、作品」＊	●屋台—仮設の魅力に学ぶ— ●ハウジングのメインストリームを探る	●いま建築教育に何が期待されているか	●京のかたちと色
1993 vol.74	●第39回青年技術者 ●東畑建築事務所創立60周年記念作品集	●大阪府営繕	●東海の美術館・博物館	●市民劇場の舞台設備	●環境—限りある自然と建築とのかかわり	●都市のスカイライン	●映画の中のインテリア ●けいはんなプラザ・住友ホール	●建築の再生—構造技術の役割— ●大阪市営繕	●国際的パートナーシップの可能性	●福祉のまちづくり	●都市型住宅再考	●第40回青年技術者 ●環境—人にやさしい空間創造をめざして
1994 vol.75	●コピー文化の新時代 ●広島の街創りアジア競技大会	●九州のインスタレーションと貌	●伊勢・神宮式年遷宮と神宮界隈＊	●建築のエネルギーシステム	●明日に向かって—会員作品＊	●いま、医療施設は	●住空間における居どころへの視点	●まちなかの看板 ●竹中工務店の集合住宅	●水と建築 ●日本建築総合試験所	●建築設備のCGシミュレーション ●村野、森建築事務所	●構造美—建築の中の美 ●集合住宅団地リニューアル	●第41回青年技術者 ●関西国際空港
1995 vol.76	●光がつくる風合の世界＊	●音—騒音から操音/創音へ	●飛騨・美濃—まちの活性化と地方文化＊	●トイレから見た都市文化	●トイレ空間	●接合 ●コスモタワー	●ユニバーサルデザインとは	●私の空間作法—会員作品	●新しい「都市・建築」の視点＊	●建築構造と社会の接点 ●日建設計＊	●ライフラインと建築設備＊	●第42回青年技術者 ●滋賀県建築課
1996 vol.77	●阪神大震災から学ぶ＊	●大阪府住宅供給公社創立30周年記念＊	●遠江—その地方振興と文化＊	●立体駐車場設備 ●大建設計	●災害！非常時に生きる法体系 ●OAPタワーズ	●いま、プールがおもしろい	●住まいの未来像	●マルチメディアがつくる世界	●キーコンセプトの新時代	●最新の大規模スポーツ競技施設の設備	●私の空間作法'96 ●九州の元気 ●りんくうの3作品	●第43回青年技術者 ●近畿地建営繕部
1997 vol.78	●建築のロングライフ化をめざして	●鉄ものがたり＊	●東海支部会員作品 ●金沢・能登—風土・文化とまちなみ・建築＊	●創立80周年記念/建築と私と社会—80人の眼—＊	●木造建築物の伝統技術とその将来	●住む空間の復興—法・制度の運用と新たな展開へ— ●住都公団関西支社	●素材の不思議 ●大阪ドーム	●新エネルギー ●住宅・都市整備公団改革への提言	●クロスワード都市OSAKA＊	●モザイク都市の住むかたち ●昭和設計40周年	●私の空間作法—会員作品—	●第44回青年技術者 ●京都駅ビル
1998 vol.79	●新しいまちづくりの予感 ●東畑建築事務所創立65周年	●Concrete ●九州とわたし、そして建築	●東海支部会員作品 ●信州—諏訪とその周辺—	●街並みの演出—最近の外構材料	●生活環境の安全・安心	●地球環境保全と建築	●心と体を元気にするインテリア	●建築設備—ビルメンテナンスの立場から	●建築への証言'98—21世紀に向けて	●ゆれをとめる—たえる技術からかわす技術へ	●私の空間作法 ●2001年の医療施設	●第45回青年技術者 ●駅とともに歩んだJR西日本の12年
1999 vol.80	●“らしさ”のデザイン ●建築を綾どる小粋なモノの仕掛人	●大阪市都市整備局	●東海支部会員作品'99 ●北信濃—街並み修景と地域文化の再構築	●都市のパブリック	●関西建築界の流れと東畑謙三の足跡をたどる	●大阪城天守閣平成の大改修	●改正建築基準法—まちづくり・すまいづくりへの展開—	●私の目でみた環境問題	●アーバンインテリア—都市空間としてのインテリア	●木とともに	●私の空間作法	●第46回青年技術者
2000 vol.81	●21世紀のデザインの動向を見る ●安井建築設計事務所創業75周年	●中国支部—しまなみ海道と中国地方の街づくり—	●東海支部会員作品2000 ●越中・富山—地域文化の振興と新たな施設づくりの流れ	●こころを癒す環境デザイン	●測る—測定方法と測定結果が意味するもの—	●スケルトン&インフィル	●改正建築基準法—パートII—	●100年後へのメッセージ ●日建設計創業100周年	●来世紀に引き継ぐ—わざ、もの、こころ—	●時間	●私の空間作法—会員作品— ●21世紀の高齢者の居住環境	●第47回青年技術者
2001 vol.82	●エヌ・ティ・ティファシリティーズ	●21世紀の建築設計教育	●東海支部会員作品 ●岐阜・大垣	●ＩＴ社会におけるきずな	●自然素材をめぐる「もの・わざ・ひと」	●成熟社会をささえるまちづくり	●現代の日本の空間・文化を探る	●環境—近未来に向けて今できること— ●大建設計—作品特集1996~2001—	●建築の力都市の力	●緊張 ●都市基盤整備公団関西支社	●私の空間作法—会員作品—	●第48回青年技術者 ●NHK大阪放送会館・大阪歴史博物館＊
2002 vol.83	●国土交通省近畿地方整備局営繕部＊	●再生・リサイクル	●東海支部会員作品 ●愛知・名古屋	●生活環境の安全・安心—パート2—	●塗装のいろいろ	●都市再生に向けた建築基準法集団規定のあり方	●いま、インテリアデザインは ●濃町リバーブレイス	●建築をささえるセンサー	●建築とボランティア	●時を超えて～サステナブルエンジニアリングの現在～	●私の空間作法—会員作品—	●第49回青年技術者 ●大阪市中央公会堂
2003 vol.84	●東畑建築事務所創立70周年	●九州の地域づくり・まちづくり	●東海支部会員作品2003 ●愛知・名古屋—この地の文化・芸術と建築・街づくりを考える—	●サスティナビリティ～次世代に引き継ぐ都市・建築・暮らしのデザイン～	●建築と五感	●都市計画法及び建築基準法等の改正	●コンバージョン—インテリアから発信するまちなみ—	●介護と建築・設備	●建築とノスタルジー～建築の主観的価値について～	●力と楽しくつき合う方法	●私の空間作法—会員作品—	●第50回青年技術者十青年技術者顕彰50年
2004 vol.85	●大阪市住宅局	●都市緑化	●東海支部会員作品 ●愛・地球博＊	●省リスクな「まち再生」＊	●リニューアルの技	●地域住民主体のまちづくりと支援制度	●Product Design＋1	●銭湯～心地よさを求めて～	●建築家とは何か	●巨大地震にそなえて	●私の空間作法—会員作品—	●第51回青年技術者
2005 vol.86	●震災から10年	●「健やか」 ●長崎医療センター	●東海支部会員作品2005 ●東海における施設づくりへの新たな試み	●建築の経済化	●住まい方の変化	●人工栽培	●次世代に伝える「木」の建築 ●「建築と社会」1000号記念	●改正建築基準法と景観緑三法	●火災から守る	●構造の過去から未来へ＊	●私の空間作法—会員作品—	●第52回青年技術者
2006 vol.87	●都市環境デザインと参加のまちづくり	●「地方空港の時代」～まちと共存する空港づくり～	●東海支部会員作品2006＋東海支部特集3部作＊	●都市再生の本質～光と影のはざまで～	●変容する家族形態とあたらしいライフスタイル	●身近な省エネルギー～エネルギーをたくわえ、有効利用する～	●設計図が伝えるもの	●建築物の安全・安心＊	●第53回青年技術者	●「セキュリティ」	●もしも…～構造が未来へつなぐ夢～	●私の空間作法—会員作品—
2007 vol.88	●光り輝く京都の景観まちづくり	●学校新時代	●東海支部会員作品2007＋東海支部特集3部作	●創立90周年記念—この10年、これからの10年	●あそび考	●こだわりが創る住まいのカタチ	●住まいの設備と空間の移り変わり	●建築系雑誌が伝えるもの	●建築基準法等大改正	●第54回青年技術者	●ガラスを考える	●楽しい構造の世界
2008 vol.89	●私の空間作法—会員作品—	●PFI事業、その後	●東海支部会員作品2008＋東海支部特集3部作	●まちづくり2011年宣言	●新ホテル物語	●設備に役立つ地震対策	●中国地方を訪ね歩いて見えるもの ●小林聖心女子学院	●建築と景観	●第55回青年技術者	●木造住宅を巡って	●建築においてROBOTが活躍する日は来るのか？	●自然と戦う構造

＊は欠号

「建築と社会」誌へのご意見をお寄せください

—返信はFAX 06-6946-6984で—

（社）日本建築協会の「建築と社会」は、会員及び関係者のみなさまのご協力のもと発行しておりますが、ここで誌面の見直しと今後の誌面づくりをさぐるため、アンケートをさせていただくことにいたしました。ご協力をお願いします。

なお、アンケートにより得られた情報は、目的以外には使用いたしません。

●「建築と社会」に対する感想は?

内容・構成	□よい	□ふつう	□不満
表紙	□よい	□ふつう	□不満
誌面デザイン	□よい	□ふつう	□不満
頁数	□適度	□ふつう	□不満
総合して	□よい	□ふつう	□不満

●本誌に対する具体的なご意見をお聞かせください。

●「建築と社会」 □ 月号のどのコーナーの情報が役に立ちましたか?（複数回答可）

□会告

□作品作風　□研究の風景　□gallery

□特集記事（テーマや執筆者名は?　　）

□法令コーナー　□設備の頁　□構造の頁　□新建材の頁　□読者の頁

□REPORT（環境保全部会REPORT、 投稿REPORT、 その他の投稿）

□information

□書評・新刊紹介、 その他の記事（　　）

□月間の動き

●どのように役立ちましたか?

●今後取り上げてほしい分野・テーマ、またはご意見があればお聞かせください。

回答者名＿＿＿＿＿＿＿＿　連絡先＿＿＿＿＿＿＿＿

年代　□20歳以下　□20代　□30代　□40代　□50代　□60代　□70代　□80歳以上

専門　□計画分野　□意匠　□構造　□設備　□施工　□その他（　　）

業種　□設計事務所　□建設会社　□設備会社　□設備・建材メーカー　□教職員

□学生　□その他（　　）

＊チェックを入れてください。

ご協力ありがとうございました。

空調・衛生・クリーンルーム設備
（設計・施工）

朝日工業社

本社・本店　東京都港区浜松町1-25-7　電話03(3432)5711
大阪支社　大阪市淀川区加島1-58-59　電話06(6302)2270
支　　店　北海道/東北/北関東/横浜/名古屋/中国/九州

電気・空調・衛生・防災・産業廃水設備
設　計　施　工

ダイダン株式会社

本店・大阪本社　〒550-0002 大阪市西区江戸堀1丁目9番25号　電話(06)6441-8231
東京本社　〒102-0071 東京都千代田区富士見2丁目15番10号　電話(03)3261-8231
支　社　名古屋・福岡
支　店　札幌・仙台・新潟・大宮・千葉・横浜・金沢・京都・神戸・天理・岡山・広島・高松・熊本
営業所　帯広・函館・青森・秋田・盛岡・前橋・長野・静岡・豊田・津・富山・福井・徳山・松山・高知・北九州・鹿児島・那覇
出張所　旭川・福島・川崎・松江・徳島・下関・長崎・大分・宮崎
海外支店　シンガポール・ホンコン
技術研究所　〒354-0044 埼玉県入間郡三芳町大字北永井390番地　電話(0492)58-1511

www.naniwa.com
We have hope

■印刷事業 ポスター、カタログ、パンフレット、書籍、年鑑、社史、雑誌、文字、画像データ処理
■メディア事業 SPプランニング・コンサルティング、ITソリューション、web及びメディアコンテンツ企画制作

株式会社NPCコーポレーション
本　社　〒530-0043 大阪市北区天満1-9-19
tel:(06)6351-7271(代) fax:(06)6352-7479
第二ビル　〒530-0043 大阪市北区天満1-11-8
tel:(06)6351-0128(代) fax:(06)6351-0208
東京支社　〒105-0004 東京都港区浜松町1-2-1 一光浜松町ビル7F
tel:(03)3433-5211(代) fax:(03)5776-7733
（旧社名ナニワ印刷㈱、日本データネット㈱）

地球環境を守り、100年建築に貢献する
NACL のアルミ表面処理
株式会社日本電気化学工業所
http://nacl.jp　E-mail:sc@nacl.co.jp
本部営業部　〒560-0036 大阪府豊中市蛍池西町2丁目7番26号 NACLﾋﾞﾙ2階
TEL (06)6843-1235(代) FAX (06)6853-1632
東京事務所　〒111-0051 東京都台東区蔵前2丁目7-2 東京NACLﾋﾞﾙ
TEL (03)3862-0978(代) FAX (03)3862-7098

デンカCSAファミリー製品

●デンカCSA（膨張性混和材）　コンクリートのひびわれ防止に
●デンカタスコン（グラウト用無収縮材）　鉄骨ベース、逆打部の充填モルタルに
●デンカキューテックス（止水・補修用急硬セメント）　コンクリート躯体の漏水補修に
●デンカES（土質安定用急硬材）　地盤補強用薬注入
●デンカΣ1000（製品用超高度混和材）　コンクリートパイルの早期出荷とハイモメント製造用に

電気化学工業株式会社
近畿地区販売店

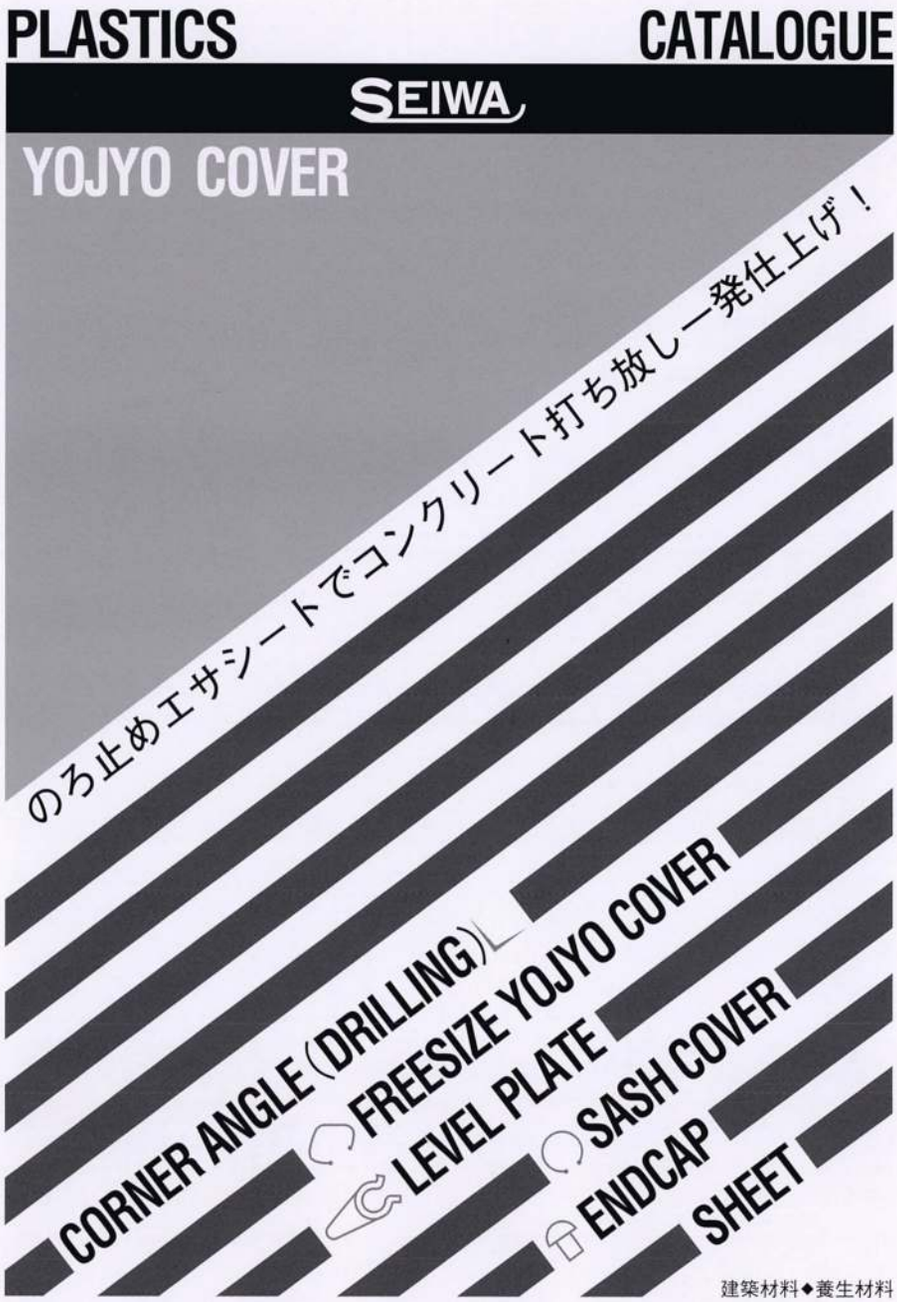
金森藤平商事株式会社
TEL 大阪（06）6332－6861
TEL 東京（03）3272－8501

浜宗産業株式会社
TEL 本社・京都・京丹後（0772）72－2220
舞　鶴（0773）76－0133

小浦産業株式会社
TEL 大阪（06）6443－6181

新しい空間の創造と

安心へのこだわりを求めて！



私達は安心と信頼に挑戦しつづけます。

成和養生株式会社

養生カバー・サッシュカバー・建築養生材一式・内装工事一式・建築工事一式

〒550-0015 大阪市西区南堀江1-20-17
TEL.(06)6531-3201(代表) FAX.(06)6541-0160